AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＡＫＢ４８　少女たちの軌跡と少年の奇跡

【Ｎコード】

Ｎ３９８５Ｕ

【作者名】

夢

【あらすじ】

人気アイドル境直人は、４８人の少女で構成されたアイドルグループＡＫＢ４８のマネージャーとなる。メンバー一人一人の心を癒し、少年は少女たちを成長させていく。

第一話　中学卒業

第一話　中学卒業

「やっぱり境直人はすげえなぁ」
「そうね。デビューしてすぐアイドルランキングとか一位だもんねぇ」
完璧な歌声と容姿で人気を得た境直人は中学卒業を迎え、屋上で寝そべっていた。
「いい風だ」
それが中学校生活に残した最後の言葉だった。
「敦子と優子は今頃美術室かなぁ」
直人は空を見て微笑む。
「出番が来た」
そして、ＡＫＢが舞台にたつ準備に入る。

美術室では、後にセンターとなる前田敦子と大島優子が話していた。
「敦子、ほんとにできるの？多勢の前で歌える？
「うん、直人がいたら、大丈夫だと思う」
「ナオ君もきっとあなたを守ってくれるでしょ」
二人がアイドルになろうと決心したのは、この瞬間だった。

第二話　アイドル（前書き）

これは、全くではないですが、ＡＫＢのｉｆストーリーです。
今回はチーム結成をして半年ほどという設定です。
一応、正規は４８人ですが、大島麻衣や小野恵令奈などがいたりと
ちょっと人数設定があやふやになっていますのでご了承ください。

第二話　アイドル

境直人の中学卒業から、ちょうど一年が経とうとしていた。
「康さん、一応メンバーはそれなりに集めましたけど、レッスンとか、公演とかどうすんすか。上には期待してくれって言っちゃいましたよ」
「いいんだよ境君。君は物事をマイナス思考に考える男ではないだろうに」
とある劇場の控え室。境直人と、秋元康がいた。
「マイナス思考とかそういう問題じゃないでしょう。チームは皆素人の女の子。中には、子供のころから女優としてやってきた人とかいますけど」
「まあ、そう焦らなくてもいいだろう。ＡＫＢは、君のチームなんだよ」
「僕のチーム、ですか・・・」
そうだ。あれは、僕が作ったチームなんだ。

中学卒業後、直人は秋葉原を拠点においたアイドルグループＡＫＢ４８を結成した。正規メンバーは４８人。それに研究生を交えている。実際は正規に予備メンバーがいたりするのだが、そこはそこだ。あまり気にしてはいけない。
半年間、彼はスカウトに励んだ。
メンバーの条件はただ一つ。諦めない心を持った少女。
彼はまず、昔からの友人である前田敦子と大島優子を誘ってみた。二人はすぐに了承してくれた。
その後、とりあえず、宣伝してみようと思って全国にポスターを配布した。
応募者は１０００人を超えたので、結果的にその中から直人が決めることになったのだが、人を比べるのを好まない直人はそれがで

きなかった。そのため、くじ？のような結果になった。
親の反対。駄目だったらどうしようという恐怖感。それが原因で、メンバーになれないものもいた。
直人は一人ずつ会い、勧誘していった。
その結果、メンバーはそろったわけである。結果的に直人のチームだ。
「康さん、あんたは僕の恩師だ。だけど、本当にこれでいいのかな？」
「ああ、いいとも」
「・・・そっか。じゃあ僕は、これからメンバーに会ってくるよ」
直人はその部屋のドアノブに手を差し伸べる。
「逃げない僕たちに、非常口はいらない・・・か」
直人は秋元康とはまた別の恩師（命の恩人）の口癖を、呟いた。
直人は、その言葉の感想を述べる。
「ドラマの名言だな」

第三話　デビューの準備

一つの広場に集まれた４８人の少女たち。
そこは、ダンスレッスンルームと呼ばれる場所だった。
「直人、こんなに女の子集めて、ほんとにアイドルグループ作るつもりなんだね」
４８人の中に、敦子がいた。彼女は優子と一緒にいる。
この二人は、直人が一番最初に誘った人物である。敦子と優子はすぐに了承してくれた。
二人の周りには同世代の女の子ばかりだった。
「ねえ、私、『長髪の直人』に誘われたんだけど」
「私もなんだぁ」
直人は、髪が女の子のように腰まであり、それを一まとめしていることから『長髪の直人』と呼ばれている。彼は中学三年生の二学期頃に伸ばし始めた。ちょうど一年がたった今、髪は腰まで伸びている。
ガールズトークがあちこちで聞こえる中、ダンスレッスンルームい一人の少年が入ってきた。少年は長い髪を翻し、中央の鏡の前に立つ。
「みなさん、はじめまして。境直人です」
直人はお辞儀をする。少女たちもお辞儀をする。頭を上げた直人はふっと微笑む。
「みんな、着てくれてありがとう。聞いたとおり、僕は君たちを、アイドルグループＡＫＢ４８として成長させたいと思う。まず、君たちにはこれを見てもらう」
そう言って直人はみんなに書類を渡していく。
「今ここにいる、メンバー最優先候補者のリストだ。他の女の子たちのことをよく知ってほしいと思う。レッスンする前に、まずはこれからだ」

直人はそう言いながらその場にしゃがみこんだ。
正座で。
「さあ、今から自己紹介タイムだ」
直人は腕時計を見る。
「約三十分・・・・そんぐらいあったら十分か。はい」
直人は両手をあわせ、パチンと鳴らした。
「自己紹介タイムスタート」

第四話　自己紹介タイム

「自己紹介タイム、スタート」

直人のその一言により、静寂だったルームがざわざわと騒ぎ始める。

直人がレッスンルームに入るまでに、もう会話を始めた者なども いた。たぶんもうちゃんとした初対面も済ませただろうと思う。だが、直人は、もっとたくさんの人を知ってほしかった。だから自己紹介タイムを実地した。直人は正座を崩さないまま皆の様子を伺う。ここにいる少女は全員直人がスカウトした。

ここにいる４８人はそれぞれ同年代の女子と打ち解けていたる者が多かった。

宣伝を行っていたときはまだ実感が湧いてこなかった。だけど、応募してきた少女たちはただの興味本意で応募している人たちもいたが、自身のアピールから、本気でアイドルを目指しているという少女が分かった。その中から、６０人ほど選んだ。そして、前田敦子、大島優子をスカウトし、ＯＫしてくれた。

その後、選んだ６０人に直人が会いに行った。一人ずつ、住んでいる家まで行き、両親の許可を得る。それで初めてスカウト成功になる。時に問題も起こったが６０人が６０人スカウトに成功した。そして最後に、境直人は篠田麻里子に出会った。

「麻里子さんは、ほんとスカウトに苦労したよなぁ」

そうだ。カフェで働いていた背の高い女性。いや、大人びた少女と言うほうが正しいのだろう。

６０人と直人自らがスカウトした３人の中から正規メンバーの最優先候補を４８人選び、ここに呼び出した。

「スカウトするのになんであんな苦労したんだろう」

直人は天井を見る。そして思い出す。この半年間に渡る、少女たちとの出会いを。

「残り十分。なんかみんなの顔が笑顔でいっぱいだ」
これできっと、このチームはそれぞれ仲良しの子を見つける。敦子も今麻里子と喋っていた。
「なぜだろう。昨日までがとても昔のような気がする。とても懐かしい・・・」
自分の両手の掌を見下ろす直人。
「俺も、どれだけもつだろうか・・・」
また天井を見上げる直人。
直人の脳裏に浮かんだのは、麻里子との出会い。

第四話　自己紹介タイム（後書き）

この物語は、ところどころで、メンバーのスカウトをしていた日々の場面が流れます。設定は直人の回想です。次回は篠田麻里子との出会いを描いてます。

第五話　麻里子との出会い

それは、直人が麻里子と出会った日の出来事。

直人は自身の特徴と言っていい後ろの髪をジャケットで隠し帽子をかぶって秋葉原を歩いていた。

誰も彼が境直人とは気づいていない。

「僕って、そんなに人気なかったかなぁ」

通行人が自分に気づいて騒がないのは自分の人気にあると思っている直人。

能天気の彼は、上を向きながら歩いていた。

直人の目的は、ＡＫＢの劇場に選んだ建物の点検。

「なんか、喉かわいたなぁ」

辺りを見回し、近くの喫茶店へ。この時間帯は出入りが多いらしく、人が多かった。直人はカウンターから遠い窓際の席に座った。頼んだのはアップルティー。熱め。直人は一日に五回紅茶を飲むことがある。暇さえあれば飲むというタイプ。

「紅茶をお持ちしました」

少し長身の少女が紅茶を持ってきた。

「ありが……」

お礼を言おうとして少女の顔を見た瞬間、言葉がとまった。

どう説明したらいいだろう。なんていうか、綺麗だった。可愛い笑顔と、整えられた髪。完璧だと一瞬思った。こんな人が、チームに加入してくれれば……

「君……」

しかし、それだけではなかった。

ＡＫＢを考案した秋元康。結成を実行する境直人。

芸能界に出たいと、あらゆる気持ちがこもるメンバーオーディションの応募。

そして、選ばれなかった少女たち。
「なんでしょう？」
ウエイトレスの少女が問いかける。
そうだ、この少女は……
「いや、なんでもないよ。紅茶、おいしいよ」
「ありがとうございます。それでは……」
あのウエイトレスの少女は、応募に受からなかった少女たちの一人だ。
こんな近くに、いたのか。夢が叶わなかった人が。
「……」
直人は感じた。ただの見当違いかもしれないが、この少女には才能がある。
ちらっと店内を見回す。《当店人気ウエイトレス第一位！篠田麻里子！》と掻かれた名札と、その上に先ほどの少女の写真。
決めた。
この少女も、チームに加入させよう。
あの子には、類まれぬ素質がある。僕はそう思う。
「君！」
「はい？」
少女は、篠田麻里子は振り返る。
「ちょっと、いいかな？」
直人の目にとまった一人の少女。
直人と麻里子の出会い。
直人は麻里子にチームへの勧誘をし、麻里子はすぐに了承する。

秋元康は、賛成することも、反対することもなく、話を聞くと、ふっと笑った。

第六話　対面

自己紹介タイムは終わった。これで一通りの流れが終わった。
「さて、どうしようかねぇ」
直人は、優れた頭脳を持っている。その頭脳を活かして、彼はいくつもの計画を練り、ファンをサプライズに導いた。だが、計画性はもっていない。
自己紹介をした後の計画を、直人は考えていなかった。
「えっと、一通り終わったみたいだね。どうだったかな？」
直人は時間稼ぎをするのと同時に、次はどうするかを考える。
「これで、メンバー同士の対面は終わったね。じゃあ次は・・・」
どうする、どうするんだ僕！
直人が、考えていたときだった。
突如、レッスンルームの扉が開かれた。そこから現れたのは、秋元康だった。
「やあ、はじめまして。総合プロデューサーの秋元康だ」
言いながら、康は直人のところまで歩いてきた。
「どうも」
「苦戦しているようだね」
「分かりますか」
「君は分かりやすい」
直人と短い会話を終わらしたところで、康は少女たちを見回す。
「一ヵ月後に、初の公演を行ってもらいます。みんな、しっかりダンスの練習をしてください」
「待ってください！」
直人が康に講義する。
「素人の彼女たちに、たった一ヶ月で歌とダンスを完璧にしろっていうんですか！」
「そうです」

「なっ……」
直人はたじろぐように康から距離を取る。
「頑張ってください。以上」
秋元康はそのままレッスンルームを出て行った。
「やってくれるじゃないか。康さん」
直人は少女たちを見回す。
少女たちの顔色には、不安の曇りが見られた。
だけど、それを僕が笑顔にしなければいけない。
「まずは、歌だ」

第七話　レッスン・歌

直人は秋元康がレッスンルームから出ていって数分後に行動に移った。

「じゃあまずは歌からはじめたい。えっと……」

様々な理由で女の子たちを集めては見たが、実際に歌が上手いのかどうかは言いがたい。歌の観点なんていっこも考えていないというわけではないが、正直曖昧だ。

「えっと、歌い自信がある人！」

挙手してくれといわんばかりに直人は自分の右手を上げる。

上げてくれたのは４８人中……１３人。

まあ、最初はこんなもんだ。

「康さんが考えてくれた曲が一曲ある。それがこれだ」

右手を下ろした直人は左手に持っていたあるものを掲げる。それは、歌詞。

「この曲は、君たちのデビュー曲になると思う。だから、この曲を歌えるようにしてもらいたい。だけど、急じゃ無理だと思うから、まずは僕の曲を歌ってもらう」

「はい？」

最初に声を出したのは高城亜樹だった。そのまま直人に話しかける。

「あの、それって、男の人の歌を私たちが歌うってことですか？」

「なんか不満？」

「いや、あの、音程とか……」

「それなら大丈夫。女性が歌いやすいように変えてあるさ。じゃあ、今からみんなに歌詞をくばる」

直人は歩きながら一人一人に歌詞をくばっていく。

４８人全員が「ありがとう」という言葉を言う。

当たり前の言葉だったが、直人の心にはなぜか深く響いた。

（僕はなんで当たり前の言葉に感動してんだ？）
不思議に思っている直人だが、本当はその答えが本当は分かっているのかもしれない。
「まず、僕が歌ってみるから。聞いてて」
直人は先ほどいた場所まで戻り、みんなのほうに顔を向ける。
今から歌うのは、直人の思い出の曲であり、みんなに感動を呼ぶ歌と評判になった曲。
『子供から大人へ』
それが、この歌の曲名。
アイドルのような元気な曲ではなく、声援を上げるようなものではない静かな曲。
「すぅ……」
大きく息を一つ。
そして、直人は口を小さく開け、歌い始めた。
「♪世界のぉ、かぁたぁすぅみで～」
彼が歌っている間、誰も声を出すことはなかった。
（これが、ナオ君の歌か。良い歌）
優子は心の中で呟いた。
そして微笑む。
その隣で、敦子は複雑な想いを抱えていた。

第八話　歌声（前書き）

第七話に前書きで言うつもりでした。
初の歌レッスン編スタートです！
ちなみに、これから～編というふうにしていきます。

第八話　歌声

直人が歌い終わり、次第に歓声の声が漏れていく。ここにいる少女全員が、初めて直人の歌を生で聞いた。敦子と優子さえでも歌を傍で聞いたことはなかった。

「分かったかな？まあ、何度でも聞いてくれたらいいさ。じゃあ、メドレーを流すよ」

ＣＤを用意し、直人は歌のメドレーを流す。

「このタイミングで歌いだし。まずはここを練習してもらう。その後、一人ずつ歌ってもらう」

「どうして？」

亜樹が問う。彼女はさっきから反抗してばっかだ……と直人は思う。

「歌い方には、その人の本性が表れる。それを見る」

直人はみんなを見渡す。

４８人いるから……グループ分けが一番良い。

この部屋には、ラジカセが六つある。

「じゃあ、今から七つのグループに分けるから。適当に決めるからね」

４８人いるから。一つのグループに８人。

直人は前から適当にグループを作っていき、それぞれレッスンルームの端に固まらせた。ラジカセでメドレーを聞きながら、歌いだしの練習を始めさせる。

「少しは休憩できるな」

正直、この短い時間……疲れた。

偶然だったが、敦子と優子は同じグループだった。

いや、必然なのかもしれない。

「さっきの亜樹って子は、正規メンバーに入りそうだな」

意見を声に出さない少女たちの中、堂々と意見を出した少女。恥

ずかしがらない少女はステージに立った時歌えるはずだ。急に多勢の前にたってほら歌えなどと言われて歌える人は少ない。だけど、高城亜樹という少女はできそうだった。

「とりあえず、３０分待とう」

第九話　亜樹（前書き）

今日は、回想です！
回想内容は、高城亜樹との出会いです。
実際なら、六期生のオーディションに合格した亜樹。
この物語では、物凄く速くステージに立ってます。

第九話　亜樹

「とりあえず、３０分待とう」
直人はその場に寝転び、高城亜樹を思い出す。
（そういえば、家族、おもしろかったかも）

○

直人が選んだ４８人は様々な地域に住んでいる。高城亜樹は、高城樹衣を姉に持つ少女で、しかも東京都に住んでいる。そのため、直人はすぐ訪問することが出来、敦子と優子を除いて、二人目のスカウトとなった。彼女は学生であるため、同級生などに亜樹の事を聞いたところ、天然キャラらしい。聞いた時、相手の女の子からサインをねだられたりして聞くのに時間がかかったが。我ながら人気だな……なんて自惚れてしまった。
「ここかな……」
住所確認。たしかに高城という札がある。
ここで間違いない。
一つ心を落ち着かせるための呼吸をしてから、インターホンを押す。
「はい？」
ドアを開けて、顔だけを覗かせる少女。
それが、亜樹との出会い……ではなく。
「えっと……境直人です」
バチン！
勢いよくドアを閉められた。
「えっと……拒否されちゃった。これじゃあ、スカウトできないじゃん」
たぶん、さっきのは亜樹の妹なのだろう。あんな行動取るってこ

とは、僕のことを知ってるはずなんだろうけど……僕って、変人に見られてる？
直人の苦悩が二分続いた。
そして…
「すいません！どうぞ上がってください」
さっき見た時はスッピンだったのに、たったの二分で完璧にメイクしている！しかも服がオシャレになっている！さっき明らかにパジャマだったぞ！女子恐るべしだ！
「あ、じゃあ、遠慮なく」
（いきなり家を訪問するのが間違いだったな」
一つ勉強になった、直人であった。
家に入る。今日は土曜日だったことからか、亜樹の父は休み。直人は和室に案内されて、そこには一家四人が揃っていた。
「座ってください」
「あ、はい」
母親の真正面に座らされてしまった……なんか、怖いな。
「ああ、ごめんなさい！」
腰を落とした途端、和室に一人の少女が入ってきた。
それが、高城亜樹だった。亜樹は母親の隣に正座で座り込む。
「やあ、君が、亜樹ちゃん？」
「はい！そうです！私、受かったんですか！」
身をテーブルに乗り出して問う亜樹。
「あ、うん！」
「やったぁ！私、すっごく嬉しいです！」
なんか、スカウトどころじゃなくなってる気がする……
しっかし、この家族…仲良いなぁ。
そう思いながら、直人は急な展開？的な感じの、家族の喜びを見守っているのであった。

第十話　パート練習（前書き）

初の歌レッスン編は、大きな章……
レッスン編に入っていきます！
ちなみに、とっさに思いついたことです。

第十話　パート練習

「やっぱ、小学校の音楽での練習とは各が違うね」
「当たり前だよ」
暢気なことを言う優子に対して喋る敦子。
(直人の歌声、初めて近くで聞いたな)
だが、敦子は練習とは全く別のことを考えていた。
「直人……」
敦子は少年の名を呟く。
「おーい、あっちゃん?」
気がつくと、敦子の目の前を優子の手がひらひらと動いていた。
「え?」
「次、あっちゃんが歌う番だよ」
七人が七人、敦子をじーっと見ていた。
「その目は、恋煩いですか!?」
途端に、七人のうちの一人、指原莉乃が言った。
「え?は、はい?」
一気に敦子の頬が紅潮する。
「確かに、そうかもしれませんね」
「由紀ちゃんも何言ってんの!?」
「なんか、慌ててるのも怪しいなぁ」
「優子まで!」
完全に悪戯の的になっている。
「え、えっと……」
敦子は返す言葉が見つからない。
(どうしよう……)
敦子が困り果てた、その時だった。
「こら、お遊びはそこまで。早く、練習しなさい。一番最初に歌わせるよ」

気がついたときには、直人が近くにいた。
「優子、君に敦子を護ってもらいたいのに、一番悪戯楽しんでちゃ駄目じゃないか」
直人は冗談のようにいいながら敦子に視線を移す。
「頑張って、練習してくれよ」
直人は微笑み、元いた場所に戻っていった。
「面白くないなぁ、ナオ君ってば。さ、あっちゃん」
「う、うん」
敦子はラジカセに一歩近づく。
（また、直人に助けられたな」

第十一話　歌の良さ悪さ（前書き）

やばい！第十話更新したらお気に入り登録が減ってしまった！
それは、さておき……ここで一つお知らせ！
高橋みなみと峯岸みなみ。
名前、どちらもひらがななので、この二人はニックネームで記させてもらいます。

第十一話　歌の良さ悪さ

３０分たった。そろそろ始める時間だ。
直人は立ち上がり、両手を合わせてパチンと慣らした。
「時間だ。みんな、そこに適当に横に三列に並んでくれ」
みんな、直人の言うとおりに三列に並んだ。偶然だろうか、背の順に並んでいる。
「一番前の列……その一番右から、一人ずつ歌ってもらう。みんなが聞いているからって緊張しなくていいから」
最後に緊張をほぐせるような言葉を言ってからラジカセをセットする。
（今の言葉……緊張ほぐせたのかなぁ）
不安な直人だった。
「てことで、まずは君だね」
前の列の一番右にいるのは、高橋みなみ。
背が一番小さいその少女は、少し男っぽかった。
……気のせいだな。うん、今の言葉は却下だ。
「たしか、高橋みなみ……だったよね？」
「は、はい。みんなからはたかみなって呼ばれてます」
「じゃあ、たかみな。歌えるかな？」
「はい！歌えます！」
ビシッと右手でグッドマークを見せるたかみな。
声が低いな……
直人はそう思った。
とりあえず、歌声を聴いてみよう。
「じゃあ、かけるよ。歌わない人は座っててね」
ラジカセの再生ボタンを押す直人。
メドレーは流れ、次第に場に緊張が走る。
一応、緊張ほぐす言葉あは言ったよ……

歌いだしにかかる。そして……

たかみなが、歌い始めた。

直人は瞬間、驚いた。

あの低い声で、たかみなは直人を驚愕させるほどの歌声を発揮した。

他の少女たちも、固唾を呑んでその歌声を聴いた。

たかみなが歌い終わったが、直人はしばらく唖然としていた。気を戻してから慌ててラジカセの停止ボタンを押す。

「えっと、私、悪かったですか？」

たかみなは不安そうな表情をしながら直人を見た。

「いや、むしろ神様みたいな歌声だったよ。この声にはびっくりした」

「いや、そんな……」

今言った言葉は決してお世辞なんかじゃない。

あの歌声は本物だ。

そして、次々と歌い始める少女たち。

直人は、たかみなが一番上手いと感じた。

第十一話　歌の良さ悪さ（後書き）

感想受け付けます！
良いところを言ってくれるとありがたいです！
悪いところを言ってくれると次から気をつけれるので
どんどん言ってください！

第十二話　背の低い少女／前編（前書き）

今回は、回想です。
前話で直人を驚かせたたかみなとの出会いです。

第十二話　背の低い少女／前編

敦子と優子をアイドルの道へと誘った直人。
本題はこれからだ。いまから、４６人の少女に会い、スカウトしなければならない。
まず最初に、東京からだ。
「顔写真からして、身長はそこそこ高そうに見えたんだけど、まさかの１４８ｃｍかぁ」
スカウトしなければならないのだが、なにせアイドルの直人はスカウトなんてものをしたことがない。一体、どうすればいいのだろう。
一緒に食事？違うな。それじゃ、ただのデートだ。
直人はずっと悩んでいた。その悩みは、横浜市に来るまでずっと消えないでいた。

「よし、ここだな」
ついた一軒。そこは、直人の初のスカウトとなる相手が住んでいる家。
「なんか、不安だな……」
ぼそっっと呟きながら、直人はインターホンを鳴らした。
数秒待つと、背の低い少年が現れた。
「はい？……え、境直人？なんで！？」
ソロのアイドルって、やっぱり地名度高いんだな…
と自惚れる直人。
「えっと、みなみさんの、弟？」
「あ、はい、そうですけど……」
「高橋みなみさんは、いるかな？」
「あ、はい。自室で昼寝でもしているんじゃないかと」

まだ昼じゃないけど昼寝と言っている弟は、直人を見てパニックに陥っていた。
直人は失礼します、と言いながら玄関に入る。
「その、自室って？」
「あ、ご案内します」
別に敬語じゃなくてもいいのに、歳近そうだし……と頭の中で呟く直人だった。
自室の前まで案内してもらい、直人は弟にお礼を言ってからドアをノックした。
「そういえば、昼寝……だっけ」
直人はドアノブを握る。そして、開けていいのかなと躊躇しながらもドアノブを回す。
弟の言ったとおり、昼寝していた。ベッドで豪快に。
「えっと…おーい！」
大声を出してみる。
「おーい！」
繰り返し三回。次第に瞼が開いていった。
「え？」
みなみは、直人を視界に捉えた瞬間、目を見開いた。
「……おはよう」
みなみは仰天した。
「境直人……さん」
「スカウトに来ました」
「見ないで！私スッピンですぅ！」
枕を投げられてしまった。

第十二話　背の低い少女／前編（後書き）

初の回想前編ですが、後編は多分日曜日に更新すると思います。
みなさん、面白くなくてもぜひ読んでください。

第十三話　背の低い少女／後編（前書き）

久しぶりの執筆……
少々腕が鈍っているやもしれません。

第十三話　背の低い少女／後編

十分後。簡単にメイクを整えたたかみなは改めて直人と対面した。
なぜか、直人は正座だった。たかみなが正座をしているから……
という理由ではないが、なぜかたかみなからなんらかの威圧感を感じる。
たぶん、緊張感だ……緊張感であってほしい。
「えっと、初めまして。境直人と申します」
なぜか武士っぽく自己紹介してしまった。
「高橋みなみと申します」
武士っぽい自己紹介したら武士っぽい自己紹介されてしまった！
これは何かが気まずい。
どうしたらいいんだ、優子よ？
直人はこの場にいない人物に相談していた。
「えっと、君を、アイドルチームのにスカウトしにきたんだけど……どうかな？歌とか、ダンスは、得意かな？」
「いや、私インドア派なんで、あんまよく分かりません」
…普通の面接だな。こりゃ。僕は楽しくスカウトしたかったのに……
心の中で唸る直人だった。
（はあ……一応、キャプテン候補だって言っといたほうがいいのかなぁ）
そう、直人の目の前で正座しているたかみなは、キャプテン候補。
理由は……直人の思いつき。
思いつきだけど、少しぐらいならっちゃんとした理由あるぞ！
誰に言っているのだ、直人よ。
「えっと、なんで私選ばれたんですか？」
「え？それは……」
どう答えたものか、直人は数秒間返答することができずに迷い続

けた。
迷い続けた結果……
「僕は、君に何か運命的なものを感じた。ただ、それだけだ」
「え？あ、そうですか……」
俯くたかみな。
（言う言葉ミスったかな？」
ある意味明らかにミスっています。
それから数分間。二人は黙ったまま、時を過ごす。
（これは、もう言ったほうがいいな……」
直人は深く一呼吸。そして、たかみなを見据えて言った。
「高橋みなみさん、僕のチームにあなたも加わってくれませんか、キャプテンとして」
「え？」
たかみなが顔を上げる。
嬉しいのか、不安なのか、たかみなの頬を一筋の涙が流れた。
「え、僕なんかしたかな？」
「い、いや、あの、私がキャプテンって、どういうことですか？」
「あ、それは、えっと、君に相応しいと思ったからで……」
「そうなんですか……」
キャプテンという言葉を聞いた瞬間、不安が募り、たかみなは一筋の涙を流したのかもしれない。

第十四話　直人のお手本

「ありがとう。みんな、歌はとても良いよ。ああ、上手だ」
これは、お世辞で言っているのか、自分でも分からない。
「じゃあ、これから、本格的に歌のレッスンを始めたいと思う。今から、君たちに楽譜を配るよ」
直人はさきほどと同じような手順で楽譜を配っていく。
「君たちが、ステージで初めて歌うことになる曲だ。これから、この歌を練習していく。まずは、メドレーを聞いてもらいたい」
さっきから使っているラジカセ。それを使用する。ちなみに、このラジカセは直人の家から持ってきたものだ。まあ、どうでもいいと思うが。
「じゃあ、かけるよ」
ラジカセの再生ボタンを押す。
約4分。メドレーが終わった。
「次に……僕が……歌ってみるから」
少し気恥ずかしいが、直人はみんなのためにも歌わなければならない。
いかにも女子っぽい曲なので、直人は少し……いやかなりの抵抗感がある。
「そういえば、この楽譜曲名が書いてないね」
敦子がぼそっと呟いた。その隣で優子が肯定の意を見せた。
「ほんとだ。なんて名前なんだろう。ナオ君教えてくれないのかなぁ？」
そう言いながら優子は直人を見据える。
「歌い終わったら、教えてくれるんじゃない？」
「そうかもね。でもナオ君、恥ずかしくて言わないんじゃない？」
「実は私もそう思う」
敦子と優子は誰かをからかっているような笑みをした。

当の直人は、頬を真っ赤に染めていた。それほど抵抗感があるのだろう。
（ああ、トラウマになりそうだぁ……これを何回も続けると思うと……）
そう思いながら、右手を胸に当てる。
直人はいつも、歌い始める前にいくつかの仕草をとる。それが、直人の癖だ。
右手を下ろし、左手で髪をいじる。
「……ふぅ」
ゆっくりと息を吐きながら、ラジカセの再生ボタンを押す。
直人の、本日二回目の歌が始まった。

第十五話　ステージにたつ者たち

直人は歌いだした。低音が低いため、実際に彼女たちが歌う時とは雰囲気が違う歌になるかもしれない。

「♪きょうしつのまどべには」

あれ、別に男が歌っても違和感ないな、と思いながら歌い続ける直人。

サビにさしかかる。

「♪さくらのはなびらたちがさぁくころぉ、どこかできぃぼうのかぁねがぁりぃひぃびくぅ」

直人は歌うほど、心に何かがこみ上げてきた。それは、アイドルとしての、アーティストとしての感覚。そうだ。歌うとき、直人はいつも心の中で盛り上がっていた。気持ちが高ぶり、ずっと歌い続けたくなってくる。それは、今も同じだった。

歌い続けて約五分。ようやく歌い終わった直人は、久しぶりに歌ったためか、少し息が荒くなる。

以前自身が歌ったのは、秋元康とアイドルグループを作ろうと決めた二日後。一日かけて開かれた直人のコンサート。その終盤で、彼は「僕は、新しいアイドルグループを作ろうと思います！」と宣言した。その宣言がコンサート終幕のきっかけになり、その日のコンサートは幕を閉じた。それから半年間少女たちのスカウトに専念し、今こうしてレッスンを行っているため、ここ半年間コンサートをおこなっていない。

「まあ、こういう歌だよ。みんな、分かってくれたかな？」

ごく僅かだが、頷いてくれた。小さく。

「この曲は、４８人全員で歌えるわけじゃない。それは、想像したら分かることだよね？」

そうなんだろうか……

「この曲の名前は『桜の花びらたち』だ。最初の舞台に立てるのは

４８人中たったの１６人だ。『桜の花びらたち』をダンス込みで歌ってもらった後、４８人全員が舞台に上がるんだ。まあ、それは、いつになるかわからないけど」
「どういうことですか？」
そう聞いたのは渡辺麻友だった。ツインテールの髪型をした彼女は真っ直ぐ直人を見つめる。その質問をした後、他の少女たちも直人を見た。
「客が集まるという保障はないんだ。観客席が、客でいっぱいになったら、４８人全員を舞台に上がらせる。それが、今の僕の目的だ」
ファンとは言わない。観客席が埋め尽くされても、それはただの興味心で来ただけの人たち。その時、まだ彼女たちを好きだとは断定できない。
「この曲は、４８人全員で歌う曲だ。ここに、僕が頼んで……アーティスト八人でこの曲を歌ってもらった。誰かは会えて言わないよ」
一応、忠告しておく。ちなみに、そのアーティストとうのは誰もが知っている、オーディションで受からなくても踏ん張り続けた女性たちのグループである。
「そのアーティストに歌ってもらった『桜の花びらたち』をＣＤで用意したから、さっきのように分かれて練習してくれ。さあ、今からしばらくその練習続けるから、何か、聞きたいことあったら、僕に直接聞きにきてくれ……じゃあ、スタート」
直人は、両手を合わせ、パチンとならした。
二回目のパート練習……といったところだ。
みんなはさきほどいた場所へ向かう。直人はそれぞれ集まっているところに向かい、ＣＤを渡していった。すべてのＣＤを渡して終えると、鏡の前辺りまで戻り、その場に座り込んだ。
正座で。胡坐をあくのがいつもの直人なのだが、今はなぜか正座をしたくなった。
だがその気持ちも数十秒であっという間に撃沈。直人はリラックスできるように座りなおした。

第十六話　音楽の楽しさ（前書き）

今回は、回想です。
誰かは……まあすぐに分かります。
ちなみに、ＡＫＢ正規メンバーは、二千十一年時点に決定いたしました！最近まで大島麻衣とかどうしようかなぁと悩んでたんですよ。メンバーの年齢は二千十年六月時点です。一応、デビューしていないとうことを考えると、もうちょっと若いほうがいいかなと思ったので。

第十六話　音楽の楽しさ

直人は質問がない限り暇となってしまった。みんなはそれぞれの場所で真面目に練習している。サボっている者はいないようだが、まあガールズトークはおこりつつある。まあ、別に最初のうちはいいだろう。

などと甘い考えをめぐらせていると、

「あの、ちょっといいですか？」

さっそく質問が来た。

直人はすぐさま顔を上げる。渡辺麻友だ。

「質問？何かな？」

直人が立ち上がろうとする前に麻友が直人の前に座り込んだ。

「えっと、ここのリズムなんですけど、コツっていうか……どうやったら上手く歌えるとかってありますか？音程とか」

「う～ん、そうだねぇ。難しい問題だな。少し、待ってもらえるかな？」

「はい、大丈夫です」

音程は、やっぱ女の子は高い方がいいよなぁ。『翼をください』みたいな音程が似てるかなぁ～。いや、それで通じるか？リズムを考えるべきか。う～ん、答えづらい…。

悩む直人に、麻友がまた話しかけた。

「そういえば、あなたがスカウトしに来た時も、同じような質問しましたっけ？」

「え？……あぁ、確かにそうだね」

あの時は、スカウトっていうより高校生がするようなどうでもいい話みたいな感じだったけど。

「ここのリズムは、音程を上げて歌うといいね。腹式呼吸をしてみるといいよ」

「分かりました。ありがとうございます」

麻友は立ち上がってお辞儀をしてから、もといたグループの場に戻っていく。
「質問…か…」

○

今日は、渡辺麻友という、まだ学生の少女をスカウトしに行く。
奇遇なことに、今日は3月26日。プロフィールで知ったのだが、麻友の誕生日だった。せっかくの誕生日なので、祝ってあげようと、誕生日プレゼントにネックレス（値段は二千円ぐらい）と小さなショートケーキを三個ほど買って彼女の家に向かった。
埼玉県。直人は、麻友の家に着いた。
もう何度もスカウトを経験したので自然と緊張はない。
「あの、どちらさまで？」
出てきたのは麻友の母だった。
「えっと、境直人です」
「えっと……」
お母さん、完全に焦ってるよ。
「麻友さんと、お話がしたいんです」
「えっと、どうぞ。上がってください」
見た目からして、焦りは一瞬で消えたようだ。
リビングに案内された。結構綺麗だ。
「麻友さんは、どこに？」
「部屋にいると思いますよ…それは？」
麻友の母親は直人が持っているケーキやネックレスをいれた袋に気がつく。
「あ、今日誕生日だって聞いたんで、ケーキとプレゼントを」
「あら！きっと麻友も喜ぶわ。今すぐ呼んでくるわ」
そそくさと麻友の自室があるらしい方向に向かう。
数分後。眼鏡をかけた少女がリビングに現れた。少し寝ぼけてい

るらしく、目をこすりながら来た。
「どなたですか？」
長い髪をくくりもせずに、しかもパジャマ姿じゃないのか、これ。
「お誕生日、おめでとう」
直人はそう言いながら微笑んだ（５０％営業スマイル）。
「さ、ささ……」
「……？」
「境、直人……！」
「え、あ、うん、そうだけど」
「な、なんで？」
完全にパニクってる。どうしよう。ここは垂直に言うべきか。
「渡辺麻友……僕の、アイドルグループに入ってくれないか？」
「はい！」
返答、早っ！
「あ、そう、良かった」
ちらっと、隣の母親に視線を向ける。
母親はにこっと微笑んだ。どうやら、不安があるとか、そんなの認めたくないとかいうのはないらしい。
「あ、まあ、このまま帰るのも尺だから、とりあえず雑談する？」
「はい」
麻友と直人は向かいあって座る。どちらもソファだ。
「お茶用意してくるわね」
母親は台所へ向かった。
「えっと、今日誕生日だってプロフィールに書いてあったから、ケーキを用意したんだ。それと、誕生日プレゼントも」
そう言って、袋に入れたネックレスを渡した。
「やびゃあ！ありがとうございます！」
「やびゃあ？」
「あ、やばいの意味です」
そうなのか。最近の女子高生たちはそのような言葉を使っている

のか……二歳ぐらいしか歳違わないのに、こんなことも知らないのか、僕は……

心の中で唸る直人だった。

しばらくして、母親がお茶を持ってきた。そこからケーキを食べる時間が始まる。

「私、凄いアニメが好きで、よくネット見てるんですよ。ＡＫＢのメンバーを応募してるっていうのもあなたの公式サイトで知って…」

「ああ、あれか」

直人は、自身の公式サイトを立ち上げている。ほぼブログなのだが、公演内容とかを表示しているサイトだ。あれに、メンバーを応募していますと宣伝したんだっけ。半年間でスカウトをはじめて終わらせるつもりだったから、誰かを決めるという作業は早く終わらしたかった。だから、宣伝して、一ヶ月までに応募してくださないなんて言ってしまった。だから、みんな慌てて応募してきたよ。よくそんな決心がすぐできるねと思った。

「な…境さん、えっと」

「あ、好きなように呼んでくれていいから」

「あ、そうですか。じゃあ……直人さん」

「はい」

「アニメはお好きですか？」

首を傾げながら問う直人。

「う～ん、アニメは見るほうかな。よく読書するから、それがアニメ化したら見る程度」

「へぇ、そうなんですか」

しばらく、麻友の話にあわしていたので、アニメの話ばっかりだった。

「でも、そんなアニメばっかり見ていたら、いつまでたっても好きな人ができないよ？」

「私は三次元になんて興味ありません。絶対に二次元は裏切りませんから」

「あ、そう……」
少しがっくり項垂れる直人だった。実際、
（麻友に好きになれたら、どんなアプローチされるだろうか？）
などとはしたないことを考えていた。直人のアイドル精神はどこへやら。まあ、ほぼ関係ないんだが。
しばらく続くこと、３０分。
「面白いね、麻友は」
「そうですか？」
「ああ、正直そう思う。話してて飽きないよ」
さすがにちょっと分からない話もあるが。
だけど、直人は思った。
こういう気さくで、自分の好きなものを、誰かに楽しく言う人っていうのは、チームには必要だと思うと。

第十七話　練習という名の交流（前書き）

今回は、直人の視点から離れます。
少し短いかもしれません。

第十七話　練習という名の交流

直人がぐるぐると頭を回転させていろいろ思い出している頃―。
少女たちは時折直人に質問をしながら練習していた・練習はちゃんとしているのだが、たまに会話が弾んでいく。
「さっきの自己紹介タイムであんまり自己紹介できなかったですね。私は柏木由紀です」
「よろしく。私は北原里英。よろしくね」
と、改めて自己紹介をする人たちもいれば
「へぇ、そうなんだ」
「でね、佐江はそこでどばっーと立ち向かったわけよ」
と、仲良く会話を弾ませている人たちもいる。
人はそれぞれだ。友達の作り方もそれぞれで、その人のペースというものだ。早くに仲が良くなれるなんていうポジティブで友達作りが上手い人。逆に、ゆっくりと、相手の好い所を見つけて、そして相手に見つけられて初めて仲良くなるなんて人もいる。
ちなみに直人は、前者だ。
「おう、段々歌えるようになってきた！」
優子がガッツポーズをとる。敦子はそれを隣で見ていた。
「私はまだあんまり歌えないやぁ」
「じゃあナオ君にコツとか聞いてこれば？ほら、もう聞いてる人いるよ」
「え？」
優子は直人がいる方向を指差した。敦子はその指先の方向をうかがう。
麻友がさっそく直人に質問をしにいっている。敦子はそれを見て「どうやったら歌を上手く歌えるのか」と聞いていると予想した。
実際当たっている。
「いつまで見てんの？」

気がつくと、優子が敦子の肩を揺らした。
「別にナオ君が好きなのはいいけど、歌にも集中してね」
「…優子は冗談がおもしろいね」
「敦子、なんか怒ってない？」
同じグループの子が練習で一通り歌った。次に歌わしてと敦子が手を挙げる。誰も否定はせず、敦子はラジカセの再生ボタンを押す。
（歌を上手く歌えるようになって、ソロの歌手になるんだから！）
それが、敦子の夢だった。

第十八話　練習という名の交流は過去でも続く（前書き）

今回も回想です。
長い半年間のスカウトの日々。そんな日々が始まるまえの物語です。
そして、境直人という人物がイメージできない方！
境直人の姿についてちょっと説明されますので。

第十八話　練習という名の交流は過去でも続く

世界ってのは、どんなことが起きたらひっくりかえったように感じられるんだろうか？

中学生を卒業した直人は、昔は行きたかった高校を諦め、アイドル仕事に専念することにした。そんな彼に与えられた仕事、それはアイドルグループを結成すること。

最初はすぐにできるだろうと簡単に思っていた。だけど、後から気づいた。これは、一千万人を前にして歌うということよりも辛いのだと。

アイドルグループ。それは、何人かのアイドルで構成されたグループ。直人は、恩師である秋元康の頼みを断ることはできなかった。まあなんとかなるだろう、そう思って軽々しく了承してしまった。

だけど……

「はぁ……」

直人は机に置かれた数え切れないほどの資料を見渡す。ここ一週間で応募された、ＡＫＢ４８のメンバーになりたいという人たちのプロフィール。

あまり応募は多くないと思っていた。だけど、違った。直人がざっと見ただけでも軽く３００人分はある。ここから、４８人だけを選ばなければならないのだ。直人にはとても無理に思えた。

いや、４６人か。

「直人、それどうしたの？」

「僕のチームに入りたいという人たちだよ」

「ああ、たしか、アキバ４８だっけ？」

「ＡＫＢ４８だよ」

「あぁ、ごめん……」

直人がいるのは、家のリビングだった。そして、卒業してまだ三日しかたっていない敦子と優子を招いている。

彼に、親はいない。兄弟どころか、血のつながる者もここにはいない。両親は直人が六歳の頃に死んだ。直人の目の前で。
ドライブしている日。直人には、家族の中心だった母親、優しくていつも場を和ませてくれた父親、高校生でモデルをしている姉がいた。歳の離れた弟を可愛がっていた姉の提案でドライブすることになった。だけど、交通事故が起きた。それは、交差点での出来事。信号が赤だったので父親は車を止めた。だけど、後ろからトラックが猛スピードで走ってきた。当然直人たちが乗っていた車は衝突した。母親は直人を抱えて護った。父と姉も必死に車にしがみついた。
だけど、運命は直人と姉から両親を奪った。親戚も近くにはいない、かと言ってこの街から離れたくはなかった。姉は高校を中退し、仕事に集中した。おかげで不自由なく暮らせた。
だが、直人は更なる悲劇に襲われた。唯一の肉親であった姉が、殺されたのだ。モデルで人気も高かった。熱狂的なファンも少なくない。そして、ストーカーもあった。
姉のストーカーはある日の夜、姉を襲った。そのストーカーは情緒不安定だった。そのまま彼は気が狂い、姉をナイフで殺害した。
直人は悲しんだが、その分生きようと思った。そして、その日から髪を切らなかった。
一年かけて彼はアイドルとして芸能界にデビューした。すぐに絶大な人気を得た直人は、後ろで一つに束ねている長い髪が特徴的なことから『長髪の直人』と言われた。
「なんで髪伸ばしてんの？いつも気になるけど」
敦子がお茶を入れて直人に渡してくれた。敦子と優子はいつも直人の家に来て、家事をしてくれている。一人暮らしである直人は悪いと思っているが、正直有難い。直人は料理は大得意だが、アイドル仕事で洗濯や家の掃除ができないのだ。敦子と優子はそれを気遣って家事をやってくれているのだ。
「微妙に伸びていったもんねぇ、その後ろ髪」
優子も敦子の質問の答えに興味があるようで、そそくさと直人の

座るソファにこしかけた。優子の横で直人は何枚もの資料とにらみ合っている。
「決別したいんだ。姉に頼っていた頃の僕と」
直人は資料から目を離さず、二人に言った。少し場の雰囲気が悪くなったかもしれない。
「お姉さん、優しい人だったね」
「そうだったね。僕にとって、尊敬できる人だったよ。それに、弟の僕が言うのもなんだけれど、とても綺麗だったよ」
姉の話をするときの直人は、とても幸せそうだった。それほど、姉のことが好きだったのだろう。小学校の頃、何度かシスコンといわれたことがあったが、直人は気にしなかった。
「あ、この人可愛い！」
ふいに、優子が一枚の資料を手にとった。資料一枚につき一人のプロフィールが書かれている。左上に写真が貼られているため、どんな人か見ることができる。優子がとった資料を直人が横から覗く。
「誰？」
直人が問う。
「……篠田…麻里子…さん、だって」
篠田麻里子。もう二十歳過ぎてる……まあ、顔立ちはいい。表情も明るく感じる。だけど……
「この資料だけだと、選ばれないな」
「どうして？」
「何かが足りない。実際会ってみないと」
「じゃあ会ってみたら？」
敦子が提案する。確かにそれも正論だ。
「そんな余裕はないよ。すくなくとも、七ヶ月以内には全員のレッスンを始めなければならない」
「へぇ……で、何人？」
「４８人だよ」
「へぇ……」

優子は篠田麻里子の資料を机に置く。
「……なぁ、二人とも」
直人は机から視線をはずして、敦子と優子を視た。
「アイドルになりたくないか？」
「「え？」」
二人同時に声を漏らした。
「それって……」
「ＡＫＢ４８に、加入してほしい」
直人は言った。それから、三十秒は沈黙が続いた。次第に、声を出したのは、敦子だった。
「いいよ、優子もいいよね？」
「うん。ナオ君の頼みなら、断れないもんね」
二人は了承してくれた。
「ありがとう、敦子、優子」
直人は微笑んだ。それは安堵からくるものというより、とてつもない安心感。チームを作り、政庁させる。だけど、最初は会話をしたりすることができないかもしれない。だけど、知り合いがいたらだいぶ安心できる。直人はそう思ったのだ。
それに、直人は今目の前にいる二人は可愛いと思っている。中学校でも音楽の成績は良かった。きっと、この二人には才能があると思ったのだ。その才能を惹きだしたかった。
「じゃ、残り４６人か」
直人は再び机に視線を釘付けにした。

第十九話　つかの間の会談（前書き）

今回は前話に続いて回想です。
前話よりも前の話です。

第十九話　つかの間の会談

直人と彼が作り上げるチームＡＫＢ４８の物語が始まったのは、あの日なのだろう。

直人はレッスンルームを見渡す。直人が集めた少女たちが歌の練習をしている。誰も、練習をサボろうとしている者はいない。皆は自分自身の歌声をだしている。すごく高音な子もいれば、逆に低音だが、個性さをだす子もいる。

「ぼくと……彼女たちの始まり…それは…康さんとの打ち合わせ、のときだったな。ずいぶんと軽い始まり方だよな……」

だけど、あの日の記憶は、今でも昨日のことだったように、鮮明に蘇る。

○

今日のライブが終わった。直人はすぐにシャワーを浴び、その後は待合室で読書をしていた。読書をするときや、てがみを書くときは直人は眼鏡をかけている。そこまで悪いというわけではないが、眼鏡は昔から読書用として愛用していた。いまやかける理由も分からなくなってきたほどだ。

「もう今日は仕事はないですよ」

待合室にマネージャーの橘花蓮（たちばなかれん）が入ってきた。彼女は二十二歳にして優秀なマネージャーで、直人が絶対的信頼を置く数少ない人物でもある。

「そうですか」

「ですが、秋元康さんがお会いになりたいそうですよ」

「康さんが？」

直人は読んでいた本をテーブルに置いた。

「第一会議室でお待ちです」

「分かりました。ありがとうございます」
直人は立ち上がった。腰まで伸びる髪が揺れた。彼の身長は１７０?。そして一つに束ねた後ろ髪は８０?弱。つまり彼の後ろ髪は身長の半分の長さを誇るということだ。直人の特徴として取り上げられるのも分かる。彼の髪は長いし、細い。普通の男なら少し髪が跳ねるが、直人の後ろ髪は束ねても女性のようにすらりと伸びている。女性も男性も見惚れるほどのきれいな髪だ。
「じゃあ、今すぐ向かいます」
「分かりました」
直人は眼鏡をはずして上着の内側ポケットにしまいこんだ。
直人は待合室をでた。花蓮は待合室に残っている。第一会議室はナオとの待合室から左に向けて三つ先の部屋だ。
「失礼します」
第一会議室の前に来たナオとは、ドアを二回ノックしてから一声かけた。
ドアを開けると、机をはさんで真正面に秋元康が座っている。
「どうしたんですか、康さん?真面目な話ですか?」
「ぼくはいつも真面目だよ」
康は微笑む。直人は部屋に入ると、康の向かい側に座った。
「あなたはいつも、無茶な事を要求してくる。それも突然に」
「別にいいじゃないか。サプライズだよ」
「はぁ……あなたって人は」
いつも笑えない冗談ばっかりだ。
「ぼくは、君に一つ頼みがある」
「それは、すぐ終わることですか?」
「いや、すぐには終わらない。もしかしたら一生終わらないかもしれない」
「……聞きたくないですね」
直人は今目の前にいる人が、自分にとってろくでもないことを頼むと思っている。確かにそのとおりだった。だけど、直人にとって、

秋元康は恩師だ。命を救ってくれたほどの……いや、少し大袈裟かもしれない。
だが、姉を失った自分に対して手を差し伸べてくれた友人…敦子と優子。嬉しかったけど、今の世の中、金がなければ生活ができない。こんな世界は嫌いだが、存在する以上仕方がない。中学一年生に何ができるだろうか？僕はずっと悩み、悩み、悩んでいた。そんな僕は、秋葉原で、秋元康と出会った。それは、道ですれ違っただけのことだったけれど。康さんは、数秒後に僕に声をかけてきた。そして、一言、ただ一言聞いてきた。
―アイドルになりたくないか？
それが、少年が境直人と名乗ることになるきっかけだった。
「…康さん、僕は、もう境直人なんですよね？」
「ああ、そうだよ。君が、過去にとらわれないために新しい名前を与えた。この僕が。君はもう、幸せのときを過ごしていたこの名前を名乗らなくていい。新しい君が生まれたんだよ」
「……分かりました。あなたの頼みごと、何ですか？」
「……君が、アイドルグループを作るんだ」
「はい？」
直人は恩師に向かって目を見開いた。
「名は、ＡＫＢ４８。アキバの略だよ。４８人のメンバー構成で行こうと思っているからそういうネーミングにした」
「ちょ、ちょっと待ってください……僕に、一からグループを作れってことですか？」
「そうだとも。一言で言うと、君は４８人の少女、あるいは女性をスカウトし、世紀メンバーを構成する。その後、秋葉原を拠点とし、活動開始。拠点地に舞台を設立してそこで踊って、歌ってもらう。そのときは１６人程度。観客席が埋もれば、４８人でデビュー曲を披露してもらう」
「デビュー前提ですか……」
「私の眼鏡には、成功の二文字しか移らないのだよ」

言ってくれるねぇ、決め台詞。
「で、その後の想像は？」
直人は聞く。
「人気があがれば、ＴＶにも出放題だよ。そしたら、出る人をきめなくちゃいけない。ステージに立つ者たちもだ。そのときは選挙しようと思う」
「これはまた、大胆ですね」
直人はそう言うしかなかった。
「できれば、姉妹グループも作りたい。そうだなぁ、東京にあるんだったら、大阪とかがいいなぁ…直人君はどう思う？」
「そうですね、名古屋とかどうですか？」
「いいねぇ、それ」
康が相槌を打つ。
「色々したいことがあるんだ……そこで、君にお願いしたんだよ。ＡＫＢ４８を作ってほしい」
「どうして僕なんですか？あなたには他にも頼める人がいたはずですが……てかそもそも、自分で作ればいいじゃないですか」
直人が正論だ。だが、康には直人にこれをさせるちゃんとした理由がある。
「ＡＫＢ４８を構成するにあたって、さまざまなスタッフが専属の役職についてもらう。直人君。君には、それら役職をしきる、総合プロデューサーになってもらいたいんだよ」
「だから、どうして僕が……」
「自分では気づいてないかもしれないが、君には統率力がある。誰にも負けない、まっすぐな強き心がある。その心は類まれぬ才能だ。その才能を生かしてもらいたい」
「統率力なんて……」
そんなものあるわけがない。
「君には、責任力がある。だから、総合プロデューサーになってもらいたい」

「……いいでしょう」
いきなりそんなこと言われても無理だと思った。だけど、断る理由もないと思い、直人は頷いた。
「引き受けてくれると思ってたよ。だが、一つ忠告しておくよ。これはとても重要な仕事だ。一からつくり、そのまま引っ張っていくのだからね」
「……よぉく、分かってますとも」
直人は呟く。その後に康を見る。
「僕のライブは？」
「しばらくできないだろうねぇ」
「そんなぁ」
がっくりうな垂れる、直人だった。

第二十話　小さな組織

「まあ、あの日は少し慌てたが、やっぱり、これから組織を作るんだっていうワクワク感があったんだよな」
直人は小さく呟いた。あれから半年。彼は歌うことがなかった。ステージに立つ事もなかった。
みんなが歌の練習をしているところを視ると、ステージに立って思い切り歌いたくなってくる。今はその衝動を抑えることしかできない。
「そろそろ復帰しよっかな」
そう独り言を呟きながら直人は時計を見やる。
「もう終わりどきかな……」
後１０分で正午をまわる。そろそろ昼飯どきにしないといけない。
一応、弁当を持参してこいと言ってきたが。「持ってこれる人は」と言っていたのできっと持ってきていない人もいるだろう。
「はい！終わりにしてくれ！みんな集まって！」
全員に一声かけると、次第に聞えていた音楽が止まっていく。
数分たって全員が集まった。直人は立ちあがる。
「今から昼食にしようと思う。弁当を持ってきていない人はいるかな？」
直人がそう聞いた丁度三秒後に、１０人ほど手をあげる。
「僕は近くのコンビニに昼飯を買いにいくから、弁当を持ってない人はついてくる？」
結果的に絶対についてくることになるのだが、直人は一応聞いてみた。さきほど手を挙げたものたちで断る人はいなかった。
「じゃあ、もう弁当食べていいよ。買いに行く人は、僕から離れないでね」
別にそんな言葉は言わないでいいと思うが……言ってみたくなった直人であった。

レッスンルームは、建設中の建物の一室だ。後にドン・キホーテと呼ばれるその建物の八階にＡＫＢ４８劇場を建設中だった。直人たちがいるレッスンルームはドン・キホーテの二階にある。レッスンルームを出て廊下が続いている。その廊下を少し歩くと階段があるのだ。

ここ秋葉原は一通りも多い。近くのレストランに行くという方法もあるのだが、それじゃ弁当を持ってきている人たちと平等にならない。

「ナオ君、どうして弁当作ってこないの？」

「優子、それはこっちの台詞だよ」

優子も弁当を持ってきていないのは想定内だ。

「いやぁさ、あっちゃんが弁当作ってくれないんだよぉ」

「当たり前だろ。作ってくれる人っていったらお母さんだろ」

「まあ、そうなんだけどね」

優子はいつも陽気だった。それは直人にとっても、優子の好きな一面だ。

「ナオナオって、なんでそんなに人気なんですか？」

「ナオナオ？」

話しかけてきたのは亜紀だった。それにしても、ナオナオなんてニックネームつけられたの初めてだよ……

「人気の理由かい？なんか、自分では答えづらい質問だね……」

直人は自信家でもなければ、自分を過小評価しているわけでもない。亜紀の質問に答えるのは結構難しい。

「ナオ君は容姿がいいからじゃない？」

直人の横で優子が言った。

「そんなことないさ」

直人は少し照れながらも否定する。

「いやぁ、それに、ナオ君はファンにサービス旺盛だもん」

「サービス？」

今まで聞いていただけの宮沢佐江が声をだした。なんか、疑問系

なのに彼女からすごい元気が伝わるなぁ。
「ライブ中にすべての席回ってハイタッチしたりとか…」
「時間かかりそうだね」
亜紀が感想を呟く。
「そのほかにもすごいよね。この前なんか、誰かも知らない女の子にハグしてたときもあったよ」
「こら、優子」
嘘ではないが、あの時はちゃんとした理由がある。いざ言われると恥ずかしくなってくる。
「たくよ、歌いたくなってくるからライブは禁句な」
「えぇ～」
亜紀がおもしろくない！と言ってきたが、直人は軽くスルーした。
「直人ぉ、女の子無視するのは駄目だよ」
そう言ったのは佐江だった・
「どういう君はいきなり呼び捨てか」
「私のほうが一つ年上ですけど？」
「はぁ……おっしゃるとおりで」
「年上の私を敬って、佐江様と呼びましょうぅ」
「なんで様なんだよ！？」
コンビニはまだまだ遠い。

第二十一話　コンビニに着くまでに（前書き）

レッスン編はまだまだ終わりそうにありません。

第二十一話　コンビニに着くまでに

コンビニに行くのにこんなに遠いと思ったことはない。直人はそう感じた。

女性陣のガールズトークは終わることを知らない。しかも、一歩の歩幅は非常に遅く、身長が高いため歩幅が多い直人は合わせるのに苦労していた。

「でねでね…」

直人は無論男であるため、ガールズトークには入りにくい。

「ナオ君ってこの半年間出会い続きだったんだよねぇ」

直人の左横を歩くのは優子。優子は直人に歩幅をあわしているらしいが、実際あわしているのは直人のほうだった。

「合計４８人」

直人が答える。

「ねえ、そういえばさ」

「？」

「篠田麻里子さんってあなたが自ら加入させようと決めたんだよね？」

「うん、そうだけど？」

「もともとの４８人目って誰だったの？」

４８人目。それは麻里子ではなく、別の誰かだった。それは確かだ。だけど……

「４８人目は、もともといなかったんだよ。誰にしようか迷ってたときに、彼女と……麻里子さんと出会った」

「そうなんだ…」

優子は相槌を打つようにして納得した。

「私はそれほど綺麗に見えたってことよ」

「え？」

後ろから麻里子が話しかけてきた。そういえば、さっき後ろ歩い

てたなぁ。
「麻里子さん、自分を過大評価してますね」
「ファッションには結構自信あるよ」
まあ確かに、いま来ている服もオシャレだった。直人にはあまり女性のファッションはよく分からないが、それでも可愛いと思えた。
「似合ってますね。そんなにファッションセンスあると羨ましいですね」
「あなたの服もコーデしてあげよっか？」
「お願いします」
「私をおいてかないでよぉ」
いつのまにか会話から外れていた優子がようやく割り込んできた。
「てか、麻里子ちゃんには敬語で私にはタメ口なの！一応私も年上なんですけどぉ」
「優子は昔からの友達じゃないか」
「友達、ねぇ……」
「なんだよ？いきなり暗い顔して」
「なんでもないよぉ、だ」
優子がそっぽを向く。
「もしかして、中学は先輩だった、とか思ってる？」
「……」
「いてっ！」
直人は優子のチョップをくらった。
「図星かよ……」
「なんか言った？」
「いえ、何も」
一瞬、優子からものすごい威圧感と殺気を感じた直人はとっさに言葉を閉ざした。あそこで何か反論したら、自分が怪我をすると判断したようだ。
「そういえば優子、今は女優の仕事してないね」
「ＡＫＢに加入するって報道されてからはみんなレッスンするだろ

うとかって言っていろんな仕事一気にやっちゃってね。それで今は仕事なし」
「へえ、優子って女優だったんだ」
「七歳の頃からセントラル子供劇団に所属してたの」
麻里子がいきなり呼び捨てになっていることに気づいていないのか、あえてスルーしているのか、優子はそのまま喋っていた。
「十人十色、己を信じ精進せよ……確か、君の座右の銘だったよね」
「うん、高校での恩師の言葉だよ。私すっごく気に入ってるんだ」
「そうなんだ……」
そこで直人の脳内にふと一つの考えが思い当たる。
やっぱ、アイドルって、人気とかあったら、言葉の一つや二つ、いるよな？
「ねえ、みんなにキャッチフレーズを考えてもらおうと思ってるんだけど」
直人は麻里子と優子に話題を持ちかける。
「キャッチフレーズ？」
「ＡＫＢの公演にはＭＣ……つまり、演奏の間に君たちが会話をする時間が五分ほど設けられる。そこで、自分を紹介するときにキャッチフレーズを言って紹介してもらおうと思ってるんだ。相手に印象付けるために。別に、キャッチフレーズはいらないっていう人は言わなくていいんだ。でもなるべく言ってほしいなって、思って」
「へぇ」
優子より先に、麻里子が反応した。
「また後で説明しないとね」
麻里子が言った。
「その前に歌だよ」
直人は少し歩幅を緩めた。
「お、コンビニについたな」
直人が小さく指差した。その方向の先に大きなコンビニが見える。
「なんか長い道のりだった気がするね」

優子が言った。
「うん、そうだね……」
言いたかった事を先に優子に言われてしまった直人だった。
「そういえば私、お金持ってくんの忘れちゃった」
優子、来た意味ないじゃん。

第二十二話　今日は客が多い

直人たちはコンビニに入った。集団で入ってるためか、いつも人気が少ないコンビニは少しにぎやかになった。

「みんな、できるだけ早くお願いな」

一言そう言った後には、みんな弁当が並ぶ棚に集まっていた。

「私これ！」

「私おそば！」

次々と商品棚から弁当が消えていく……と思いきや、みんな他の商品にも目がくらんでなかなか決められていなかった。

直人は昼飯を選ぶ前に雑誌棚の前に来た。彼はコンビニに来ては色んな雑誌を読む。ちなみに、読書が趣味で、小説も漫画も何でも読む。

ちなみに、直人が好きな漫画雑誌はジャ〇プである。

直人がとったのは男性誌だった。

「うん？」

直人がとった男性誌があったすぐ横の女性誌がとられた。それに反応して直人は横にふりむいた。

いたのは、横山由依だった。

「あ、直人さんも雑誌読むほうなんですか？」

「うん、まあね。君も読むほう？」

「はい」

「そうなんだ」

彼女がとったのはどうやらファッションをテーマにした雑誌のようだ。女性誌は大体そうだと思うが。

「お昼を選びにいかないの？」

「コンビニ来たらまず読みにいくんです」

「へえ、そういえば、好きな食べ物はなに？」

「えっと……牛丼、です」

少し言うのが恥ずかしかったのか、その時だけは目を逸らしながら答えた。
「へぇ、確かにおいしいよね、牛丼。女の子でも結構好きな人多いからね」
「あ、そ、そうですか？」
由依が顔を上げる。やはり、女の子が好きな食べ物とかってあんまりどんぶり言わないからためらったんだろな……と直人が解釈した。
「あのさ、こっちに上京してこないの？ほら、京都から通うの、つらいでしょ」
直人がさっきと話題が変えた。すると、由依は快く説明してくれた。
「今、部屋を探してます。私、やっぱ京都からだと辛いなぁと思ったから。でも、なかなか見つかんないなんですよねぇ……」
「そうなんだ。僕も探すよ」
直人はそう言いながら男性誌をしまい、別の雑誌をとって適当にページを開いた。そのページにはマンションの特集が載っている。
「君は、中学の頃バスケに夢中だったんだよね？」
「はい」
由依が頷いた。彼女からは疑問の表情が浮かび上がっていた。
「僕も、バスケに夢中だったんんだ。小学校の頃も、お金はなかったけど、友達が誘ってくれたおかげで、ミニバスに参加することはできた。中学もバスケ部のキャプテンをしてたんだ」
「え？そうなんですか？」
同じ事が好きだとその相手に共感できる。直人はそれをよく知ってる。
「バスケが好きな人に悪い人はいない。だからこそ、助けてあげなくちゃな」
「……ありがとうございます」
由依は一言お礼を言いながら由依は雑誌を棚にもどして直人が持

っている雑誌に目を凝らした。
「ここなんかいいと思わない？」
「予算が……」
「ああ、そうだな。生活費がいるもんね」
直人はお金の問題について考えれなかった。最近、アイドル仕事をする分報酬がもらえたために最近はお金について考えることはなかった。もちろん、両親を失った後の頃は稼いでくれる人が姉しかいなかったため、電気を節約、水を節約、などばっかり考えていた。
「安くていいところって、なかなかないんだよねぇ」
「そうゆうもんですよね」
「…そういえば、生活費ってどうするの？やっぱり、実家から？」
「はい。部屋が決まったら、十分な生活費を家族からもらって。後で返そうって思ってます」
「真面目だね」
「小さい頃とかは、親孝行できませんでしたから」
それからしばらく、雑誌で良い部屋を探してみる。
だけど、結局見つからなかった。
「まだ、時間はあるから。ゆっくり探そうね」
「はい」
由依は部屋が見つかるまで京都と東京を行き来するのだろう。直人はそう思った。実際、そうだ。由依は休日を東京で過ごし、平日は京都で過ごす。きっと疲れるだろう。
「あ、麻里子さん。もう買ったんですか？」
「うん、まあね」
麻里子はビニール袋を持ちながら近づいてきた。そしてファッション雑誌を取り出す。
「お昼にカレー？レッスンルームにはレンジないよ？」
「いいよ、一応今温めたから」
そういえば、好きな食べ物はカレーってプロフィールに載ってたな、といまさらながら過去をプレイバックする直人。だが、そのプ

レイバックは右耳に激痛が走ったことによって遮られた。
優子が直人の耳たぶを思いっきり引っ張っていたのだ。
「はい、これだけ買って！」
うわ……おにぎり、パン、プリン、ジュース……なんか見ただけでも十個もの食品が優子の腕で抱えられていた。
そういえば、お金忘れたから僕が奢るんだった。あぁ、言うんじゃなかった。食いしん坊だってこと思いっきり忘れてたぁ……
財布の中身を見る直人。今日はあまり入れてはいない。
「はぁ……ほら、自分で買っといで」
そう言って、直人は福沢諭吉さんを優子に渡した。
「ありがとう、いつか返すねぇ」
いつかっていつだよ……
返してもらえないだろうと確信しているため直人はあえてツッコまなかった。
「はぁ……」
直人は今持っている、マンションの特集が乗っている雑誌と適当にファッション誌と情報誌を一冊ずつとる。直人はよく雑誌を買う。今から買うのは、ＡＫＢについての方向性を考えるためだった。
ちなみに、直人の昼食は、メロンパン一個とスポーツドリンクのアクエリ〇スである。
「もう、みんな買ったみたいだね。じゃあ、そろそろ行こうか」
直人がレジ店員から雑誌等を入れた袋を渡される。
「この女の子たち、あなたのチームの子ですか？」
店員が袋を渡す際に問う。
「まあね」
嘘をつく必要はない。デビューするまで秘密だ、なんてことはする必要がないため、直人は頷いた。
「頑張ってくださいね」
それはアイドルの直人に言ったのだろう。
「ありがとう」

だが、直人的には、ＡＫＢになる彼女たちに言ってほしかった。

第二十二話　今日は客が多い（後書き）

この小説がおもしろいと思う方は、感想をお願いします！
良ければ、でいいので。

第二十三話　昼食ｏｒ昼飯

直人たちがコンビニに向かっている頃、レッスンルームでは弁当を持参している少女たちが食べ始めていた。レッスンルームにはいくつもの小団体が見える。今までの練習の経緯で、気が合う子でも見つけたのだろう。気が合うと大抵は仲良くなれる。だが逆に、趣味が違ったり、相性が悪いからって仲が悪くなるわけじゃない。少なくとも、敦子はそう信じていた。

敦子も三人ほど誘って一緒に昼食を食べていた。彼女の弁当には鮭味のふりかけをかけたご飯、卵焼き、ウインナー、それに小さなハンバークとたらこスパゲティが入っている。そのほかはサラダなど、野菜を盛り付けている。

「おいしそうだね、あっちゃんのお弁当」

「そんなことないよ」

彼女の隣で峯岸みなみが敦子の弁当を覗き込んでいた。

敦子は彼女をみぃちゃんと呼ぶことにした。さっきの自己紹介タイムでたかみなと対面している敦子は、同じ名前の人がいるということでニックネームを考えてみた。すると、みんながそう呼ぶようになった。

みぃちゃんのほかに、敦子の周りには板野友美、小嶋陽菜、たかみながいる。さっき気があっていた麻里子はコンビニメンバーの一人だ。優子もコンビニに買いに行っていた。

「なんで財布忘れるかなぁ？」

敦子は優子の忘れ物に気がついていた。優子のことだから、ただ単に忘れただけなのだろう。

「優子ちゃん、お金使いたくないから誰かに奢ってもらおうって考えてるんじゃない？直人君とか？」

「ありえるなぁ」

ほんとにそうだったら、今頃両手にいっぱいパンとか抱えてるだ

ろうなぁ。
優子の行動を予想しているうちに、敦子の弁当の中身はほとんどなくなってきていた。
「あっちゃん、食べるの早いね」
友美が言った。
「暇がある時間イコール食べる。私の生活ってそんな感じだから」
敦子は言った。彼女はよく食べる性格だ。それは直人も知っている。直人が作った特製オムライスも7分で平らげたことがある。
ちなみに、優子は4分だった。決して特製オムライスの量が少なかったわけではない。
「直人君って、実際どうやって呼べばいいのかなぁ？ニックネームとかあるの？」
陽菜が敦子に聞く。
「えっと、私は直人って呼び捨てで読んでるよ。優子はナオ君って読んでるし、中学校ではナオとか、なっくんとか、色んな呼び方があったよ。彼、友達も多かったから」
「へぇ～、そうなんだぁ」
陽菜の横で友美が相槌を打つ。
みぃちゃんもなるほど、と呟いている。
「じゃあ、私はなんて呼ぼっかなぁ」
みぃちゃんのその一言で、話題は直人の呼び方へと変わった。そこまで深く考える必要はないと思うが、敦子もその話にのった。
「う～ん……」
みぃちゃんは深く考えていた。
「陽菜……にゃんにゃんは？」
「にゃんにゃん？」
陽菜がそう言いながら猫の手招きをする。
さっきとっさに敦子が考えたものである。
「私は……直人って呼ぶ！」
陽菜が大きな声で宣言したため、部屋にいた全員が陽菜を見た。

「あれ？ちょっとうるさかった？」
暢気だな……陽菜の傍にいる三人はそう感じた。
「もしかしてパクリ？」
敦子がイタズラっぽい微笑みで問う。
「駄目？」
陽菜は本当にパクリをするようだった。
「ともも直人かなぁ」
「えぇ、ともちんもぉ？」
敦子はそう言いながらも、友美はそれが一番良いと思っていた。
友美自信、呼び捨てが一番自分らしいと感じている。
「みぃちゃんは、結局どうするのぉ？」
「やっぱり、直人君、かな？」
「結局、そうなるんだね……はい、次の話題にいこ」
と言っても、何も思いつかない敦子だった。
とそこへ、コンビニに行っていた直人たちが戻ってきた。
「あぁ、戻ってきた！」
一番最初に反応したのは陽菜だった。
「もう食べ終わってる人いるかな？後一時間ぐらい休憩とるから、みんなゆっくり体を休ましてね」
と言っても使ってたのは声だけだけどね…と付け加えながら直人は歩いていく。
そして午前中ずっといた鏡の前に座り込んだ。
「私もいれてぇ！」
明るい声をかもし出しながら優子が敦子の隣に滑りながら近づいていく。後で麻里子もやってきた。優子の隣に麻里子が座り、少し急いでカレー弁当を取り出し、口に頬張る。
「やっぱり、カレーが一番おいしぃ」
麻里子が幸せそうな顔をした。その横で優子がガツガツ、パンをかじっていく。
「優子、財布持っていってないけど、そのパンどうしたの？」

「ナオ君に買ってもらった」
「最初からそのつもりだった？」
「ナオォフノホモ？」
きっと、「何の事？」と言いたかったのだろう。だけど、優子の口の中にはまだ消化してきれていないパンがあるので上手く喋られなかったみたいだ。
悪女……今の優子にはそれがぴったり……だと敦子は一瞬思ったが、優子の表情からして本当に忘れただけなのだと感じ取ることができた。
「優子ってほんとドジなんだね」
微妙に冷めているカレーを口に運びながら、麻里子は呟いた。

第二十四話　元気のみなもと（前書き）

今回も回想が入ります。

第二十四話　元気のみなもと

パンを豪快にかじりながら、直人は雑誌のページをめくっていた。内容は、『激安マンション！』という見出しの特集。

やはり直人には、由依の住める所を探してやりたいという気持ちがあった。

こうなったのはやはり自分がスカウトしたせいなのだから、自分が責任を持って助けなければない…直人にはそういう想いがあった。

「京都、かぁ。綺麗な都市だったなぁ」

直人は呟いた。

由依の故郷。それは京都。京都の町並みは東京と比べ物にならないほど綺麗だった。

○

横山由依。京都出身。高校三年生。そろそろ卒業式の練習を始めている頃の時期。直人は京都を訪れた。由依の暮らす街に来る前に、彼は金閣寺を見てきた。直人は金閣寺の美しさに涙が出そうだった。いや、少し大袈裟かもしれない。

「由依が住んでる家って、どこだ？」

恥ずかしいことに、直人は道に迷ってしまった。確かに近くには来ているのだが、分からない。金閣寺のことばかり考えてしまったからだろうか……

直人は辺りを見回す。だが、彼の頭の中には金閣寺が思い浮かんでいた。彼は世界遺産などに興味があるわけではない。目立つようなものが好きなのだ。金閣寺はというと、金色でピカピカ光っているから好き……というのが直人の思考内の理由だった。

「はぁ……やっぱ来たことがない地域って、よくわかんないなぁ」

呟きながら、直人は地図を広げた。

地図を見ても現在地すら分からなかった。
「はぁ……とりあえず、休める所を探すか……」
直人は近くに公園があるか探した。運が良かったのか、直人はすぐに公園を見つけることができた。
今日は休日だったため、人通りも少なくない。戯れる子供、サッカーをする中学生、散歩をする女性と犬……様々な人たちがいる。そんな中、直人は誰も座っていない木の下のベンチに座った。
小さく深呼吸を一つ吐く。目的地がどこにあるか分からない以上、探す方法を考えるしかない。誰かに聞くのが一番だの方法だが、公園が現在地なら地図で少し調べてみるのも良いだろう。
「ここの公園は…お、見つけたぞ」
地図を開くと、自分がいる公園がすぐに分かった。
だが、肝心の由依の家が分からなかった。
（お手上げだ……）
誰か一緒についてきてもらえば相談できたのに……と後悔する直人だったが、今更どうしようもない。
直人はとりあえず今の気を紛らわそうと、音楽再生機……別名アイポッドを取り出す。正確にはアイポッドタッチ。タッチパネル式だ。アイドルたるもの、アイポッドは欠かせない。
一応、練習するために自身の歌も入れているが、ほとんどは女性アーティストの曲だ。ちなみに直人が好きな女性アーティストは、面識があるＹＵＩである。アルバム、シングルともにすべてアイポッドに入っている。ＹＵＩも直人のことを良く思ってくれている。何せ、直人がＡＫＢの前に芸能界にデビューさせた女性でもあるのだから。
「あ……」
イヤホンをつけようとしたときに地図が落ちてしまった。イヤホンを耳につけてから地図を取ろうと直人は体を屈めた。だが、地図を拾ったのは直人ではなく別の人だった。足を見てすぐに女性だと分かった。直人はすぐさま顔を上げた。

「落としましたよ？……境直人さん？」
地図を拾ってくれたのは、直人自身が探していた人物であった、横山由依だった。
「あ、えっと、やぁ」
とりあえず挨拶をしながら体をベンチにもたれさせる。
「もしかして、私が採用されたんですか？…いや、そんなわけありませんよね」
由依がそう言いながら地図を直人に渡した。
「いや、僕は、君を採用したんだよ」
「え？ほんまですか？」
由依が一瞬ほころんだ。
いや、一瞬どころではない。直人の言葉を聞いてずっとほころんだ表情が続いた。
「いやぁ、ちょっと道に迷っちゃって。あははは……」
とりあえず直人は笑って誤魔化してみた。
「悪いけど、家まで案内してくれるかな？」
「あ、はい、もちろんです！」
由依は力強く頷いた。

応募のプロフィールには、保護者からの評価という項目がある。
由依のプロフィールは彼女の母親が書いたものだった。
―彼女は誰もが認める努力家です。
ただ一言だけ。評価はその一言だけだった。
それが、直人の興味を引いたのだ。
直人は立ち上がった。由依は歩みをはじめ、直人もそれに続いた。
由依は散歩していたらしい。そして少し足を休めるために公園に着いた直後直人と出会った、という経緯である。
歩いて数分、由依が住まう自宅に着いた。
「ご両親は反対はしていないんだよね？」
一応、スカウトというのには両親の説得という目的もある。

「はい。それじゃあ、入ってください」
「じゃあ、失礼いたします」
玄関に入った直人は、すぐに由依の母親に出迎えられた。
「あ、あの境直人さん！？うちの娘、採用されたん。嬉しいわ！とにかく、入って」
手招きされ、直人は小さく礼をして靴を脱いだ。リビングに案内され、直人は横山親子と対面する形で椅子に座った。
直人はリビングに案内された。
「この子、すっごい努力家なのよ」
「ええ、分かってますよ」
直人は娘を褒め称える母を見てほくそ微笑んだ。自分の母も、今生きていたら同じことを言ったのだろうか……
「僕は、必ず彼女を素敵なアイドルにして見せますよ」
「ほんと？約束してくれるん？」
由依の母親が問いかける。
直人は母親の隣に座る由依を見据えた。
「はい」
自分でも、この言葉には強さが感じられるはずだ、と思った。
保護者の評価で、たった一言しか書かないということは、その一言に相当自信があるということだ。
横山由依は本当に努力家なのか、本当はサボりたがり屋ではないのかと、直人は一瞬考えたが、すぐにその考えを頭からかき消した。
人の言葉を簡単に信じるな、と前にある人から教わったが、直人は逆に思う。
人の言葉を簡単に疑うな、と。

第二十四話　元気のみなもと（後書き）

いやぁ、思わずＡＫＢ以外の女性アーティストの名前をだしちゃいました。一応それが直人の過去設定なので、不満がある人はどうか簡便してください。

第二十五話　片隅の記憶

「またか……」

痛くてどうしようもない頭痛が、直人を襲った。必死に堪えたため、周りの人には頭痛のことを気づかれていない。

（どこだ、頭痛薬は……）

直人は服のポケットをあさった。左ポケットに手を入れると、直人は探していたものを見つけた。直人はポケットから取り出す。それは、錠剤が入ったビンだった。

直人は薬を三つほど取り出して口に放り込む。錠剤のため、すぐに飲み込むことができた。

「俺もそろそろ永眠かな……」

冗談めいた言葉を口ずさみながら、直人はビンを再びポケットにしまいこむ。

直人は逆の右ポケットに手を入れた。そこから取り出されたのは、黒のカラーリングが特徴の録音機だった。ちなみに、直人が自分で作り上げたものだ。機種はデジタルオーディオプレーヤー。

直人は、アイドルとしての仕事で、様々な資格を獲得しているため、色々な作業ができる。録音機を作るという作業もそのうちの一つだ。実際に今も試験を受けている。

直人はイヤホンを耳につけた。録音機で二ヶ月前の記録を再生する。

その記録は、今この部屋にいる少女たちと出会ったときの記録。

「どうしたの？」

「え？」

直人に話しかけてきたのは、柏木由紀だった。そういえば、近くで食べてたような気もする。

「録音した音を聞いてるだけだよ」

「何を録音してるんですか？」

「色んなことだよ……お弁当は、もう食べたのかい？」
「はい」
「そっか。もう少し休憩してていいよ。まだまだ食べてる人多いから」
「はい。ありがとうございます」
由紀はまだ直人が聞いている音が気になるようだ。
「ごめんな。この音は、人には聞かせたくないものなんだ」
「そうですかぁ。残念です……」
由紀は名残惜しそうにその場を去っていく。
でも、直人にはどうしても他人にこの録音機を使わせたくなかった。
これは、直人の生きる目的を思い出させてくれる大事なものなのだから。

―直人には、欠点が一つある。

それは、重い病気を抱えているということ。病名は不明。治療法なし。
いわゆる、不治の病というやつだ。医師は健忘の可能性が高いと言っていた。
不治の病が引き起こす症状……それは記憶障害だった。彼の病気事態が記憶障害だと断言できる医師はいなかった。脳の状態が記憶障害そのものの状態ではないというらしい。記憶障害よりもひどいらしかった。
直人は忘れないように、もしくは忘れた時に思い出せるようにと、色々な工夫をしている。録音機で録音し、こまめにメモを取り、一日の最後にはページ一枚で一日分の日記を書く。
それでも、記憶障害は悪化する一方だ。
脳の状態は悪化していく一方だった。優秀な医師は、直人にこう告げた。

―いつか、近い将来に身体が動かなくなる。手も足も。そして、視神経が悪化して目が見えなくなる。視覚の悪化だな。そして、視覚の他に、臭覚、聴覚が悪くなる。最悪だと、身体の機能はすべて低下するだろう。声も出せなくなるな、たぶん。

「今は悪いこと考えてても仕方ないよな……」

録音機をさらに巻き戻した。

(不治の病って、ほんと、漫画みたいな話だよな。身体の機能全部が停止するって、現実にはないと思ってたよ)

直人は心の中で微笑んだ。本当は怖いだけだ。強がってるだけだ。

「後二十分休憩とるからねぇ」

みんなに合図してから直人は身体を床に倒した。

〈境直人―12歳―6月10日―午前12分〉

時間が詳しく説明された後、数秒間イヤホンから音は聞こえない。

―ありがとう!

ただ、一言、少女が発した5文字の言葉だけが、その時間の記録だった。

たった5文字だが、直人にとっては大切な記録だった。

「はぁ……休憩が終わったら、何しよ……」

やはり、計画性がない直人だった。これは決して病のせいではない。

「今日は歌のレッスンだけで終わらせようと思ったけど、大丈夫かな。レッスン終了予定は確か……何時だっけ?」

「四時だよ」

いつのまにか、直人の傍に優子がいた。独り言を聞かれたみたいだった。

「そっか。今日は早く終わるかもしれないな」

「たった一ヶ月で歌とダンスを完璧にしなきゃいけないのよ?素人の私たちが。なのに、そんな暢気でいいのぉ?」

「ああ、きっと大丈夫さ」

きっと……いや、たぶんかな。

第二十五話　片隅の記憶（後書き）

いやぁ、すごい重い病気っていうのを説明したくて、よくわからない文章になっちゃったかもしれません。

第二十六話　テスト

休憩は終わりだ。そろそろ練習に入らないといけない。
直人は辺りを見回す。皆誰かと会話している。
「みんなぁ、集まってくれ！」
元々直人の傍にいた優子は「整列！」といわんばかりに手を挙げた。
「最初に並んでたときと同じように並んでね」
見事に背の順だった。どうしたらこんな風にすぐ並べるのだろうか。
「じゃあ、今から一人ずつ歌ってもらおうと思う。簡単なテウトだと思ってくれたらいい？」
周囲から、というか列からどよめきの声が上がる。
あんだけ練習したんだから大丈夫だと思うのだが……
「今回は、順番は自由にしようと思う。さあ、誰から行く？」
すぐには誰も手を挙げなかった。
まあ、当然だと思う。
「僕が決めても、いいのかな？」
きっと、少女たちはそれも嫌だろう。
一分待っても、手を挙げる者はいなかった。
直人は、自分が決めることにした。
「誰にしよっかなぁ……」
直人自信、最初に歌わせるとなると、判断にこまる。正直言って、歌の上手さには人それぞれ違いがある。ここは、とてつもなく上手い人を先に出すべきなんだろうか……
「じゃあ、一人目は、君にしよっかな」
直人は適当に指を指してみた。
「え？あたし？」
反応したのは、小嶋陽菜だった。

「ああ、君」
別に彼女を指差したわけではないのだが、直人は頷いた。直人には嘘をつくのが引けるが、仕方なかった。直人には迷って選べない。
「さぁ、前に出て」
陽菜に直人は手招きをした。
陽菜は少し表情を曇らせたが、立ち上がって前に出た。
「カラオケだと思って歌ってみてくれ。今回は歌詞を見てもいいし、音楽もカラオケじゃないから」
「はぁい」
陽菜は返事をする。スカウトした日にも思ったが、この人は天然なのだろうか……
「じゃあ、かけるよ」
直人はラジカセを少し陽菜に近づけて置いてから再生ボタンを押した。
次第に音楽が歌いだしに近づく。
「……」
陽菜が歌いだした。音程は取れている。歌としてはいいだろう。
直人は最後まで歌を聞くことにした。全員の歌を最後まで聞くのは少々時間がかかるが、直人はそれでもいいと思っている。
「……ありがとう。歌い終わった人はこっちに来てくれ」
歌い終わった陽菜を列から巣押し離れたところに座らせる。
「次から、適当にどんどん当てていくからねぇ、覚悟しとけよ」
最初からこう言えば良かったと心の内で後悔するな大だったが、もう過ぎたことだった。
「次は、君だ」
直人が指差したのは、敦子だ。
「はい、敦子だね」
選んだ人を手を引っ張ってでも前に連れ出していった。
そのまま、テストは続いた。
皆、最初の時より歌は大分良くなっている。自分たちだけで練習

をしていたとは思えない。
学生は、音楽の授業もあるおかげか、音程もちゃんと取れていたため、直人にとっては好評価だった。
最後は増田有華だった。
「君で最後だな」
確認してから、直人は音楽を流した。
有華が歌いだす。
(歌唱力、完璧だな)
彼女の歌声は歌手の直人自信驚くべきものだ。たかみなも良かったが、有華には少し劣る。午前に歌いだしたときとは全く上手さが違う。
直人は、ずっと有華の歌声を聞きたいと思ったが、今はテスト中であり、音楽は永遠に続くわけではない。
直人が思った一分後、有華は歌い終わり、全員のテストが終わった。

第二十七話　キャッチフレーズ

テストは終わった。実際、今日はテストで終わろうと思ったが、いくらなんでも早すぎる。

「みんな、ありがとう。ここで一旦歌の練習はやめるよ。他にやってもらいたいこともあるから」

直人にはふとひらめいたことが二つある。

「今から、自己紹介時のキャッチフレーズを考えてもらいたい」

「キャッチフレーズ？」

佐江が呟く。

「ああ。公演にはＭＣの時間がある。その時に、自分を自己紹介するときに、観客が心にグッとくるようなキャッチフレーズを考えてほしい。別に、言いたくないとか言わなくていいって人は考えなくていいんだけど」

直人は立ち上がった。

「座って待っててくれ」

直人はそう言いながらレッスンルームの端に向かう。その先には小さな机がある。

直人はその机の引き出しを開けて、中から何かを取り出した。

それは小さな紙。その紙を何十枚と持っている。

「みんな、鉛筆は持っているよね？今から、考えたキャッチフレーズを紙に書いてもらう。書いたら、僕のところまで持ってきてほしい。いいね？」

否定するものはいなかった。

「じゃあ、配るね」

直人は一人一人に紙を配っていく。それはＢ４サイズの白紙を小さく切りとったものである。

「では、始めてくれ」

直人の始まりの合図と共に、皆が鉛筆を取りに行く為にレッスン

ルームを出た。
鉛筆は当然鞄に入れてある。その鞄はというと皆更衣室においてある。ということで、皆は更衣室に鉛筆を取りに行ったのだ。したがって、レッスンルームにいるのは直人一人だけだった。先ほどまで可愛い少女が４８人もいたのに今は男一人だ。
なんだか、寂しかった。
「こういう時に音楽はかかせないんだな」
人が誰もいないと、辺りは静かになる。そんな時、直人は必ず音楽を聴く。
直人はイヤホンを両耳につける。
流れるのは女性アーテイストの曲である。実際、直人は女性アーティストの曲ばかりを聞く。
なので、Ｉｐｏｄに男性アーティストの曲は少ない。
「はぁ……少し、音程が低いんじゃないのか、この曲は。あまり良い曲とはいいきれないかもしれない」
直人は呟く。最近独り言が多くなってきたかもしれない。
「キャッチフレーズ、なんにしよっかなぁ」
最初にレッスンルームに戻ってきたのは由依だった。直人は喋り方ですぐ分かった。由依は京都弁だ。
「ゆっくり考えてね」
直人はそう言いながら、聴いている曲をスキップする。
シャッフル再生しているので何が流れるかは分からない。
……イヤホンから聴こえるのは自分の歌だった。
「自分の曲を聴くのは性に合わないな」
直人は微かに、笑みを浮べた。

第二十七話　キャッチフレーズ（後書き）

少し短かったかもしれませんね。

第二十八話　続・キャッチフレーズ

次第に皆がレッスンルームに戻ってきた。仲が良くなった子にどんなのがいいか聞いたりしている。
「一番最初に店に来るのは誰かなぁ」
直人は呟く。
やはり、自分のキャッチフレーズを考えるとなると、すぐに思いつく人はいない。
直人は待つ間、ずっと音楽を聴くことにした。
……正直、暇だった。

「うぅん……キャッチフレーズは難しいな」
佐江が唸る。
「やっぱ、普通じゃだめだよね？」
「そうだね」
佐江の質問に答えたのは優子だ。優子は優子でキャッチフレーズに悩んでいる。
「私はキャッチフレーズいらないかなぁ」
「え？敦子、いらないの？」
敦子は紙を床に置いた。
「なんでなんで！」
佐江が驚いた表情を見せる。
「なんとなく、私にはい必要ないと思って」
敦子は言った。
「じゃあ、ナオ君に言いにいきな」
「うん、そうするね」
敦子は立ち上がって直人に近寄った。
「もう思いついたのか？」

「うぅん」
敦子は首を横に振った。
「いらないのか、キャッチフレーズ？」
「うん、私はキャッチフレーズはいらないの。だから、紙返すね」
「……わかった」
直人は頷き、敦子から紙を受け取る。
「……私はどうすればいい？」
「そうだね……どうしよっか？」
「考えとかないと駄目じゃん」
「まあ、そうなんだけどね」
直人は顎に手を当て、しばらく考えるそぶりを見せた。
「そうだ。これを貸すよ」
直人が渡したのはデジタルオーディオプレーヤーだった。
「これに、ＹＵＩに歌ってもらった《桜の花びらたち》が入っている。これを聞いて、リズムを覚えてほしい」
「わかりました」
敦子はデジタルオーディオプレーヤーを直人から受け取った。
「ＹＵＩさんと随分仲が良いよね、直人は」
「彼女は僕のおかげで今アーティストとして生活できるからね」
「威張っちゃって。もう……」
直人は敦子の言いたいことが分かる。
きっと、私も有名人と友達になりたい、と思っているに違いない。
「凄く身近に、幼馴染の有名人がいるじゃないか」
「あなたは男でしょ。女の子で、有名人の友達がほしいのよ。というか、言葉に出してないのになぜ分かるの？」
一応、敦子はつっこむが、直人の返す言葉はいつも一緒だ。
「顔に書いてある」
本当にいつもと一緒の言葉が出てきた。
「今度ＹＵＩに会わしてやるから、さぁ行った行った」
「なによそれぇ……全く、これだから気分屋は……」

「それは関係ないだろ」
直人が反論する。
「音楽聴いてるんじゃないの？」
「実は音楽ストップしてる」
「詐欺ったなぁ」
「なんでだよ。さぁ、早くＹＵＩの天才的な声でも聞いて来い」
「はいはい、分かりましたよ」
敦子はさっきいた場所に戻っていった。
直人は再び音楽を再生させていた。
「それ、どうしたの？」
優子が敦子の左手に包まれているものを指差した。もちろん、さきほど直人が渡したものである。
「直人がＹＵＩさんの歌声を参考にしろ……だって」
「なんでＹＵＩさんなの？」
佐江が敦子に聞いた。
「頼みすいから……だと思うよ」
答えたのは敦子ではなく、優子だった。
「知り合いなの？」
佐江はさらに質問を投げかける。
「まあ、そんなところだよね」
「そうだね」
敦子と優子は顔を見合わせる。
「なんか私、一人だけ直人のこと知らないみたいな感じで仲間はずれっぽい……」
佐江が少し俯く。
「なんでそんなところで悲しくなっちゃうの？」
確かにその通りでもある。
「元気に行こうよ。ね、佐江」
「……そうだね」
佐江が元気よく頷く。大体、なぜあれでへこむのだろうか、優子

にはあまり理解できなかった。
「ゲンキングだね、佐江は」
優子言った。
「ゲンキング？」
佐江が反応し、優子は説明を始めた。
「元気の王様。ゲンキのキング。略してゲンキング。これ、良いと思わない？」
優子が敦子と佐江に聞いた。
「私は良いと思うよ」
敦子が肯定の頷きを見せた。佐江はというと、しばし考え込んでいた。
「よし、決めた！」
佐江は勢いよく立ち上がった。
「何を決めたの？」
いきなり立ち上がったためか、少し注目を集めた。音楽を聴いている直人は目を瞑っていて佐江には気づかない。
「キャッチフレーズ！」
佐江はもう一度座り、紙に考えたキャッチフレーズを書きこんだ。そして、紙を持って直人のところに向かった。
「直人、起きて！」
佐江は直人の肩を叩いた。
「決まったのか。どれ、実際に言ってみてくれないか？」
直人は音楽を停止させた。
佐江は一つ咳をする。
「ゲンキングこと、宮澤佐江です」
「……シンプルで良いと思うよ、ただ……さりげなくゲンキングを説明しといたほうがいいかもね」
直人は微笑んだ。
「これで決定だ。佐江。君のキャッチフレーズは、これでいいよ」
直人は佐江の手からそっと紙を取った。

「この紙は僕が預かる。後で報告書にまとめるから」
「分かった」
「じゃあ、敦子と一緒に歌を聴いてリズムを覚えてくれ」
「りょうかいぃ……」
佐江は敦子の元へ駆け寄った。
一人目、キャッチフレーズ決定。

第二十九話　キャッチフレーズ・開始十分後

佐江のキャッチフレーズは決まってから約十秒。
直人は、佐江のキャッチフレーズが書かれた紙を眺めていた。
「はっきり行って、なんでもいいんだよなぁ。僕が良いか判断するみたいな感じになっちゃったけど」
直人は呟く。佐江のキャッチフレーズでは個性的で良いし、ゲンキングというネーミングはなかなか良いと思う。だが実際のところ、直人はどんなキャッチフレーズでも良いと言うだろう。
「次は誰だろうなぁ……」
直人は辺りを見回す。次に誰が来るかは全く予想できない。
だが、必ず誰かが来る。

麻友は思いつきそうで思いつかなかった。彼女はキャッチフレーズを考えることを甘く考えている。
そう大袈裟で言うことでもないが。
麻友の隣に座っているのは柏木由紀。彼女もアイデアが全く思いつかない。
さらにその隣で指腹梨乃が唸っている。
3人中3人が、アイデア一つ浮べていない。
「やっぱり、印象的なのが良いよねぇ」
由紀がペンを口に当てる。
「自分のニックネームを入れるとかは？例えば……まゆゆ！」
梨乃が麻友を指差した。
「まゆゆ？」
「そう。麻友ちゃんのニックネーム。良いと思わない？」
「……そうですね」
麻友は「まゆゆ」というあだ名を気に入ったのか、何度も呟いて

いた。
「まゆゆ…でキャッチフレーズか……難しいなぁ」
麻友は気に入ったあだ名でキャッチフレーズを考えようと決めたらしく、紙の真ん中にまゆゆ、左端にまゆゆと書いては消してゆく。
「私もなかなか思いつかないなぁ……梨乃ちゃん、良い案ありませんか？」
「う～ん……難しいなぁ」
梨乃はしばし考え込む。
「由紀……ゆきりんだよね……ゆきりんワールドなんてどう？」
「ゆきりんワールドって……どう言うんですか？」
その通りだった。
「夢中にさせちゃうぞ！……とかは？」
「う～ん…なんかイタイタしい……でも思いつかないから、そうしましょう！」
「え？ほんとにそれにするんですか！？」
梨乃のツッコミを無視して由紀は紙に文章を書き出した。
「じゃあ、直人さんに見せてきます」
由紀は静かに立ち上がった。佐江の時とは違い、みんなから注目を浴びるのは一瞬だった。
佐江の時は勢いよく立ち上がったからだ。由紀はとても静かに立ち上がったため、気づいていない人さえいる。
「直人さん、どうですか？」
「言ってみて」
佐江の時と同じように促す。
「寝ても覚めてもゆきりんワールド！！夢中にさせうちゃうぞ♪ゆきりんこと柏木由紀です」
「……言いんじゃないかな？」
「ほんとですか！？いやぁ、よかった。少しイタイタしいなぁ、とか思ってたんですよ」
由紀は安心したように紙を由紀に渡した。

「……これ聞いてリズム覚えてね」
「わかりました」
直人からデジタルオーディオプレーヤーを受け取った由紀は満足したように麻友たちの元へ戻っていった。
確かに、少しイタイタしかったのかもしれない。だけど、一人ぐらいはこういうのが良いだろう…直人はそう思う、ことにしたのだった。
直人は佐江の紙の上に由紀から渡された紙を重ねた。
「次は手短なキャッチフレーズを来てほしいなぁ」
直人は今願うことしか出来ない……

麻友は由紀が戻ってきた瞬間に思いついた。自身のキャッチフレーズを。
「さっしー、あなたのおあげですよ！」
「え？あ、どういたしまして」
麻友は早々に直人の元へ駆け寄った。
「今度は待たずに済んだな……さぁ、どうぞ」
「……言っちゃいますよぉ」
麻友は相当自信があるようだった。言葉に出さなくても分かる。何せ、麻友の口元がいやらしいほどにつりあがっているのだから。
「—み～んなの目線を、いただきまゆゆ～♪まゆゆこと渡辺麻友です」
「…凄くいいんじゃないかな。僕は気に入ったよ」
自信のニックネームをキャッチフレーズに入れるというのは直人にとって想定内だ。
「じゃぁ、由紀と音楽を聴いてリズムを覚えてくれ」
「わかりましたぁ」
麻友はそそくさと戻っていった。
「まともなキャッチフレーズだ」

直人はまた、紙に紙をかぶせた。

第三十話　手紙（前書き）

今回はいきなり回想に入ります。
ちなみに、時間的に問題に気づいたので設定を変更
メンバーの年齢は……直人の同い年である敦子を基準に考えてください。彼女が中学を卒業して半年とちょっと経った…という感じです。

第三十話　手紙

東京都出身の女の子ってのはほんと非常に有難い。他にも東京出身がいたが、その時も同じことを思った。
今日は、宮澤佐江という少女をスカウトしに来た。
直人が聞いた時点では、彼女はとても元気で明るいらしい。高校の同級生に会った時、彼女はボーイッシュキャラだと言っていた。
だが、佐江には中学という言葉はあまり使わないほうが良いのかもしれない。
中学時代、佐江はバスケ部に所属していた。だが、一時期いじめにあい不登校になっていた。バスケ部の顧問でもあった恩師がいなければ、佐江はその先一生いじめに苦しみ続けていたかもしれない。
「ここか」
佐江が住む家を見つけた直人。
インターホンを押してすぐに玄関が開いた。
玄関からひょいっっと顔が突き出される。
佐江だった。
直人は佐江の母が出てくると予想していたため少し驚いたが、顔には出さなかった。
「境直人です。よろしく」
直人は手を差し伸べる。無論、握手できる距離ではない。
「わぁ！もしかして、私受かった！？」
印象的な声だった。これから忘れることはないかもしれない。
直人は頭の中で冗談を呟きながら手を下ろした。
「あ、どうぞ上がってください」
佐江は玄関をさら大きく開け、直人を家に招きいれた。
玄関に靴はない。今佐江が履いているサンダルだけだ。
「佐江ちゃん、だよね？」
「うん、そうだよぉ」

さっきは敬語じゃなかったっけ。
「じゃ、お邪魔します。家には誰もいないの？」
佐江以外に誰かがいるような雰囲気はなかった。
「うん、今はママ……お母さんも仕事だから」
「いつもの呼び方で大丈夫だよ」
佐江の頬が少し赤く染まった。きっと、恥ずかしいのだろう。
直人は佐江に優しく対応した。直人はとても温厚な性格だ。それは直人の身内ならば誰もが認めることだろう。直人は今まで他人に怒ったことがない。
「こっちに来て」
「ああ」
案内されたのはリビングだ。
凄く綺麗だった。家具の配置がとても良い。机に置かれたリモコンやティッシュペーパーが綺麗に固められて置かれている。
「綺麗だね」
「私が片付けたの。なんか、部屋が汚いって、凄く嫌じゃない？」
「ああ、確かにそうだ」
そう言えば、保護者の評価……綺麗好き……だったのを今更思い出した。別に悪いことではない。いや、むしろアイドルグループにはあってほしい性格だ。
直人はソファに座った。佐江は二人分の紅茶を用意し、机に置いた後直人の左横に座った。このリビングにはソファの向かいに椅子はない。あるのはテレビだ。
「知ってるんだ、僕が紅茶が好きだってこと」
直人は紅茶をすする。
「みんな知ってるよぉ。あなたのサイトでも載ってるし、この前テレビで一日に三回ぐらい飲むって言ってたじゃん」
「ああ、そういえばそうだったね」
確か、三日前に放映された番組で直人はそう言った。だが実際は撮影したのが一ヶ月も以前であるため、直人は全く覚えていなかっ

た。
「なんで私なの？」
佐江は聞きながら紅茶をすすった。
「君みたいな元気な子が、グループには必要だからだよ」
直人はゆっくり紅茶を味わった。
「それに……僕は、バスケが好きでね。同じスポーツが好きな人がいてほしいなって……」
佐江は直人の言葉を聞いて俯いた。紅茶が入ったカップを机に置く。それに続いて直人もカップを机に置いた。
「中学の時、僕はバスケ部だった。アイドルを初めて、キャプテンになることはできなかったけど、練習できる時は僕が指示を出していたんだ……だけど、僕の指示に反対して、揉めたことがあるんだ。その後、僕は一時期悪ふざけのようにちょっかいをかけられいた。それは、第三者から見たらいじめだったのかもしれない……だけど、僕は乗り切ることができた。大切な友人のおかげで」
直人の脳裏に、二人の少女の顔が浮かび上がった。
「君も、あの人のおかげで乗り切られたんだよね。自分自身じゃなく、支えてくれる人のおかげで乗り越えたんだよね、君は」
佐江は頷く。
「僕もそうだ。やっぱり、同じ境遇の人がいるとね、傍にいてほしいって思っちゃうんだ……一言で言ってみるよ。僕は、自分のわがままで君をＡＫＢに入れたいと思ったんだ」
直人が言い終わる頃には、佐江の頬を一筋の涙が浮かんでいた。
聞いたとおり、彼女は涙もろかった。
直人は佐江に共感していた。彼女を選んだ理由は、ただ共感したからだと思ったからなのかもしれない。
「僕には君が必要なんだよ」
直人は言った。佐江を嫌う人なんて絶対にいない、直人はそう感じていた。
涙を流す佐江の肩を、直人はそっと抱いた。抱き寄せられた佐江

は彼女の腕に頬をつけた。
「ありがとう、直人さん」
「さん付けはいいよ」
「……わかった、直人」
「……別に、慣れない泣き方はしなくていいんだよ」
「うん、そうだよね」
佐江は鼻をすすった。
「あ、でも、僕の服で涙を拭くのはちょっと……」
「……わかってるよ」
だけど今明らかに僕の服で拭こうとしてたよ……
直人の静かなツッコミは声にだしていないため、佐江には聴こえなかった。

第三十一話　キャッチフレーズ・開始一時間後

キャッチフレーズ考案時間が開始されてから一時間が過ぎた。キャッチフレーズがいらないと言う敦子をふくめ、１７人がキャッチフレーズを決めた。

正直、みんな良いと直人は思った。それに、直人は一時間で１７人もキャッチフレーズが決まるとは思わなかった。

直人自身、印象的だったのが小嶋陽菜の「埼玉県から来ました！こじはること小嶋陽菜です」だった。別に以外だということではないが、実際に聞いてみると、シンプルすぎて逆に印象に残った。あまりアイデアが思い浮かばなかったのだろうな。

「僕もキャッチフレーズ考えてみようかな」

良い暇つぶしになるだろうと、直人は考えた。

だが、全く思いつかない。自分を紹介するための言葉を考えるだけなのに……

「僕の良いところって、なんだ？」

自分の良い所……いわゆるチャームポイントが分からない。

自分のことをアピールできない奴にキャッチフレーズはいらないか……

「あの、決まりました」

「言ってみてくれ」

キャッチフレーズを言おうとしているのは、田名部生来だ。

「熱ＥＹＥに火の用心！あなたのハートをロックみん。たなみんこと田名部生来です」

「良いね。これで決定だ。じゃ、リズム覚えてね。確か……みぃちゃんが一人で使ってると思うよ」

「分かりましたぁ」

生来は満足したような顔つきで去っていった。

これで１８人目だ。そろそろ直人は待つのに飽きていた。

生来とすれ違いに板野友美がやってきた。彼女には今時のギャルという印象があった。
「君は……いらないかな？」
「え？なんで分かったの？」
「勘だよ。はい、どうぞ」
直人はオーディオプレーヤーを渡す。
「どうも」
友美は少し早い足つきで直人を離れていく。
直人はキャッチフレーズが書かれた紙を手に取った。一枚ずつ内容を確認していく。
やはり、否定するようなキャッチフレーズはない。
「どう？調子は？」
話しかけてきたのは優子だった。
直人は耳からイヤホンを外す。
「ぼちぼちだね。まぁ、そろそろみんな決めてほしいなぁ」
直人はあまり待つのが得意ではない。そろそろ限界だった。
「じゃあ、私があなたについて話をしてあげるわ」
「丁度良い。今僕のキャッチフレーズを考えていたところだ」
少し前に諦めたが。
「へぇ……あなたの性格って……一言で言うと、鈍感だよね」
「え？」
「恋愛に関しては全然駄目だよねぇ。プレイボーイっていうか、色んな子と付き合ってたのに」
「父さんの遺言だよ。色んな子と付き合って恋愛をたくさん経験しろって」
「あなたのお父さんいつも言ってたよねぇ」
「第一、デートはしてたけど付き合ってはなかったよ。付き合ってたのは今までで二人だけだ」
直人は自信ありげに言った。直人は本当のことを言っている。四年生の終わりごろに他県の子に告白されそのまま付き合い、今も一

応別れてはいない。いないが、ほぼ自然消滅みたいな感じになっている。もう一人は、中学一年の同級生。タイプの女の子で可愛く優しかった……そして何より他県のガールフレンドに似ていた、という理由で告白を断れなかったのだ。その一年後、同級生の女の子は親の転勤が都合で海外に留学した。

「なのに、鈍感なんだよねぇ」

「鈍感って、どういうことなんだよ？」

「だって、大抵の人だったら、この子絶対俺のこと好きだ！って分かるようなアプローチ受けても全く好意に気づかなかったもん」

「そうだったっけ」

直人はあまり覚えていないようだった。

第三十二話　キャッチフレーズ・開始一時間十分後

確かに境直人はプレイボーイかもしれない。いや、確実にそうだ。だけど、それはただ、直人が気分屋なだけで……

「僕ってそんなに気分屋かなぁ？」

「気分屋、マイペース、超鈍感」

「わぁ凄い。僕の性格を三連発だ。どれも褒め言葉として受け入れることはできないな」

「その通り」

優子は頷いた。

「今、あの女の子とはどうなってるの？」

優子が言っているあの女の子とは他県の子のことだ。

「そういえばちゃんと別れていなかったなぁ。でもなぁ、捨てるには勿体無い子なんだよなぁ。可愛いし、タイプだし、何より俺の理想の女性像に近い」

直人は自信ありげに答えた。

「関係を維持するの？それじゃあ新しい出会いはいつまでたってもないよぉ？ここには女の子が４８人もいるんだよ」

「悪いけど、君たちは恋愛禁止だ」

「え？どういうこと？」

直人は優子の瞳を見据えた。

「康さんが考えたルールだ。恋愛禁止条例」

「何それ？」

「片思いはしていいが、両想いは駄目。それがＡＫＢのルールの一つだ」

「えぇ～？そうなの？ここには恋愛をしなきゃいけない年頃の女の子だっているのに」

「仕方ないだろ」

直人自身、恋愛禁止条例には反対だ。女の子はやっぱり恋愛すべ

きだと思うし、何より十代後半でれ恋愛をしていないっていうのは駄目だ。
「僕は恋愛禁止条例には反対しているよ。たぶん、他にも反対する子はいると思う」
「……かもねぇ」
優子は小さな声で言った。
「決まりましたよぉ、直人さん」
優子と話していて、話しかけられるまで気づかなかった。
立っているのは仁藤萌乃だ。
「じゃあ、優子。ちょっと待ってね」
直人の視線は優子から萌乃に映った。

それから30分経った。
キャッチフレーズを決めていないのは後麻里子だけだ。
「あの時はふざけすぎて近くのおじさんに怒られたじゃないか」
「ああ、そうだったよね」
直人と優子は昔話に華を咲かせていた。
内容は中学生の時の話ばかりだ。
「コスプレした僕を見たときの敦子の反応、あれは面白かった。激レアだよね」
「あっちゃん、凄い蒼白な顔してたもんね」
「ああ、そうだな」
直人が頷いた直後、麻里子がやってきた。
「君で最後だよ」
麻里子は頷くと、自身の考え出したキャッチフレーズを言い出した。
「魅惑のポーカーフェイス、篠田麻里子です」
「魅惑、か。なかなかいいんじゃないか」
「なかなかいいね……じゃないの？」

「そう言ってほしいのかい？」
「別に……どっちかっていうと言ってほしいかも」
「はいはい。じゃあ、智実が一人で聞いてるから、一緒に聞いてね
……智実って誰か分かる？仲塚智実だよ」
「わかってますよぉ」
麻里子は辺りを見回し、智実を見つけると近寄っていった。
「そういえば、君と一緒に聞いている子は今一人なの？」
「うん、そうだけど？」
「……早く戻れ！」
「きゃぁ！」
一応、追い返す形となった。

第三十三話　キャッチフレーズ・終了二分後

これで全員のキャッチフレーズが決まった。
これから少しリズムを覚えてもらう時間をとろう、直人はそう想い、携帯で時間を確認した。
歌のテスト、それにキャッチフレーズを考案する時間を費やした結果、今は午後3時だ。丁度良いだろう。今から30分ほどこの時間に費やして、その後は説明やらなんやらして時間をつぶすか。
「今から30分でリズムを完璧に覚えてくれ！」
皆音楽を聴いているので、直人は大きめの声で言った。
数人が頷いてくれた。あくまで数人。
「じゃ、俺も音楽聴くか」
再び直人はイヤホンを両耳につけた。左手でＩｐｏｄを操作して音楽を再生させる。ちなみに、直人は両利きだ。
流れたのはＹＵＩの曲だ。
「……」
右手で携帯を手に取った。待ち受け画面の写真に映っているのは直人と、同年代ぐらいの女の子だ。身長は直人の肩ぐらい、髪を一束ねにしていて、優しそうな瞳だ。
その写真は、他県のガールフレンドとの写真だ。今はほとんど会っていない。
直人はもう一度左手で掴んでいるＩｐｏｄに目線をやる。タッチパネル式のＩｐｏｄ。直人はこれを常日頃持ち歩いている。最近、携帯をスマートフォンに変えようと思っている。
直人のＩｐｏｄのボタンを押すと、まずロック中の画面が映し出される。その画面に設定している壁紙にも、直人と女の子が映っていた。
だが、その女の子は彼のガールフレンドではない。直人が音楽界へデビューさせたＹＵＩだ。写真は丁度その当時のもので、デビュ

ー祝いのパーティーで撮った。
　ロック画面を解除させる。解除すると、ホーム画面が映し出され、そこであらゆるアプリを起動することができる。そのホーム画面の壁紙にも、写真を設定してある。中学三年生の夏に行った遊園地で優子と敦子と直人で撮った写真だ。その日、直人は敦子、優子と遊園地に行ったのだ。一日休暇があまりもらえなかった直人にとって、その日もらった休暇はとても有難かった。せっかくの休暇を無駄にするわけにはいかない。直人は敦子と優子を誘って遠くに行こうと誘い、遊園地に行くことになったのだ。その日の帰り際、最後に観覧車に乗ろうと言った。その観覧車が頂点に達した時、直人の携帯で撮った写真だ。
「僕って、そんなに女癖悪いかなぁ」
　直人は呟く。
「女癖が悪いんじゃなくて、プレイボーイだって言いたいのよ」
「え？」
　また優子か、と直人は思った。だが、話しかけてきたのは優子ではなく、もう一人の大切な友人である、敦子だった。
「佐江と一緒に聴いてるんじゃなかったのか？」
「佐江は一人で聴いてる。ちょっと直人と話したくて」
「じゃなくて、サボりたいんだろ？」
「かもね」
　敦子は微笑みながら直人の横に座った。
「あ、懐かしい写真……アプリで私の顔隠れちゃってるぅ！」
「まあ、仕方ないだろ」
　直人はＩｐｏｄの画面を消した。ボタンを押すと、画面は一瞬に消える。Ｉｐｏｄをズボンのポケットにしまいこむ。直人は左腕の肘で床をついて寝転んだ。直人にとって、この姿勢はリラックス状態だ。
「あ、やばい。Ｉｐｏｄがつぶれそうじゃねえか」
　慌ててズボンのポケットからＩｐｏｄを取り出して、再度肘をつ

いてリラックス。
右手で掴んだままの携帯を見た。その画面には変わらない写真が映し出されている。
「たまには会ってあげなよぉ。きっと寂しがってると思うよ」
敦子が言った。それに対し直人は、首を横に振った。携帯を閉じて傍の床に置く。
「今は少し時間が必要なんだ。君たちの面倒を見なければならないから、今会うことはできない。それに、会いすぎると、きっと寂しくなると思うんだ。遠距離恋愛だから、会えなくて寂しくなるのは当然のことだ。だから……」
「もういいわよ。あなた、絶対話長くなるでしょ？」
「かも……」
「……しれないってばっか言って曖昧な答えださない」
直人は返すことがなかった。最近「かもしれない」が口癖になりつつあるのかもしれない。
……また言ってしまった。
直人は時間を確認してから敦子を見据えた。
「ところでさ、覚えたの？リズム」
「ええ、もう完璧に」
敦子は自信満々のようだった。
「ＹＵＩさんの歌声はとっても綺麗だったわ。さすが、あなたの好みの女の子ね」
「何言ってんだよ、急に」
そうは言っているが、直人は敦子の言っている意味が分かった。
つまり、直人の、女の子の好みのタイプがＹＵＩだということだ。
直人自身、否定はしていない。以前にも同じようなことを優子にも言われたが、その時も否定しなかった。
それは、自分でも認めているからだ。
「なんでそういうこと言うかなぁ、君も優子も」
直人は俯きながら言った。

いや、ＹＵＩが好みのタイプだと指摘されて少し照れているだけだ。
「なぁ、敦子」
「何？」
直人は顔を上げた。
「あのさ……僕はさ、いつまで生きられるんだろうな」
「え？」
「あ、いや、なんでもない。さぁ、もう話は終わりだ！佐江んとこ言ってこい！」
「えぇ？もう終わり？もうちょっとサボりたいよ」
「何言ってんだよ、さぁ早く行った行った」
敦子を自身から遠ざけた。遠ざけたかった。
今の直人には、敦子に自身の病のことを言ったかどうか覚えていない。それどころか、彼女との記憶すら、直人は忘れかけていた。

第三十四話　最後の夏で僕は……（前書き）

今回は回想ですが、スカウトの日ではありません。

第三十四話　最後の夏で僕は……

直人はまだ中学三年生で、アイドルになって二年たってもまだ大人の世界には興味が湧かなかった。

中学校では直人はアイドルであることもあって、皆の中心人物だった。バスケ部のエースで、アイドルでなければキャプテンになっているほどだ。

だけど、その才能も大して発揮できなあった。アイドルという職業に縛られ、自由を得られることは滅多にできなかった。アイドルという職業を得た代償に、自由の学校生活を失った。バスケの試合にも出られなかった。三年になって、出れたのは予選大会だけ。直人のチームは全国大会に出場したが、直人は出場することができなかった。それを悔やんでもう一ヶ月だ。もうすぐ夏休みが終わる。

「え？」

「……だから、一週間後の日曜日は一日休暇よ」

その時の直人の笑顔は、作り笑いではなく、本当の笑顔だった。両親を失ってからあまり見せなかった笑顔だった。きっと、敦子と優子でさえ見られない、いわばレアな笑顔だ。

「でも、なんで急に？」

「あなたにも、友達とゆっくりしたい日があるはずよ。だじゃら、この日曜び、敦子ちゃんと優子ちゃんを誘って遊園地に行ってきなさい」

そう言って直人の女性マネージャーは机に三枚の紙を置いた。

それは、遊園地のチケットだった。丁度三人分ある。

「絶対に誘いなさいよぉ。休暇をとるのに大変だったんだからね」

「ありがとう……詩織さん。僕と四歳しか違わないのに、君はもう完璧な大人だよ」

「私をオバさんみたいに言わないでくれる？」

「あ……ごめんなさい」

その時のマネージャーの詩織はとても怖かったが、感謝の気持ちのほうが強かった。

○

「遊園地？」
敦子が聞き返す。
「ああ、今度の日曜日なんだけど、開いてるかな？」
ここは中学校の教室だ。今日は皆部活でいない。もちろん、卒業生の優子もここにはいない。
「大丈夫だけど……仕事はないの？」
「詩織さんが一日休暇をくれたんだ。いける？」
「……うん、大丈夫」
「よかった……優子も行けるって」
「そうなの」
言いながら直人は敦子にチケットを渡した。
「ホントに行ける？」
「うん、ホントに大丈夫だよ」
「そうか、ありがとう！」
せっかくの一日休暇を無駄にせずに済んだ。
「お、境くんがデートするの？」
「は？」
「おぉい、あの境直人様がデートだってよぉ！」
「えぇ！？そんなぁ……」
今の会話は、どうやら廊下で部活終わりのクラスメイトに聞かれていたようだった。

○

「へぇ、結構いいところだねぇ。賑やかだしねぇ」

優子が当たりを見回した。
「まずどこから行こうか？」
直人が二人に聞いた。
「そうだねぇ、やっぱり最初はジェットコースターかな？」
優子が提案し、二人はそれに賛成した。
ジェットコースターは丁度一列３人乗りだった。直人は真ん中にすわり、左右に敦子と優子が座る。
「はぁ……実はさ、僕って遊園地初めてなんだよなぁ」
「そうなの？」
敦子が問う。それと同時にジェットコースターが動き出した。
「両親がいないのに、兄妹だけで遊園地行くか？」
「……うんうん」
敦子はしばし後悔した。直人に辛い過去を思い出させてしまったと。
ジェットコースターがゆっくりと上昇してゆく。優子が下を見下ろすと、地面からは遠くかけ離れた光景が見えた。
「なぁ……ジェットコースターって、怖い？」
直人が二人に聞いた。
「まぁ、怖いっちゃ怖いよね。手を挙げたら相当スリルがあるい？」
優子がそう言いながら両手を空高く挙げた。その瞬間――。
ジェットコースターが……降下していった。
当然、優子は‘相当’なスリルを味わうことになった。隣で直人は安全レバーをしっかり両手で掴んでいる。敦子も安全レバーを掴んで……簡単に言うとはしゃいでいた。
まあ、それはいいのだが……
「うおぉぉぉ！わぁぁぁ！」
きゃぁ！という悲鳴だったら分かるのだが、優子の悲鳴はそんな今時の女子高生のような悲鳴ではなく、無邪気にはしゃぐ子供のような悲鳴だった。
直人は子供のような悲鳴を聴きながら、ジェットコースターのス

リルを味わった。

第三十四話　最後の夏で僕は……（後書き）

回想はまだまだ続きます。

第三十五話　一夏の思い出の中で……（前書き）

前話の回想の続きです。

第三十五話　一夏の思い出の中で……

「さぁ、ジェットコースターの次は何に乗る？」
優子はもう完璧に子供だった。敦子は敦子で中学生らしくはしゃいでいた。
「お化け屋敷なんてどうだい？」
「えぇ？やめようよぉ」
優子が即座に否定した。それを見て直人は少しからかいたくなった。
「怖いのかい？」
「えぇ。怖いよぉ。敦子だってそうでしょ？」
「うん……まあね」
「敦子もなのか……へぇ、それが弱点なんだね。君みたいな元気な女の子にも弱点あるんだ」
直人は本当に優子が嫌がっていることに驚いた。
「どんな人にだって弱点ぐらいあるよ、ナオ君。インディ・ジョーンズだってヘビが弱点でしょ？」
「君ってインディ・ジョーンズ好きだっけ？」
直人が若干話を逸らした。
「とにかく行こうぜ」
「えぇ……」
「でも……」
「学校の掲示板に『三年生の前田敦子と卒業生の大島優子は世界一臆病者！』なんて見出しの新聞が張られるかもよ？」
直人のその言葉が二人をお化け屋敷へと誘うことになった。はっきり言って脅しだが、今の直人はからかうことしか考えていなかった。一年後の直人と比べると、少しやんちゃな性格だった。
お化け屋敷はこの遊園地でも人気があるアトラクションだったが、今の時間帯はあまり人気が少なかった。

五分待ってから、直人たちの順番になった。
「怖がってるの？」
「直人がイジワルだって今更気づいた？」
「へぇ、そうなんだ。そういう君は怖がりっ子？」
本当に今の直人はからかうことしか考えていない。
中に入ると、やはりそこは視界が薄暗かった。
直人の左右に敦子と優子が並んで通路を突き進む。
しばらく突き進むと、床が軋む音が響いた。少し優子が肩を震わせた。
軋む音がだんだん近くなってきた。そして……
「うわぁぁぁ！」
幽霊のコスチュームをした男が後ろから脅かしてきた。
「「きゃぁぁぁぁぁ！」」
直人の左右で二人の少女が悲鳴を上げた。優子は直人の左腕にしがみ付き、首に両腕を回してしがみついた。健全な男子中学生なら、これは喜ぶべき事態だ。何せ、簡単に言うと二人の美女に抱きつかれているのだ。直人自身、喜ばしいことだ。喜ばしいことなのだが……
「く……苦しい……」
よほど怖かったのだろうが、直人に力強くしがみつきすぎて、直人に被害が及んだ。
それから七分ぐらいはその状態が保たれてしまった。おかげで直人は怖がる余裕すらない。
「早く行こう」
直人は早くお化け屋敷から出たいと願うしかなかった。

結局、直人は六回苦しみを味わうことになった。
「なんで直人、中一の時の文化祭ではあれだけ怖がってたのに、今は怖がらないの……？」

「あの時とは状況が違うの」
敦子の言っている事、それは二年前の、中学一年時の文化祭のことだ。二年生のお化け屋敷に敦子と一緒に行った直人だったが、その時、直人は凄く怖がっていた。ただ怖かったわけじゃない。アイドルとしてデビューした直人を知らない人は学校にはいない。二年生は後輩をからかうのが好きで、仕事であまり学校に来れなくなった直人を標的にしたのだ。その結果、お化け屋敷で直人はしつこく幽霊に追い掛け回され、狭い通路を四つん這いで進む時には腕をしつこく握られた。約四人ほど。
「はっきり言って、怖かったっていうより、辛かった」
「あ、ごめん、トラウマだったかな？」
敦子の言うとおり、直人はその日の出来事がトラウマになっていた。
ちなみに、優子は話に全くついていけなかった。
「私、何にも知らないんだけどぉ」
「だって、優子。その時はもう卒業生だったじゃん」
「でもいっつも会ってるじゃぁん」
「まあ、いいじゃないか。次はあれに乗ろう」
適当に直人は指差した。その先には、メリーゴラーランドがある。
「あ、えっと……」
「…くすっ」
敦子が小さく微笑んだ。慌てる直人を見て可笑しかったのだ。
「…乗ろうよ、ナオ君」
「…えっと」
やられた。お化け屋敷の仕返しだな……チキショウ。
「いいよ、乗ってやるよ」
直人はちょっと強気だった。実際、彼は負けず嫌いだ。こんなことでただし返しされるのは性に合わない。
直人たちはすぐさまメリーゴラーンドに乗った。直人は恥ずかしさを隠すのに必死だった。

メリーゴーランドが発車したようだ。直人の乗る馬が徐々に動いていく。
「どう、ナオ君？すっごく楽しそうね」
「ああ、そうみたいだな」
……完全に優子の口元が吊り上っていた。悪魔みたいに。

第三十六話　三度の飯の二度目の飯で…（前書き）

回想の半分ぐらいが過ぎました

第三十六話　三度の飯の二度目の飯で…

「そろそろご飯にしない？」
敦子が提案した。その隣で直人はうかない顔をしている。メリーゴーランドでのことが原因だ。どうやら、彼がアイドル境直人であることに気がついた客たちが、メリーゴーランドに乗っている所を写真に撮ったのだ。きっと明日にでもなったらネットで話題になるだろう。もしかしたらブログのコメントに写真が載るのかもしれない。敦子か優子が映っていたらきっと交際疑惑をかけられてしまう。
「いいねぇ、私すっごくおなかすいたぁ」
優子がおなかに手をおいた。彼女の食べる量は決して少なくはない。だが、敦子も決して引けを取らない。敦子は暇があれば食べるなんて言っているほどの食いしん坊だ。この二人を一度におごると言ってレストランにでも連れて行けば財布の中身はほぼ空になってしまう。
直人は財布の中身を確認した。入っているのは二万円だ。直人は人気絶頂のアイドルで、給料が非常に高い。それに加え、色々な人から同情されて晩飯代をくれるなんてこともあった。
「どこが良い？」
直人が聞いた。この遊園地には様々なレストランがある。
ピザの専門店なり、バイキングなりと、エリアの各地に散らばっている。
「そうだねぇ、あっちゃんは？」
「迷うなぁ」
二人とも迷っていた。
「あれ？優子、さっきは敦子って呼んでたのに、今はあっちゃんって呼んでるね」
直人が言った。それに対して優子は「あぁ……確かにそうだね」と相槌を打った。

「なんかね、呼び方なんてどうでもいいんだよね」
「それってちょっと敦子に失礼なんじゃないのか？」
「そう？」
優子が敦子を見た。
「……えっと……分かりにくいから、あっちゃんでいいよ。直人も……」
「いや、僕は敦子のままで良いよ」
敦子の言葉を途中で遮って直人は言った。
今更呼び方なんて変えたくないと、直人は思っていた。
「ナオ君はどこがいいの？」
「僕は……なんでもいいかな？」
実際、直人にはオムライスが食べたいという希望があるが、目の前にいる二人の希望を尊重したかった。
「優子は何が食べたいの？」
直人は自分から話を逸らすために優子に問うた。
「私はねぇ、お肉をガッツリと食べたい！」
「はは、優子らしいなぁ」
直人は笑った。
「でも、焼肉はここでは食べれないよ」
「じゃあ、スイーツ男子さん？お肉がある場所を教えてください！」
肉に決まりかよ。
「スイーツ男子に肉のこと聞くなよ……そうだなぁ」
直人は遊園地の地図を開いた。
「一番近いところは、バイキングだね」
「じゃあ、そこにしよう。あっちゃんもそれでいい？」
「うん、いいよ。バイキングは色々あるしね」
バイキングに決定した。直人は地図を敦子に渡した。敦子は自分の鞄に地図を入れた。
「さぁ、いこうか」
３人はバイキングの店に向かった。

ちなみに、直人の好物は、林檎とスイーツだ。スイーツが好きなのは小学生の頃からで、特別にタダで通うことが出来たミニバスケットでは昼飯に必ずスイーツを持ち込んだり、食べ物で最優先するものはスイーツ、と主張したことからスイーツ男子というニックネームがついた。その頃は、タダでスイーツをおごってもらうために試合に出て２０点決めると宣言したものだ。顧問がそのことを面白がって認め、その顧問はスイーツを１０個以上奢ると言った。

そして、試合に出て彼は３０点以上決めた。一緒に出ていた正規メンバーはあまりシュートをする機会がなかったうえに、レンタル部員として試合に出た直人が大活躍したのだから嫉妬する者もいたが、やはりみんなは直人を褒め称えた。

ちなみに、奢ってもらったスイーツは３０個は越している。

「さぁ、ついたよ」

バイキング店についた。そこは、一人１２００円で１時間半食べ放題という店だ。結構人気があるらしく、５分並ぶことになった。

店に入ってまずお金を支払ってから食べ放題の始まり。直人たち３人は入り口のドアから一番遠い奥の席に座った。その席は窓に一番近く、何人かの女性が少し直人を見て２、３度振り向いた。きっと、直人がかの大人気アイドルだと気づいたのだろう。

「さきに取って来なよ」

直人が椅子に座った。椅子といってもソファ式で、直人は横に持たれたかったため奥、つまり窓際に座った。優子と敦子はトレイに皿を乗せて、なにやら肉料理のほうに向かった。

そんなに食べたかったのか……

「ふぅ……」

直人はズボンの後ろポケットから録音機を取り出した。ジーンズだったので少し取りにくかった。

録音機は、遊園地に来る前から録音モードにしている。今までの音をずっと録音していたのだ。さすがにジェットコースターの時は録音機を持っていくことはできなかったが。

直人のマネージャー詩織がこの時期に一日休暇を与えたのにはもう一つ理由がある。
それは、記憶障害が酷くなっていることだった。もしかしたら、敦子と優子のことも忘れてしまうのかもしれない。
忘れるのならいっそその前に、直人を支えてくれたこの二人と思い出を作ろうと、詩織は思ったのだ。彼女は直人にとても優しい。詩織なりの、最高の配慮だ。
「ありがとう、詩織さん……」
直人は、自分でさえもあまり聴こえないぐらいの小さな声で呟いた。
その直後、敦子と優子が戻ってきた。
「はい、直人の分。優子と一緒に取って来たよ」
「ああ、ありがとう……って、スイーツは？」
「たまにはサラダも食べなさい。野菜嫌いは駄目だよぉ」
「僕が嫌いなのは寿司と納豆だ」
直人は言いながらも、敦子からサラダの入った皿を受け取る。
「次は自分で取りに行くよ」
テーブルの端に置かれた箱の中からフォークを取り出し、サラダのてっぺんらしきところのキャベツを刺した。そして素早く口に放り込んだ。
「……ドレッシングは苦手だな」
「ナオ君、好き嫌いが激しいんだよ。それじゃグルメリポーターにはなれないよ？」
「なりたくないよ」

第三十七話　青春の一ページは続く…（前書き）

遊園地回想編、午後にさしかかりましたね。

第三十七話　青春の一ページは続く…

直人はサラダを口にほうばった。
「しかし以外だよねぇ。直人が野菜嫌いだなんて」
「この１５年間で優子からその言葉を聞いたのは３５回目だよ」
「え？私そんなに言ってるの？てかずっと数えてたの？」
「……まあ、そんなとこかな」
実際、最近の日の録音を聞いていたらたまたま分かっただけだ。
「スイーツだけ食べようと考えてたでしょ？」
敦子が直人の顔を覗き込んだ。まさに図星と言った表情である。
「まぁ、いいじゃないか」
直人は早々にサラダを食べ終えた。
「てことで次は自分でとりに言ってくるよ」
携帯と財布を机に置いて……若干スイーツがある方向に向かった。
数分してから直人が戻ってきた頃には、二つの皿の3分の2をスイーツが占めていた。
「3度の飯よりスイーツ、だな」
直人が言いながら少ない量の炒飯を口にほうばっていく。
炒飯の近くにウインナーが3つある。後はスイーツだけだ。
炒飯をたいらげ、次にウインナーをすべて食べると、待ち遠しかったように直人はスイーツにフォークを差し伸べた。
まずは少し小さめのチーズケーキ。直人の口の中に行くのにたったの2口だった。

「ああ、おいしかった！ねえあっちゃん？」
「うん、久しぶりにいっぱい食べたよぉ」
「いっつもいっぱい食べてるじゃん」
「あはははは、そうだったね」

楽しそうに会話する優子と敦子の後ろでずっと直人は微笑んでいた。直人曰く、「スイーツは一ヶ月ぶり」だったらしい。久しぶりに食べたから直人は凄く幸せだった。傍にいた優子と敦子の覚えでは、２０個以上は食べていたが、

「まだ食い足りないなぁ」

直人は呟いた。敦子よりも食いしん坊ではないのだろうか。

「食べた後だから、コーヒーカップに乗らない？」

敦子がアトラクションのコーヒーカップを指差した。直人たちと同じ理由で乗っている家族やカップルが多数だ。

「そうだね、行こう」

直人と優子も賛成し、3人はコーヒーカップに乗った。ただ大きなコーヒーカップに乗るだけのこのアトラクションだけど、カップルには大人気の場所だ。だけど、子供にはあまり受けない。

直人もあまり好きではなかったが、2人が楽しそうだったので良いと思った。

コーヒーカップを乗り終えた後は、近くの回転ブランコに乗ることにした。これは人が多かったため、1人乗るのに6分ほどかかった。

最初に敦子、次に優子、最後に直人の順で回転ブランコに乗った。敦子は少し怖がっていたようだったが、優子ははしゃぎまくりだと言っていいほど叫んでいた。

ちなみに直人は、恐れず、逆に叫ばずに終わるのを待っていた。なぜなら、スイーツの食べすぎで嘔吐しそうになったからだ。

「気持ち悪い……」

回転ブランコから降りてすぐ直人はうずくまっていた。

「あんなに食べるからだよぉ」

敦子が直人の背中をさすった。

「あぁ、大分よくなったかも」

直人は上体を起こした。

「敦子のおかげだよ」

「どういたしまして」
「ねぇ、私は？」
優子が自分を指した。
「君は……何かした？」
「イジワルゥ」
「はいはい。次行こうか」
直人は辺りを見回す。優子はうぅ～と唸りながらも次に乗るアトラクションを探した。敦子も探す。
「あ、これがいいなぁ……クレージー・ヒュー・ストンか」
それは６０メートルのツインタワーを急上昇したり急降下するアトラクションだ。
このアトラクションはすぐ乗ることが出来た。　直人を真ん中に挟んで敦子と優子が席に座る。
「幽霊屋敷の時みたいに腕にしがみ付かないでくれよ。あの時めっちゃ苦しかったんだぜ」
「悪かったね」
優子が皮肉めいた口調で言った。それと同時に、身体が浮いた。直人たちの座る椅子がゆっくり上昇してゆく。次第にタワーの頂上に到達すると、椅子が止まった。三秒間そのままだった。三秒後、椅子は急降下を始めた。何の予告もなく。
「きゃぁぁぁぁ！」
さすがの優子も雄叫びのような悲鳴は出さなかった。
「うお！」
直人も少しびっくりして小さな悲鳴を上げた。その悲鳴はほんの一瞬であったため、左右の少女は気づいていない。
一瞬の急降下は1分あったように感じられた。だけどそのスリルはまだ終わらない。急に椅子が止まったがまた急上昇していった。
急上昇が終わった後はゆっくり降下しただけだった。それで終了ということだ。
「おもしろかったね」

直人が2人に言った。当の2人はセットした髪が少しぐちゃぐちゃになったらしく、手鏡で顔を牛手髪を直していた。
「そんなに髪気になるかい？」
「そういうあなたも今日ワックスかけてるでしょ？」
「まあね」
直人は微笑んだ。

第三十八話　最後の夕陽になっても…（前書き）

遊園地回想編、ラストです。

第三十八話　最後の夕陽になっても…

「そろそろ終わり時だなぁ」
「えぇ～やだぁ」
優子が駄々をこねるように直人の肩を揺すった。
「仕方ないだろ、なぁ敦子」
「まあ、時間は止まってくれないからね」
敦子の言うとおりだ。時間は待ってくれない。
残り少ない命のタイムリミットも止まってはくれない。
「やっぱり思い出の最後を飾るのは……」
直人は言いながら観覧車を指差した。
「分かってるねぇ、ナオ君は」
優子が肘でつついた。優子が言いたいのは、彼がデートの経験から言えるという事だ。
他県……言ってしまうと千葉だが、そこに住んでいる彼女と遊園地に行ったことがある。丁度、今いる遊園地に。
だが、直人はあまりその時の記憶がなかった。記憶障害のせいだ。彼の脳は、次々と幸せの記憶を消滅させていく。
千葉県の彼女は第一印象で言うと、目元が女優の夏帆に似ているということだった。本人はあまり自覚していないようだったが。
「ななは今頃どうしてるんだろうな……」
ナオトは呟いた。
―へぇ、平仮名で『なな』かぁ。
―うん、死んだおばあちゃんが名付け親なの。
微かだけど覚えている片隅の記憶。それはどうでもいいような記憶の一部であり、何よりも大切な心の一部だ。
―ありがとう！
録音した記憶で、彼が一番大切としている記録。たった5文字の記録。それは、ななと会えなくなる……　デビュー当初かその前ぐ

らいに録った。歩いていると直人はななを見つけた。彼女はハイヒールが折れて歩けなさそうだったから肩をかしてやった。その拍子に録音機が録音モードに入り、彼女の言葉が録音された。
偶然生まれた、かけがえのないもの。それが、このときの録音だった。
「結構並んでるみたいだよ」
敦子が指差したのは観覧車の下。三列ぐらい並んでいる。
「気長に待とうじゃないか。さぁ、行こう」
２人の手をとって直人は歩き出した。
列は丁度最後尾で並ぶことができた。係員の話によると、観覧車は３０分待ちだった。
直人は録音機の電源をオフにした。少し休まさないといけない。もし２人と会話を交わして、何か重要な内容になった場合はまた電源をつけなくてはならない。そうしないですむように、直人は音楽を聴くことにした。優子と敦子はガールズトークで直人に話しかける素振りはない。彼が音楽を聴いているせいもある。
３０分なんてあっという間だった。直人は音楽に夢中になりすぎていることもあって３０分経ったことに肩を揺さぶられるまで気づかなかった。
直人がすわり、その正面に敦子と優子が椅子に座ることになった。直人は両耳からイヤホンを取って、再び録音機を再生した。観覧車っていうのはどの漫画でも告白並の重要な話があるはずだ。
「もう中学校生活終わりだね」
敦子が名残惜しそうにいった。
「私は新たな学校生活を踏み出してますけど」
その隣で優子がくｓくすと笑った。
「なぁ、この観覧車が、回り続けて……僕たちが今乗っているこの部屋がてっぺんに到達したのと同時に、写真をとろう」
直人がズボンのふととも部分にあるポケットから何かを取り出した。それはデジタルカメラだった。しかも超小型。

「そんなのずっと持ってたんだ。気がつかなかったなぁ」
優子が言った。しばらくすると、もうすぐてっぺんになるとこまで来た。
「早くこっちに座りなよ」
「そう急かすなよ」
敦子と優子の間、いわば真ん中に直人が座り込んだ。重さで少し傾いた。
「行くよぉ」
後１０秒だろうか、てっぺんに到達するのは……
「はい、チーズ……」
３人がポーズを取りながら直人が右手でシャッターを押す。その時に、夕陽が昇った。
「どれどれ、見てみようじゃないか」
その写真はとても良い出来だった。たいしたブレもなく、何よりバックが良い。夕陽が昇るのは直人の計算になかったが、偶然といえどとても良かった。
「また、これる日があったら行こうよ。３人で、遊園地に」
直人が優子の顔を伺った。優子は微笑んだ。
次に敦子の顔を覗き込む。敦子は小さく頷いた。
「私たちの、約束だよ！」
このとき、２人の少女は直人の病を知らなかった。
直人にとって、これは最後の夏になったのかもしれない。だけど、彼は信じていた。また、この２人と同じように夏を迎えれることを。

第三十九話　一日目練習の最後に

直人は、、一年前の夏のことだけは鮮明に思い出す自信があった。あの日は彼にとって最高の思い出だったからだ。

「……なな」

直人の恋人であるななからメールが届いた。携帯から流れる着信音はＹＵＩの〈ｔｏ　Ｍｏｔｈｅｒ〉だ。

ＹＵＩは直人に絶対的な信頼を置いている。だから、〈桜の花びらたち〉も歌ってくれた。

―その女の子たちのためにも、あなたのためにも、私は歌うよ。

ＹＵＩはそう言って引き受けてくれた。

直人もＹＵＩを信頼している。まるで、家族のように。

「……なな、やっぱり僕は、君が大好きだ」

直人は呟いた。

【最近会ってないなぁ、私すっごく寂しいよ。でも仕方ないよね。アイドルをデビューさせるなんてもう二回目だからへっちゃらだよね！お仕事頑張って！あ、それと、私に電話してきてくれるのはいつかな？女の子を待たせるのはいけないよ？】

それが、ななのメール内容だった。少し長かったが、内容が大事だ。最近直人はななの事をあまり気にしなくなってきた。このままメールのやり取りを終えたら関係は終わるんじゃないかと。自然消滅というう形でもう彼女とは会わないようにしようと。そう思っていた。

だけど、やっぱり僕には無理だ。僕はやっぱり、ななの事が大好きだ。大好きで、仕方がない。

直人はそう気づいた。

直人はすぐに返信した。

【ごめんな。一旦落ち着いたら、会いに行くよ。その時に、僕は君に最高の日をプレゼントする】

少し変かなとも思ったけれども、返信ボタンを押した。
ななの返信がくるのに時間はかからなかった。いや、1分も経っていないかもしれない。
【ほんとにぃ？じゃあ楽しみにしてるよ。出来るだけ早く会いにきてね。ナァオ」
ななのメールを見て、直人はほくそ微笑んだ。これは、返信しなくていいだろうと直人は思った。そこへ、1人の少女が顔を覗かせてきた。
「佐江、敦子が戻ってこなかったのか？」
「イヤホンの調子がなんか悪いんだよねぇ」
そう言いながら佐江はイヤホンを直人に渡しながらメールを見ようとしていた。
「彼女から？」
「君には関係ないさ」
「ねえ、どんな子どんな子？可愛い？」
「恋人がいない君には関係ないさ」
佐江のおでこを人差し指で押した。だが彼女は逆にどんどん近づいてきた。
「ねぇ、いいじゃんか、教えてくれるぐらい」
「分かったから顔近づけるなよ、吐息が熱いから」
そっち？とツッコミながら佐江は直人から離れ、横に座りなおした。
「この子だよ」
直人はななの写真を見せた。
「うわ！すっごく可愛い！なんでこの子をＡＫＢに入れなかったの？」
「彼女には、夢があるんだよ。パティシエになるっていう夢が。今も専門学校に入れるように猛勉強中だ」
「そうなんだぁ」
佐江は写真を見続けていた。

「どんな子なの？」
「凄く優しいよ。それに明るくて、僕に積極的だった。君と比べたら天と地だね」
「うわぁ！ひっど！直人その子にベタ惚れじゃん」
「違うよ、彼女が僕にベタ惚れなんだよ」
「大した自信だね。そんなのどっから湧き上がってくるの？」
佐江は聴いた。それに対して直人は再度微笑んだ。
「そりゃあ当然、僕の心からさ」
直人は携帯の画面部分を閉じた。

第四十話　終了の合図

直人は携帯を閉じた。その瞬間、外側の小さな画面に時刻が表示される。

今は午後４時だった。一日目のレッスンはここらへんで終わりにしとこうと、直人は佐江に言った。

「みんな、聞いてくれ！今日のレッスンはこれで終わりにするから、支度が出来たら適当に帰って言ってくれ」

直人が立ち上がった。

「後、オーディオ返して」

少女達は次々と直人にオーディオを返していくなり、更衣室に向かった。

佐江も立ち上がって更衣室に向かった。

再度、直人はレッスンルームに一人取り残された。いや、少し表現が悪いかもしれないが。

だが、直人はすぐに他人と会話することになった。

レッスンルームに、直人の恩師である秋元康が入ってきた。

「どうだい、調子は？」

「どうも何も、全く僕はおかしくなったみたいです。急がないといけないのにこんな時間でもうレッスンを終了させてしまっている。しかも今日のレッスン内容は中学校に入学したばかりの一年生たちの授業風景みたいでしたよ」

もちろん、その授業は音楽だ。

「きっと、最初の公演には誰もこないさ」

「そうかもしれません。ですけど、僕は絶対に、５人は観客席に座らしてやりますよ」

直人は自信の笑みを浮かべた。

その笑みの意味を悟ったのか、康は問いただした。

「君に自信はあっても、彼女たちには不安しかないぞ？どうやって、

あの観客席を満員にする気なんだ？２５０人は必要だよ？」
「そんなの……後になってみないと思いつきませんよ」
直人はその場に胡坐をかいて座りなおした。
「チッ……」
直人は舌打ちをした。さっき言った自分の台詞に意味などない。
康の言葉に負けたくなかっただけだ。
「また発狂したいのか？君は？」
「黙れよ、おっさん」
「もうしているのか？」
「いや、今の演技です。すいません……」
康の声に圧倒されて、直人は慌てて謝った。
やっぱり、境直人は秋元康には勝てない。
「さて、僕も帰らせていただきます」
「そのまま帰るのか？」
「僕の手荷物はすべてポケットの中に」
ポケットをつまみ上げ、康にジェスチャーした。彼の所有物は、携帯とＩｐｏｄだけだ。デジタルオーディオプレーヤーは秋元康が用意したもので、ここへ来たのもそれを回収しに来たからだ。
「では、失礼いたします」
小さく礼をしてレッスンルームを出て行こうとする。
「待て」
ドアノブに手をかけたところで、直人は歩みをとめた。
「君は、死ぬ前に何をしたい？」
「……」
直人の瞳が一瞬、輝きを失ったかに思えた。
そのとき、脳裏に浮かんだのは、ななとＹＵＩ、敦子と優子、そして……自分をずっと護ってくれていた姉の顔だった。
「……大切な人が、幸せに笑っているところを見れたら、未練はないですかね」
「ついこの間、未練があるから未練はないと言っていなかったかい

？」
「ええ、そうですね」
直人は顔だけを康に向けた。
背を向けていた康も顔だけをこちらに向けた。
「君は、また逃げる気か？」
その康の言葉に対して、直人はふっと笑った。
「逃げない僕には、非常口は必要ありません」
いつものきめ台詞（その一）を言って、レッスンルームを後にした。
廊下に足を踏み入れ、ドアを閉めてから直人はうつむいた。
「人の決め台詞、勝手にアレンジしちまった……」

ドン・キホーテを出ると、近くにＡＫＢのメンバーが何人か歩いていた。
いや、まだメンバーと決まったわけではない。
「あ、ナオティ」
「え？あ、明日香」
変な呼び方をされて直人は少し戸惑った。ナオティと呼んだのは倉持明日香だった。確か、彼女は人に奇妙なニックネームをつける。
「明日はダンスレッスンだから、体を休ませてきてね」
「はぁい、じゃあまた明日。さようなら」
「じゃあね」
明日香はとても温厚な性格だ。直人に対しても敬語でしゃべる。
直人のほうが二歳ほど年下だというのに。
「あ、明日香」
「はい？」
「敬語は使わないでくれるかな？僕のほうが年下だし、これから僕たちは仲良くならないといけない。敬語じゃ仲良くしろなんて言われても無理だろ？」

「……はい、わかったよ」
直人が微笑むと、明日香は微笑み返して駅へ向かっていった。
「優しい人。あんな人ばっかりなの？ＡＫＢは？」
気がつくと、隣に敦子がいた。逆の隣には優子が立っている。
「あなたにはななちゃんがいるでしょ？」
「僕が浮気するっていうのか？」
直人は軽く冗談を口走りながら、駐車場へと向かった。敦子と優子も続く。
駐車場につくと、直人は黒と青のコンセプトカラーが特徴的なバイクのハンドルに触れた。
彼は、中学卒業時にバイクの免許を取った。一人暮らしなのだし、移動手段は必要だ。
彼のバイクはオートバイクなのではない。サーキットに出場してそうな立派なスポーツバイク。
バイクのハンドルに吊るされていたヘルメットをかぶり、直人はバイクに跨った。
「どっちか一人なら、乗せてってあげれるけど？」
「意地悪だなぁ、ナオ君は……大丈夫。私たちは電車で帰るから」
「そうか。じゃあ、また明日な」
直人は軽く指を振ると、バイクのエンジンを唸らせた。
彼はレースに出場したいと少々思っている。なぜなら、バイクの運転の腕前に自信があるからだ。
直人が乗るバイクは、騒音を出しながら、秋葉原の大通りを走っていった。

第四十一話　二日目

二日目。今はぁ……午後の一時を過ぎた頃だ。
二日目はダンスを中心としたレッスンだ。いや、性格に言うとダンスレッスンだけだ。
「たかみな、キレがあっていいねぇ」
「ホントですか！？いやぁ、嬉しいなぁ」
直人に褒められて照れているのか、たかみなは口元を両手で隠すような仕草をとった。
「夏海、腕をもっとこうして」
「えっと、こう？」
直人は一人一人を褒め、アドバイスした。皆が皆、直人のアドバイスに従ってダンスのレッスンをしていた。
ちなみに、直人は人を名字で呼ぶのを嫌う。当人は、「名前で呼んだら親近感が湧く」と言っている。だが、敦子と優子は「名字で呼ぶと周りの人が遠い存在だって思うんだろう」と解釈している。
「とも、もうちょっと大袈裟に動いてみて」
「これでどう？」
「ああ、いいと思うよ」
名前がメンバーと重なっていると、ニックネームや名字で呼ぶ。それは仕方がないことなのだろう。
幼い頃からダンスを経験してきた子もいれば、全く経験のない素人もいる。今の時点で差がついていたとしても、ステージに立つ時には、皆がダンスのプロになっていなければいけない。
そのためには、４８人をデビューさせなければいけない直人自身にも責任がある。
「さぁ、全員で合わせるぞぉ。適当に並んでくれ。さぁ、早く！」
４８人が適当に並んでいく。また背の順なのは気のせいなのだろうか。

「さぁ、かけるよ」
もう馴染みになりつつあるラジカセの再生ボタンを押した。彼女たちが練習していたのは〈桜の花びらたち〉ではない。デビューした時にシングルとして出すつもりの〈スカート、ひらり〉だ。
デビューすると決まったわけではないが、直人には絶対的な自信があった。それは、ＹＵＩをデビューさせることが出来た過去から来ているのかもしれないし、目の前で踊っている少女たちを見てなのかもしれない。だけど、これだけは確実だ。
デビューはまだ程遠い。
今だって、直人が実際に見本として踊っていないと、彼女たちも通して踊れないからだ。
こっちは今日徹夜で様々なダンスを完璧に覚えたのに、スカウトして集めた女の子たちはまだ完璧に出来ないのか――――と直人は思っていた。
今日はジーパンを履いていなくてよかったよ。結構汗かているからな。
「オッケー。休憩してくれ」
体力に自身がある直人はまだ息を切らしていない。
携帯と一緒においてあるスポーツドリンクを手にとった直人はがぶがぶと飲んだ。
５００ｍｌのスポーツドリンクはあっという間に空になった。
「あぁ、そういえば、あれをみんなに言わなきゃな」
直人はＩｐｏｄを取り出した。メモアプリを起動し、三日前の記録を表示する。
「みんな、ちょっと集まってくれ」
直人が召集をかけ、皆が集まってきた。
「これから、君たちを三つのチームに分ける」
並んだ少女たちを見て直人が言った。
「チームＡ、チームＫ、チームＢ。それが、三つのチーム名だ。あの舞台で毎日４８人が歌うのは無理がある。だから、チームに分け

て、日によってチーム公演を行えるようにしたい。そのために、チーム分けをしてみた。別に、違うチームだからって…そんな会えなくなるわけじゃないからね」
直人はメモを見た。
「まず、チームAから発表するよ。チームAのキャプテンに、高橋みなみ」
「え？」
いかにもたかみなの頭上にクエスチョンマークが浮かびあがりそうな表情だった。
だが直人は、たかみなに説明せず説明を続けた。
「……前田敦子、前田亜美、前原夏海。以上16名がチームAだ。チームAはあっちに集まってくれ」
直人が指差したのは部屋の東方向の端だった。
移動する敦子や麻里子たちを見て、直人はチームKの説明を始めた。
「キャプテンに秋元才加。メンバーは彼女を含め、板野友美、内田眞由美……横山由依、米沢留美の16名だよ。チームKはこっちに集まって」
指差すのは東の反対、西側だ。
「チームBキャプテンは柏木由紀だよ。で、石田晴香……宮崎美穂、渡辺麻友の16名だ。君たちは、もうそこで集まってくれ」
少し面倒くさくなってしまった直人は、もう考えるのが嫌になってきた。
「後、AKBの総合キャプテンに、高橋みなみを推薦する」
「え？」
その時の声は、たかみな一人だけではなかった。

第四十二話　キャプテン

直人を一度たかみなの表情を伺った。彼女は困惑したような顔をしていた。
「今から、メンバー内で色々自分をアピールしてみてくれ。昨日の自己紹介で皆話したと思うけど、話しきれていない所もあると思うし、何より同じチームだ。同じチームの子の事を良くしらなきゃいけない。てことで、さっそく始めてくれ」
指で音を鳴らした。少しカッコつけたかっただけだ。
ざわざわと声が聞こえてきた。直人はそれを確認してその場に座り込んで胡坐をかいた。携帯の画面を見下ろす。
「あの、直人……さん？」
「さんはいらないよ」
「えっと、直人……どうして私がキャプテンなんですか？」
直人はその台詞ですぐに誰か分かった。いや、声で分かっていたかもしれない。
たかみなだ。彼女のポニーテールは一目見ただけで凄く印象に残る。
「私、そんなキャプテンなんて務まらないですよ？」
「それは、君がそう言っているだけだよ」
携帯を閉じ、床に置いた。
「初めて君に会った時から、僕は君をＡＫＢのキャプテンにしようと思っていたんだ。それは、君に統率力を感じたからだ」
「統率力って……？」
「いや、僕でも良くわかんないかな……ただ、ただ単に君をキャプテンにしたかった。それだけなのかもしれない」
直人はたかみなを見た。その途端、たかみなの目が少し見開いた。
「コンタクトしてるんですか？」
「え？良く分かったね。このコンタクト結構わかんないんだぜ？」

「いや、左目のコンタクトがずれかかってます」
「嘘！」
直人は咄嗟に左目を隠した。たかみなは少し驚いて体勢を崩しかけた。
「ちょっと、直してくるよ」
直人は立ち上がると、そそくさとレッスンルームを出て行った。

「あぶねぇ……危うく眼の色がばれるとこだった……」
男子トイレの洗面台。直人は左目のコンタクトをとった。
鏡で自分の眼を見る。右目は茶色に近い色をしている。それはコンタクトをつけた状態の瞳だ。
左目は、深海のようなブルーの色を宿していた。
「しっかし、母さんの遺言もわけがわからないな……瞳の色を誰にも見せるなって、そんなに自分の瞳の色が嫌いかよ」
直人はふっと微笑んだ。
実は、彼は日本人とフランス人のハーフである。彼の母が生粋のフランス人であり、姉は日本人の血を多く受けついたが、弟の直人はフランス人の血を多く受け継いだ。簡単に説明すると、直人は母に似ているということだ。瞳の色も、フランス人の血からきたものだ。小学生の頃は全く瞳の色を隠そうとはしなかったが、姉が日本人らしいということで全く似ていないと言われた。
だからと言って、他の所がフランス人に似ているというわけではない。というか、そんなに違いはあるのだろうか？フランス人は金髪が多いが、彼は黒髪だ。
ちなみに、小学校の頃から友人関係にあった敦子と優子は彼がハーフだと知っている。
「たくよ……」
昔はその遺言に従っていなかった。なぜなら、コンタクトが苦手だったからだ。遺言には従おうと思ったけど、その頃はまだ小1だ

ったし、眼に何かを入れるのはあまり得意じゃなかった。
小5になってようやくコンタクトがつけれるようになり、今はこの状態だ。
ちなみに彼は病気が悪化してきて視力は悪い。今だって眼鏡をかけないと読書できない状態だ。
「僕はそのうち補聴器もつけなきゃいけないのかな？」
そう言いながら直人はコンタクトを左目につけた。
あまり日本では売っている所が少ないカラーコンタクト。直人はこのカラーコンタクトをマネージャーの詩織からもらった。
詩織と直人が出会ったのは小学五年生の初期だ。彼女のななの遠い親戚にあたる詩織は、ある俳優のマネージャーをやめたばかりだった。その頃に、直人がアイドルになることを決意して詩織をマネージャーに推薦した。
「そろそろレッスンルームに戻らないとな」
直人は男子トイレをでた。
「ゲームはまだまだこれからだ。優子たちに頑張ってもらわないと、こっちも給料がさがるんでね」
直人は一人呟いた。
「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」
「駄目ですか、康さん？」
一歩足を前にだす。彼の後ろには康がいる。
「知ってますか？フランス人って、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」
「何が言いたいんだ？」
「あなたが彼女たちにデマを言ったんじゃないかと思っただけですよ」
直人は後ろの長い髪を揺らした。

第四十三話　嘘

直人がトイレに向かった頃、３つのチームに分かれた少女たちは自分をアピールしていた。
「えぇっと……私がキャプテンの高橋みなみです。あぁ、たかみなって呼んでください」
たかみなは身を縮めながらも小さく右手を挙げた。
「別に、私、大して言うこともありません。まぁ、えっと、歌は得意なほうだと思います」
たかみなは言う事が思いつかなかった。それは他のみんなも一緒だった。
たかみなはチームＡのキャプテン、そしてＡＫＢのキャプテンだ。今、チームＡで円形に並んでいる。
「私もしかして最年長かな？」
声をだしたのは麻里子だった。
「あ、歳は？」
「二十？」
「わぁ、きっと最年長だよぉ！」
倉持明日香が両手を合わせた。眼を輝かせている。
「やっぱ年上の人は大人っぽくて綺麗だなぁ」
それが明日香の本心らしい。
「ありがと。私ね、ファッションに興味があってね、そのうち自分のファッションも見つけ出したいなぁって思ってるの」
「わぁ、すごぉい！」
明日香の目がもっと輝いて見えた。
これが引き金となり、チームＡは盛り上がりを見せてきた。
次に、チームＫ。
「わぁ、才加って腹筋割れてるの！？」
「嘘！私も見せて……うわ！男みたい！」

「それは言わないで！」
とっくに盛り上がっている。
チームBも同様だった。こっちは若い世代の女の子が集まっていて、アニメなどの話があがっていた。
それぞれのチームが盛り上がりを見せてきた頃だった。
レッスンルームに一人の男が入ってきた。秋元康だ。彼が入ってきた途端、部屋の雰囲気が一瞬にして変わった。秋元康から放たれるのはとてつもない威圧感だった。
「やぁ君たち。話があります、座ったままでいいから聞いてくれませんかね」
康はドアを閉めてそこから動こうとしなかった。そこから用件を言うらしい。
「直人君がいないから言わせてもらいます。彼はたぶんですが、あなたたちを不作だと思っているでしょう」
「え？」
小さく声を上げたのは敦子だった。優子も声を上げそうになったが堪えた。
この2人は境直人という人物にもっとも近しい2人だ。驚くのも無理はなかった。
「きっと公演を始めてもデビューの日はこない……彼はそう思っているかもしれません。諦めているかもしれません。皆さんに失望しているのです。君たちが努力すれば、彼の想いは変わるかもしれません。私の言いたかったことはこれだけです。みなさん頑張ってください」
康は部屋を出て行った。
その言葉を信じた人と、信じていない人、さらには迷う人に分かれた。康の言葉を聴いてショックを受けている子が大半だった。敦子と優子は当然康の言ったことを信じていない。
もちろん、秋元康の言葉はすべてが嘘であり、でっち上げだ。
直人はこの事態を予測していた。彼がデマを流すのではないかと。

だが、このレッスン時に言うことは確率が低いだろうと思っていた。それは、康の性格を考えての性格だ。だが、計算は少し間違っていたようだ。康は、最初からこうしようと思っていたらしい。
レッスンルームから出て行った靖は少し口元を吊り上げていた。
「どこまで行けるかな……」
その言葉をレッスンルームのドアに残して彼は歩いていく。
少し歩いてトイレの前を通り過ぎた。その時、物音がして歩みをとめた。数秒の後、直人が男子トイレからでてきた。
「…優子たちに頑張ってもらわないと、こっちも給料がさがるんでね」
直人が康に視線を向けることなく独り言を呟いた。決して気づいていないわけではないだろう。
「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」
「駄目ですか、康さん？」
康に直人の給料を下げた覚えはない。いや、今から下げるかもしれない。何せ、嘘のことを愚痴で言っていたのだから。
「知ってますか？フランス人って、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」
「何が言いたいんだ？」
さっき自身が言ったデマのことを知っているのだろうか？だったら凄い情報網だ。
「あなたが彼女たちにデマを言ったんじゃないかと思っただけですよ」
直人が顔を揺らした。その拍子に後ろの長い髪も揺れた。
「僕がデマを言ったかどうかは君が決めることだよ」
「また、わけがわかんないことを……」
直人は康と目線を合わそうとはしない。
「あなたが何をしようが、僕はいつだってあなたの逆手をとる。そうして僕はあなたに勝ってきたんですよ。音楽にも、人生にも」
顔が見えなくても、康には直人の余裕の笑みが思い浮かんだ。

「まあ、否定はしないよ」
康も笑みを浮べた。きっとその笑みは、康の顔を見ていない直人にも分かったことだろう。

第四十四話　舞台《ステージ》（前書き）

なるべく現実と同じ事を言っているようにしていますが、最近どうもオリジナリティが増えてきます。

第四十四話　舞台《ステージ》

直人はレッスンルームに戻る前に、彼女たちの公演場所となる舞台へ向かった。

ドン・キホーテの８階、ＡＫＢ４８劇場という看板をつけようと数人の作業員が看板を運んでいる。

「どう？調子は？」

直人は近くの若い作業員に声をかけた。彼は直人と同い年であり、父の手伝いをしに今日ここへやってきた。

「おう！君が境直人君！生で見るの初めてだな！」

「そうだろうね。作業は順調なの？」

「ああ、ばっちりさ。なんなら中を見ていくといいよ」

「ありがとう」

若い作業員に軽く手を振って直人は歩き出した。

ドン・キホーテの８階を選んだのにはいくつかの理由がる。まず第一に、８階の天井には証明をはじめとして多くの機材を吊り下げる必要があったからだ。そのためにはある程度の天井の高さが求められたのだ。他にいくつかの候補もあったが、天井高に難があり、最終的にここを選んだのだ。

あともう一つ、直人が直感的にここが良いと言ったからだ。秋元康も否定はしなかった。それどころか、「さすがだよ、直人君」と褒めてくれた。

劇場に入る。三ヶ月前から全面的に進めたから大分劇場構成が見えてきた。

劇場の座席構成は、定員２５０名と決めていた。いす席は１７０席。椅子は６人がけの長椅子で、残りの８０席は立見となる。それは直人が実際にもう作り上げている。

ＡＫＢのコンセプトを『会いに行けるアイドル』と決めた直人は、それを理由にステージと客席を非常に接近させる提案をした。その

提案は採用された。
「みんな、今から休憩をとりなよ！」
直人がみんなに声をかけた。
「おぉ、ありがたい！」という声が漏れた後に、みんなは作業を中断して劇場ロビーにでた。それに続いて直人も劇場をでた。劇場ロビーに通じる通路の壁に、メンバーの写真を貼ろうとも思っている。
「境君？」
「え？」
劇場ロビーで直人に話しかけてきたのは、三十代前半ぐらいに見える女性だった。
「あ、まゆみさん。こんにちは。わざわざ来てくれて有難うございます」
「いやぁ、なんの」
直人は女性と握手をする。その相手は夏まゆみと言って、ＡＫＢのダンスレッスンを担当してくれる人だ。
「明日から頼みますので、宜しくお願いしますね」
「ド素人だろうとなんだろうと、絶対にプロにするわ」
夏まゆみは自信満々だった。過去に何人ものアイドルを担当したか直人には分からなかったが、凄い人だということはわかった。

気がつくと、もう午後の四時だったため、直人は早々にレッスンルームに戻った。
案の定、みんなが暇そうにしていた。
「あ、えっと、ごめんね。今日のレッスンはここまで。明日から本格的になるからね。はい、解散してね！」
直人は少し面倒くさくなってしまったためか、早口で説明した。
ぞろぞろとレッスンルームから人が減っていった。
直人はリラックスして適当に座り込んだ。
正直、疲れた。

「あぁ、まゆみさんのおかげで少しは楽かな？明日はライブ活動もあるし。あぁ、久しぶりだから歌えるかなぁ？」
直人はそのまま横になった。そのまま眼を瞑る。
疲れが溜まっていたのか、そのまま寝てしまいそうだった。
いっそ寝てしまおうか。
「はぁ……」
「どうしてそんなに溜息ついてはりますんか？」
眼を開けると、天井のライトを遮るように由依の顔が映った。
「あ、まだ帰っていなかったんだね」
「あ、少しナオと話がしたいかなぁって……」
「そっか」
直人は上体を起こした。由依は先ほどまでレッスンしていた格好とは違うが、ラフな格好という点は変わらなかった。
「そういえば、今日は日曜だったっけ？京都に戻らなきゃいけないのか」
「はい」
由依は休日にしか東京に来ることができない。学校もあるし、上京するのはまだまだ先だろう。
「友達は、このこと知ってるの？」
「はい。応援してるって言ってくれてました」
「そっか……」
あまり同世代の女の子から敬語で話されるのは好きではない。一応学校的に言えば一つ学年は上だが。直人が中3の頃は、後輩に敬語を使わないでくれと頼んでいたほどだ。もちろん、「先輩」をつけるのも嫌だと言っていた。
だけど、敬語は使わないでくれと言っても仕方ないだろうと直人は分かっていた。
あまり会話を交わしたことがないけれど、直人には分かる気がした。
「随分遠くから来てるよね。梨乃は大分から上京してきたよ」

「そうなんですか。私も早く決めちゃわないと」
「そうだね」
会話の内容があまり思いつかなかった。
直人はなんとか言葉を繋ぎ合わせて文章にしようとする。
「じゃあ、平日は自主練習でもしておいてもらおうかな」
「あ、はい。そうするつもりです」
「じゃあ、ちょっと待って」
直人はレッスンルームを出て行った。数分後、紙とボールペンを持って戻ってきた。由依の横に腰を下ろす。
「じゃあ、まずは発声練習だよね」
紙の上らへんに『1・発声練習』と書き込んだ。
「次に、ダンスだね。振り付けはまだ覚えていないだろうから、次の一週間分を教えなきゃならない。今、君たちにダンスを教える夏まゆみさんにこれをもらってきた」
直人が別の紙を広げた。それは、ダンスの振り付けの説明書だ。
「色んなダンスがある。レッスン用のもあれば、君たちが歌うことになる歌のダンスの振り付けもある。当分はこれを練習していてくれ」
『1・発声練習』の下に『2・振り付け練習』を書き加える。
「まあ、こんなもんなんだよね……後、YUIの〈桜の花びらたち〉も聴かせておいたほうがいいんだよな」
直人はそう言いながら服のポケットを探った。薄いチェック柄の上着の右ポケットを探る。すると、錠剤の入ったビンが落ちた。
「あ、落ちましたよ」
由依がビンを拾った。
「風邪薬ですか？」
「まあ、そんなところだよ」
直人はそう言いながら左手でビンを受け取り、右手で取りたかったものをとった。それは銀色のMDウォークマンである。彼は音楽再生機を一つ持ってるに飽き足らず、いくつも持ち歩いている。一

番良く使うのはＩｐｏｄだ。
「これを君に貸すよ」
小さなヘッドホンと一緒にＭＤウォークマンを渡す。
「これに、ＹＵＩが歌ってくれた曲とメドレーが入ってる。アルバムの一番上のフォルダがそうだから」
そのＭＤウォークマンには容量ギリギリまで音楽が入っている。ほとんどが直人の友人である。同じアーティストとして直人は親しく接している。
「充電器がいるよね……バイクの椅子の中に入ってるから、帰るときに取りに行こう」
「はい」
直人は左手で錠剤のビンをポケットに押し込んだ。
「そろそろ帰ったほうがいいんじゃないのか？何で帰るんだ？」
「夜行バスか新幹線です」
「じゃあ、今日は新幹線にしなよ。電車賃は僕が奢るからさ」
「え？いいんですか？」
「大丈夫だよ。実は最近、お金を使いたくてしょうがないんだよ」
直人は笑みを浮べながら立ち上がった。由依も立ち上がる。
駐車場につくと、直人はまず椅子を開けた。中からヘッドホンを取り出して由依に渡した後、黒のヘルメットと自分用のヘルメットを取り出した。
「これをかぶって。君の鞄はここにいれるから」
「はい」
由依は言われたとおりにした。直人が椅子に座りながらヘルメットをかぶった。後ろに由依が乗る。
「飛ばすから。しっかり掴まっててね」
由依は軽く直人の腰に両腕を回す。直人はハンドルを回した。バイクを走らせる。
「きゃっ！」
予想よりも大分早かったらしく由依の両腕が少しきつくなった。

直人はそれを強く感じた。
（女の子の匂いって独特だよな…）
直人は暢気にそう思いながらも、第三者から見れば暴走している風に見えるぐらいの速さでバイクを走らせている。
由依は少し困惑していた。彼女から見た直人の印象は、「優しい人」だった。だけど、今の状況は明らかにギャップがあった。
駅から送り届けた直人は、由依に鞄を渡し、ヘルメットを受け取った。
「ほら、電車賃」
直人が財布を取り出す。
「本当にいいんですか？」
「いいて。一応、僕のほうが先輩なんだからさ、ちゃんと言うこと言わないと」
「……ずるいですね」
「よく言われるよ」
直人は微笑んだ。由依はそれを見て溜息をついて手を差し伸べた。
直人は電車賃をその手の上に乗せた。
「じゃあ……一週間後？」
「はい。そうなりますね」
由依は歩き出した。少し歩いてから振り向きざまに手を振ってくれた。直人は手を振ることで対応した。
少し可愛いと思って、直人は照れ隠しにひたすら微笑んでいた。

第四十五話　レッスンスタジオ（前書き）

これからどんどん時間がスキップしていくので、そこは分かっておいてください。

第四十五話　レッスンスタジオ

三日目。直人は久しぶりに、野外ライブを行っていた。観客は総勢約２０００人。女、男、子供に老人まで、まさに老若男女と言うべき風景だ。

「今日は久しぶりのライブで、少し歌が下手かもしれない。でも、最後まで付き合ってくれよ！」

直人はマイクに向かって叫んだ。彼はギターを持っている。その周りには、ドラムとベース、ギタリストが立っている。

「よろしくな」

バンドの仲間に直人は小さく言った。みんな快く手でグッドマークを作った。

「よし、行くよみんなぁ！」

直人はまず最初に持ち歌である〈心の欠片〉を歌い始めた。

「♪あのとぉきのきぃみと～♪もし、てをつぅなげぇぇたら～♪」

会場は瞬く間に歓声に包まれた。

直人は半年ぶりにその光景を見た。自分がアイドルグループを作ると宣言した時は、会場に盛大が湧いた。効果音などではない。本当のどよめきだった。

今はそのどよめきはない。何せ、発表することがないからだ。

久しぶりのライブだ。思う存分歌わせてもらう。

「今日はサービスするよ！」

直人は少し調子に乗りながらも歌い続けた。当初は2時間の予定だったが、直人はサービスしまくるので、ライブは3時間した。彼のファンは歓声を増していった。

ライブが終わるなり、直人はライブ会場の待合室にあるシャワーで汗を流していた。

「あぁ、気持ちいぃ。シャワーも命の洗濯だよなぁ」

頭のシャンプーを洗い流してシャワーを止めた。

直人の髪は艶やかで、鮮やかだった。止めていないため、髪は背中の全体にへばりついている。
直人は前髪を上げた。深海が広がっているような鮮やかなブルーの瞳が、目の前の鏡に映る自分を見た。
「これが僕の顔なんだな……フランス人なのか、日本人なのか、どっちなんだろうな」
直人はシャワールームを出た。髪を乾かすのに苦労するため、直人はまず後ろ髪をくくって、頭に巻きつける。さして軽く髪を拭いてから身体を拭く。それを終えてから髪を乾かすのだ。
それから30分経ってようやく髪を乾かすことができた。待合室で椅子に座った直人は携帯をいじり始めた。そこへ、花蓮とは別のマネージャー詩織が現れた。
「直人君、午後の授業だけでも言ってきなさい」
「詩織さんはいつから僕のお母さんになったんですか？」
「保護者よ。さぁ、早く行ってきなさい」

もちろん直人は敦子と同じ高校だ。だがほとんど通っていない為、出席日数が足りなくて危うい。
詩織はそれを心配して学校に行かせるのだ。
今、高校は午前の授業を終え、午後の授業に差し掛かっていた。たった今、午後の授業を告げるチャイムが鳴った。
「席につけぇ」
敦子のクラスは今から数学だ。号令がかかってみんなは席に座る。
敦子は窓際の席に座っていた。一年生の教室は学校の正門を見渡せる位置にあるため、直人が来るとすぐに分かるのだ。
だから、直人が来た時は皆が窓に押し寄せた。
「おいおい！バイクの音だぞ！」
男子生徒の一人がいた。確かに、うるさいぐらいの騒音が学校に響いてきた。みんなは窓におしかかるように近づいた。

しばらくして黒と青のバイクが門を通って入ってきた。軽くカーブしてバイクが止まった。運転手はエンジンを止めた後、ヘルメットを取った。そこから現れたのは、全校生徒の人気の的である境直人だ。

「直人、遅かったなぁ！」

別の教室から先輩の男子生徒が声をかけた。

「久しぶりのライブだったんですよ！」

大きめの声で直人が答えた。

彼はバイクを自転車置き場に置いた。他に置き場所がないからだ。直人が着る制服は大分乱れていて、ネクタイは完全に緩んでいた。

「境、早く来い！」

数学の教師が声をかけた。

「はぁい！」

数分も経たないうちに直人は教室についた。彼は教材をすべて学校においてある。小さな鞄を持ちながら直人は教室に入るなりみんなに「おっす」と挨拶した。

「何を暢気にしとるんだお前は」

直人は誰よりもマイペースで、掴みどころのない人物だ。姉を失って発狂してから、彼は情緒不安定と言われてきたが、直人はそれをネタにして場を盛り上がらせたことがある。直人に弱点はないと誰もが思っていた。

「あ、数学めんどいんで保健室行きまぁす」

「そうはさせるか」

数学の教師は直人を無理やり席に座らせた。

「はぁ……勉強だるかったぁ……」

「2学期始まってばかりだよぉ。これから勉強ばかりが続くなんだからねぇ」

机に突っ伏した直人に敦子が話しかけた。その隣には、同じＡＫ

Bのメンバーである仲川遥香がいる。彼女は偶然同じ高校だった。
「いくらIQ210でも、出席日数が足りないと……」
「仕事があるんだから仕方ないだろ。仕事のために頭の良い奴が通う学校も諦めたんだぜ？出席日数について一番甘い学校がここだたんだよ」
「私と一緒の学校が良いっていう理由じゃないの？」
敦子が自分を指差した。
「どうだろうね……さぁ、部活行くか」
「あなたって部活入ってた？」
「入ってるわけねえだろ。レンタル部員だよ」
直人は席を立った。
「君たちは今から厳しいダンスレッスンだぜ」
そう言った時の直人は真面目な表情をしていた。

「私はあなたたちの公演を絶対に成功させなきゃいけない。そのために私は甘くしない。容赦しないからね」
レッスンルームとはまた別の部屋。直人は区別するためレッスンスタジオと呼んでいる。
そこに、敦子たちが集まっていた。由依など、東京から遠い所に居るためレッスンに来られない者もいるため少し人数は少ない。今レッスンスタジオにいる少女たちを見て、夏まゆみは厳しい一言を言った。
「今のあんたたちじゃ、一生デビューなんてできないよ」
まゆみは少女たちを見回した。
「とりあえず、適当に踊ってみな。まず、そこの……高橋みなみから」
「え？私ですか？」
たかみなは少し戸惑ったが、頷いて少し前に出た。小さな声で歌を歌いながら踊りはじめた。

「はい、全然駄目。そんなのダンスでもなんでもない。ただ暴れてるだけだよ」
まゆみはさらに言葉を飛ばす。
「どうせ全員これごときなんだな。お前たちのダンスなんか、誰も振り向かないよ」
まゆみは場の雰囲気を暗くしていく。だが、これがまゆみの作戦というべき事だった。
これで、彼女たちが本気になってくれれば……

第四十六話　少女が輝くと渋谷も輝く（前書き）

今回は回想です。

第四十六話　少女が輝くと渋谷も輝く

秋葉原と同じ東京に位置する渋谷。その街はギャルが多く歩いていた。

境直人は、雑誌の取材を終えたばかりだった。詩織と花蓮の2人のマネージャーが、たまには仕事をした方が良いということで、スカウトの直前に取材を入れたのだ。

ここに来るのは久しぶりかも……と直人は思った。ありえないことではない。

直人が渋谷に行く理由は一つだけだ。服を買いにきた。それ以外には仕事でしかこない。

今日もスカウトの予定はあった。相手は板野友美だ。だが、先ほど彼女の家に電話したら、渋谷に出掛けていると彼女の母に言われた。

だから、直人は今ここにいる。

今、友美を探している直人は、最近ファッションのコーデを変えようと思っている。

そろそろ夏に差し掛かるため、ラフな格好にしようと思っている。

今の直人の服装は、シャツの上に黒のベストを着ている。ズボンは色が濃いめのジーンズ。

そして仕上げに黒のハットをかぶる。

渋谷を普通に歩いてても、自分が境直人とはばれない。それはそれでガッカリなのだが、都合が良いのは確かだ。

直人は近くに洋服店を見つけ、そこに入った。

男性服が並ぶ棚に向かう。

「やっぱ、黒シャツはこれがいいかなぁ」

この頃の直人はいまいちファッションセンスに自信がない。以前服を買いに行った時は、優子を連れて行ったものだ。

「あぁ、これサイズが会わないな」

直人は黒シャツを商品棚に戻した。
その際に、直人は商品棚の反対側にいる女性の姿をとらえた。
「あ……」
「え？」
直人がいる商品棚の反対は丁度女性服が並んでいる。その商品棚は丁度直人の肩の高さで、女性の顔がはっきりと見えた。
「境……直人？」
女性が呟いた。いや、まだ少女だろう。
「や、やあ」
直人が、今探していた少女だ。
「友美ちゃん、だよね？」
直人がなんなく聞いた。友美は頷く。
「友美、ＡＫＢに入ってくれないか？」
「とも……受かった？」
「ああ、受かったさ」
直人は微笑んだ。
友美も微笑んだ。
「じゃあ、私、もう一流のアイドル？」
「いや、それはどうだろう……」
正論だ。
「で？直人は服を買いに来たの？ともを探しに来たの？」
「両方さ」
友美が自分をいきなり呼び捨てで呼んだのには黙っておこう。
直人は友美に今していたことを話した。
「夏のコーデを考えてたのさ。でも、ファッションにいまいち自信がなくて」
「じゃあ、私がコーデしてあげる」
友美が直人の隣まで来た。
「黒シャツがいいかなって、思ったんだけど……」
「じゃあ、ジーンズで……ほらほら、試着試着！」

「え？ちょっ！」
直人は友美に背中を押された。

それから2時間は経っただろうか。
直人の両手は幾つもの袋を握っていた。もちろん、友美が選んでくれた服だが、それは一つだけだ。九割を友美の買った服が占めている。
「次は…こっちかな？」
「まだ行くのかよ？」
直人は溜息をついた。彼はたまに、口調を変えることがあった。いつもの時より比べて、口調が偉そうになるときがあるのだ。学生の時はいつも偉そうなほうの口調になる。
「今日は私の彼氏ってことで……」
「なんでそうなるんだよ？」
「彼氏は恋人の荷物を持たなければいけないのよ」
「そんな規則だったっけ……？」
直人の経験では、そんなことをするのは規則ではなかったはずだ。だけど、今の友美に言っても聴いてはもらえないだろう。
今日だけは、友美の言う事に聴こうと直人は思った。
直人は友美を見た。
彼女が輝いているように見えた。

第四十七話　不安（前書き）

出会い・レッスン編完結です。

第四十七話　不安

「君たちの初めての公演日が決まった。今から一ヵ月後の１２月８日だ。グランドオープンという形になる。もう振り付けは完璧だと思う。今日はレコーディングをしてもらった。公演では君たいは踊るだけでいい」

直人は皆を見渡した。ここはレッスンスタジオ。部屋にはメンバー全員と夏まゆみがいる。グランドオープンまで後一ヶ月ということを彼は伝えにきたのだ。

「明日からは、練習場所を劇場スタジオに移す。まゆみさんの指導に皆良く耐えられてきたと思ってる。今日はそれだけだ。解散してくれ」

直人はそれだけ言うとレッスンスタジオを出た。解散とは言ったが、彼女たちは夢を追いかけている。きっと練習を再開しているだろう。

「はぁ……観客は何人いるんだろうな」

きっと、初の公演の観客席には関係者も座るはずだ。たぶん、数十人ほど。

直人は劇場へ向かった。劇場は一応完成している。後は照明などの機具をとりつけるだけだ。

スタジオに入ると、一人の女性スタッフがすりを磨いていた。

「サクラさん」

「あ、直人君？どう、皆は」

「ボチボチってとこかな」

スタッフのサクラは現場のチーフだ。任命したのは直人自身である。

「良いことを教えてあげよっか？」

直人はサクラの雑巾をそっと取ると、せり一枚をゆっくり丁寧に拭いていった。

「直線で雑巾かけるとね、すりの隙間に埃が落ちるんだよね」
「へぇ、そうなんですか」
「親もいなくて、育ててくれる人もいなかったから、姉さんは必死に金を稼いでくれた。出来るだけ僕は姉さんの役に立ちたくて、最初は家の掃除をしてたんだ。それで、家に床がすりの部分があってね。埃が隙間に落ちていくのがわかったんだ。それでこの方法が分かったんだよ」
　直人は埃を綺麗にふき取って、水の入ったバケツに雑巾を入れた。
「それと、パネルもちゃんと磨かないといけない。もし公演が、照明を暗くして行うのであれば、パネルを使って公演者を輝かせなければいけない」
　直人はパネルを指差した。
「サクラさん、僕が言えるのはたった一つだけだ」
「なんですか？」
「皆は、スタッフはただの影だって言うかもしれない。輝くのはステージに立つ者……つまり僕のようなアイドルで、サクラさんのようなスタッフはどれだけステージを磨こうが輝くことはできない。問題は僕たちが輝くかどうかということ……実際に誰か言っていた気がする……だけど、僕はそうは思わない。僕だって、アイドルとしてステージで立ってきた。だけど、アイドルは自分だけで輝いてるんじゃない。誰かに照らされて輝いてるんだって思うよ」
　直人はサクラの手を握った。
「彼女たちを、照らしてくれ」
「……わかってるよ、そんなこと」
　サクラは微笑んだ。

　その日の夜。直人の家には、敦子と優子が泊まりに来ていた。別に直人は変な気を起こすことはない。昔から泊まりに来ていたし、軽い気持ちだった。その代わり、その時の家事洗濯はすべて直人が

することになったが。
「だから、ここはこう歌うんだよ……」
「うんうん」
当然、直人は振り付けと歌の練習を2人に施していた。2人は嫌がる事もなかった。
「後一ヶ月で君たちは全く知らない人たちの前で踊ることになるんだから、覚悟しとけよ」
「直人は、初めてステージにたった時、どうだった？」
「そりゃあ、緊張したさ。花蓮さんや詩織さんが裏で何をしたか知らないけど、小さな劇場に人がいっぱい集まってた。その時は、同級生とバンドを組んで……学生ライブに出場しただけだった。だけど、それがきっかけで、僕は康さんのおかげでアイドルになったんだよ」
そうだ。あの時のライブですべてが変わった。あの場所に秋元康がいなかったら…今直人は孤独に苛まれ続けていただろう。だが、彼は今こうして、ふたりの少女と時を過ごしている。
「君たちがいてくれたおかげで、今の僕は平常心を保てるのかもしれないな」
「平常心を保ててるのはその薬のおかげでしょ」
優子が、今直人が飲もうとしている錠剤を指差した。
「どうだろうね」
直人は錠剤を一つ飲み干した。
「発狂したら私たちが困るんだよ？平常心を保つためにはその薬を飲むしか方法はない。飲まなければあなたは狂いだしてしまう。そうでしょ？」
「ああ、その通りだ。あの薬は僕の病気の悪化を防ぐものじゃない。僕の発狂を防ぐものだ。病はもう止めることができない。だから、やりたいことを今やりつくしたいんだよ」
「じゃあ童貞は卒業しなきゃね」
優子は言った。

「その話はタブーだぞ」
直人は軽くツッコミを入れておいた。

第四十七話　不安（後書き）

次話からは『デビュー編』に移ります。
第四十八話は直人の初ライブを描いた回想編です。

第四十八話　初ライブ（前書き）

今回は予告したとおり、直人の初ライブの日の出来事です。

第四十八話　初ライブ

中学一年生の６月初期。東京の片隅。
境直人は、バンドを組んで、歌を歌おうと決めてすぐに実行に移した。
高校生の軽音部など、様々なバンドグループがライブを披露する小さな劇場に、眼鏡モードの直人は居た。
「みんな、ありがとう。僕のわがままで、ここまで付き合ってくれて」
「いいてことよ」
「そうだよぉ。私たちはチームなんだし、ね？」
彼とバンドを組んでくれたのは、皆幼少期から音楽の道を目指していた者たちばかりだった。ボーカル兼ギターを担当する直人は、ギターを磨いていた。他に、ベースが一人、ドラムが一人の、３人のチームだ。
「大丈夫？」
「大丈夫ですよ、詩織さん」
直人はギターをテーブルに置いた。
ここは、用意された待合室だ。その部屋には、直人をはじめ、優子、敦子、詩織、花蓮、ベースの健崎当麻とドラムの鮎川陽菜がいる。
「手が震えてるよ、ナオ君」
優子が直人の手をそっと握ってくれた。
「ごめん、人前で歌うのは……初めてだからさ」
直人の心にあるのは、緊張ではなく不安だった。観客席に誰もいなかったら、どうしよう。それでも僕は歌うのだろうか？
直人は優子の手を握り返した。
「あぁ……どうしよう」
「ななちゃんに電話したらどうなの？」

「もうしたよ」
行動だけは早い直人だった。彼は考えるよりもまず実行に移すタイプだ。小ライブもその調子で歌ってくれるととても有難いと、全員が想っていた。
「すいめせぇん、次宜しくお願いしまぁす！」
ライブを仕切っている女性が待合室に入ってきた。だが、一言言うとすぐに出て行った。
「……優子、いつものおまじないをやってくれ」
「……わかった」
優子は直人の両手を、自分の両手で包み込んだ。
「――あなたは、絶対に後ろを振り向いてはいけない。前だけを向いて走り続けるの。そうすれば、あなたは本当の幸せを手に入れるわ」
一瞬、脳裏を姉の顔が過ぎった。
「――あなたは、今、自分にとってすべきことを行っていますか？」
優子が問う。直人は頷いた。
「――今からあなたがやることは、あなたがやりたいことですか？」
「ああ、そうだ」
「じゃあ、自分の限界を越えるまで、前だけを向いて走り続けなさい」
「……よし、やるか！」
直人は立ち上がった。優子は手を離す。直人は眼鏡をとった。コンタクトを入れ始めたばっかりなので、少し眼が痛い。
今優子が言ったのがおまじないだ。少し長いが、彼にとって、このおまじないはとても必要なものだった。
これは、親を失った自分に、希望を与えてくれた姉がいつもしてくれたおまじないだ。これのどこがおまじないか、最初は分からなかったけど、なぜかそのおまじないを聞くと…緊張も…不安も…すべて消し飛んでいた。姉がいなくなって間もない今、おまじないをしてくれる人は、優子が敦子だけだ。

「いこう、当麻、陽菜」
「おう」
「頑張ろうね」

直人は、当麻と陽菜と共に、ステージに出た。直人は、まだまだ募る不安を頭の中から追い払いながら、ステージに小走りで出た。

観客席は……満員だった。満員どころではない。椅子は見えなくなり、劇場にいる客全員が立って直人の名前をコールしている。
（もしかして、ユーチューブのおかげかな？」
直人は一ヶ月前に、今から歌う歌を動画としてユーチューブに流していた。それが反響を呼んだのだろうか。
「みなさん、今日は……宜しくお願いします！」
直人は笑顔をみんなに見せた。観客席から瞬く間に歓声が沸いた。
直人は歌いだした。
それは、〈心の欠片〉だった。後に、彼の持ち歌となるその曲は、人々の心を掴んだ。
「がんばれぇ、直人ォ！」
観客席の最前列で敦子は右手を振り上げていた。優子も同様だった。
今、歌っている直人は、すべての嫌な事を忘れていた。顔を知らない両親、つい最近自殺した姉、自分の瞳の色を隠さなければならない理由が分からないこと、すべてを忘れている。考えられるのは、歌を歌うと、心がスッキリするということだ。楽しくて楽しくて、しょうがなかった。
観客席の後ろのほうで、秋元康は、「見つけた」と呟いた。

第四十九話　恩師との過去

ドン・キホーテ8階のＡＫＢ劇場。完成間近のステージで、敦子たちメンバーは踊っていた。激しく身体を動かす少女たちは、夢を追いかけるだけの女の子に見えた。

観客席の後方列、３人の男女が座っていた。左から、夏まゆみ、境直人、秋元康である。

「予定のグランドオープンよりも一週間遅らせて正解だったのかもしれませんね」

直人が呟く。まゆみは頷いた。

「彼女たちはまだまだ見直すべき点がある。一人ずつ指導をするべきだわ」

まゆみは行った。直人も肯定する。康は、両腕で抱える猫に注意を払っていた。

「どこから連れてきたんですか？その猫は」

直人が康に尋ねた。

「君がさっき連れてきたんだろう？」

「そうだったっけ」

直人はあまり覚えていないが、康が言うならそうなのだろう。

「どう思いますか？彼女たちを」

直人は……今度は、２人に尋ねた。

「このままじゃ、この席が満員になることはないわね」

夏まゆみが観客席を見回した。

店員席が、ざっと２５０人だ。２５０人集めるのは、彼女たちにとって困難だ。

「１２月７日の、デビュー記者会見のことなんですが……あなたは本当に参加しないんですか？」

「それは直人君だけで十分だよ。僕は参加しない」

両腕で抱えていた猫が安しから離れていった。

安しは少し残念そうな表情をした。
「康さん、じゃがりこあげます」
「あぁ、ありがとう」
直人は安しにじゃがりこを渡した。近くのコンビニで買ってきたのだ。最初は自分が食べようと思っていたのだが、この際だ、仕方ない。
「じゃがりこは美味しいな」
「ええ、そうですね」
直人は踊り続けるメンバーたちを見る。
みんな、必死だった。それもそのはずだ。グランドオープン、つまり本番まで一ヶ月をきった今、苦手な事があるのはまずい。
優子も苦手な振り付けがあると言っていた。
「ゲームはまだ本編にも至っていない……」
直人は呟きながら、録音機を手に取った。三十分前から録音をしている。
「そういう言葉好きだね」
まゆみが言った。
「なぜか、『ゲーム』っていう言葉を使いたくなるんですよね。何をゲームに例えてるのか、使ってる僕もあんま分かんないんですよね」
「……はは、直人君らしいな」
康がじゃがりこをかじった。
気がつくと、メンバーは疲れ果てていた。倒れている子もいる。
「みんな、だいじょう――」
直人がみんなを心配して立ち上がろうとした時……
「もう動けない奴は観客席に座ってな。動けるものだけ練習を続けな」
まゆみが言った。
「まゆみさん！」
「……あんたは甘すぎなんだ、直人。お前も分かってるはずだ」

「……」
直人はステージの方向に眼を向けた。
カラーコンタクトが、ずれた気がした。
「……確かに僕は甘い。だけど、僕にはこうすることしかできないんだ」
直人は言い切った。そして、ステージに近づいた。ステージにいるのは２５人ほど。そのうち１０人がその場に倒れていた。優子も、その一人だった。
「これじゃ、熱中症になっている人もいるかもな」
直人は、劇場をでた。出てすぐのところに、ぬるめのスポーツ飲料が置かれた机がある。その奥には水道。直人はありったけのタオルを集めて、冷たい水に浸した。
タオルをすべて絞り、再び劇場に入った。
スポーツ飲料とタオルを一つずつ、メンバーに渡していった。次は倒れている者たちだ。エアコンの設備は整っていないし、何より微風が必要だった。
「ほらよ」
いつのまにか、夏まゆみが扇風機を二台持ってきてくれていた。その後ろには同じく風船気を二台持った秋元康。
「ありがとうございます」
直人は倒れている人を全員ステージから下ろした。最後に下ろしたのは、優子だった。
直人は優子を抱きかかえた。
「また……助けられちゃったかぁ」
「これでまた借りができたな」
「またって……どういうこと？」
直人は優子を抱きかかえたままステージを降りた。
「レッスンの初日に昼食奢っただろ？あんときの借りはまだ残ってるぜ」
「何の話かなぁ……？」

「とぼけんなよ」
そう言いながら、直人は優子をゆっくりと最前列の椅子に座らせた。延長コードをつかって扇風機を最前列の前において、微風にして起動させた。
「みんな……がんばろうな」
直人は、聴こえない人もいたかもしれないけど、小さくみんなに応援の言葉を送った。
「ゲームは、もう本編なのかもしれないな」
直人は、録音機の録音モードをオフに切り替えた。

第五十話　族・恩師との過去（前書き）

今回は回想で、恩師との過去を本当に明かします。

第五十話　族・恩師との過去

中学一年生。
初のミニライブは大成功を収めた。
直人はこのミニライブに大満足だった。もちろん、当麻や陽菜も満足していた。３人は汗を垂らしながら待合室でスポーツ飲料を飲んでいた。
「よかったぁ。私のおまじないのおかげかな？」
「そうみたいだ……もちろん、敦子やみんながいたおかげでもあるよ」
直人は微笑んだ。
「あぁ～、すっきりしたぁ」
直人がスポーツ飲料を一気に飲み干した。
と、その時。
「やぁ、お邪魔するよ」
いきなり、待合室に一人男性が入ってきた。小太りのその男は真っ直ぐ直人に近づいた。
「僕は、秋元康という者だ。君に少し用がある」
「なんですか？」
直人は明らかに警戒の目を向けていた。だが、その瞳もすぐに見開かれる事となる。
「僕は君の歌声に惚れてしまったようだ。どうだい？男性アーティストとして音楽界にデビューしてみないか？」
「え？」
「は？」
その場にいる全員が声を漏らした。
直人はそんなこと想像もしていなかった。
「僕はプロデューサーもしていてね。そうだなぁ……『おにゃんこ』も僕が手がけたんだよ。あと、『着信アリ』の脚本とかもやったよ」

「いや、さすがにそれは知ってます」
直人は空になったペットボトルをテーブルに置いた。
「君たちバンドグループ全員で、今度大きなライブをしてみないか？」
「そりゃあ、いい話ですけど……」
「実は……君たちのライブ映像をたったいまサイトにアップしてねぇ、今……一気に１０００人ほど見ているね」
康はさも冗談のように言っているが、直人には冗談のように聞こえなかった。
「どうだい？話に乗ってみるかい？」
尋ねられた直人は、敦子に視線を向けた。
敦子が……姉さんのように思えた。
―姉さん、あなたはなぜ、僕を置いて逝ってしまったの？
その答えが返ってくるはずもなかった。
直人は強い眼差しを秋元康に向けた。
「やります。やらせてください！」
「……よし、決まったな」
秋元康は満足そうに微笑んだ。
当麻も、陽菜も、直人についていくと言って賛成してくれた。
「君たちは、今から二週間後の土曜日に、ある劇場で歌ってもらう。それじゃあ」
康は待合室を出て行った。
「ナオ君、本当に大丈夫なの？」
優子が尋ねた。
「いや、大丈夫じゃない。なんかわかんないけど……」
直人は天井を仰ぎ見た。
「――姉さんが、やれって言ってる気がするんだ……」

第五十一話　心

「あぁ、ほんとにいけんのかぁ？」
ドン・キホーテの休憩室。直人は音楽を聴きながらソファに寝そべっていた。この部屋にいるのは同僚の陽菜だけだ。
「大丈夫？」
陽菜が尋ねる。直人は首を横に振った。
「このままじゃ駄目だな。初公演はチームＡにすることにしたけど……まだまだド素人なんだよな」
直人は言った。それは嘘ではない。
まだ、誰も完璧じゃない。この公演をするために必要な事が出来ていない。振り付けが出来ても、歌が上手くても、まだ足りないものが一つだけある。
それは、観客に見せるための笑顔だ。その笑顔が観客の心に届けば、その観客はいつしかファンへと変わっていく。
直人はそう信じている。いや、確信している。自身も、そうしてファンを増やしていったのだ。いや、ファンが増えた理由が絶対そうだとは限らないが。
「陽菜、ありがとうな。この三年間、ついてきてくれて」
「いきなり何言ってるの？何かあった？」
「……」
直人はイヤホンをとった。そしてポケットからＩｐｏｄ……を取り出したはずだった。だが、直人が今手にしているのは録音機だった。直人は今初めて陽菜と目線を合わせた。
彼はカラーコンタクトをとっている。だから、彼の瞳はアクアブルーの色を宿していた。深海のような綺麗な瞳が陽菜の視線に映った。
次第に、直人の瞳に潤いが生じた。
そして、彼の頬を大量の涙が流れていった。

「どうしたのよ…？」
直人は上体を起こした。それと同時に陽菜が直人の隣に座り、両手で直人の顔を包み込んだ。
直人は声を出せなかった。一体、彼の身に何が起きたのか陽菜には全く理解できなかった。
一分間、その状態が続いた。そして、涙が流れ続けるまま、直人は声を上げた。
「何も……思い出せない……」
「……そんな」
陽菜が悲痛の声を上げた。
「何も…って……いつの事を思い出せないの？」
「……僕は……自分の名前が…分からない」
「そんなことまで……」
「僕が病気で、記憶障害を持っているのも忘れてない……君たちの事も、敦子たちの事も覚えてる。なのに……唯一、想い出せない人がいるんだ……」
「それは誰？」
陽菜が尋ねる。直人の涙はこぼれ続けた。
「姉さんだ……」
「あぁ……写真を探さないと」
陽菜は直人の携帯をとって彼の姉の写真をさがした。
「ひ……な……」
直人はもう涙を流さないが、放心状態になっていた。
「ほら、お姉さんの顔よ」
陽菜が直人に携帯を渡す。
「姉さん……」
携帯に映っているのは直人と姉が幸せそうに笑っている写真だった。
「なぁ、愛奈――」
「また」

「あ、ごめん」
「もう、仕方ないなぁ、これからは愛奈でいいよ」
「……」
いつのまにか、泣いていたのは陽菜のほうだった。
彼女の本当の名前は、愛奈だった。彼女は昔からのその名前が嫌いだった。なぜなら、大嫌いな殺人犯の叔母と同じ名前だったからだ。陽菜という名前は直人が考えたのだ。
でも、彼は自然と、本当の名前を覚えていた。何回か呼ばれた時は、陽菜は嫌がっていたが、直人に呼ばれるのは、自然と嫌ではなかった。
「このまま、僕は君たちの事も忘れてしまうのかな？」
直人が恐れたような表情を陽菜……愛奈に見せた。
愛奈は直人を見据えた。そして、だまったまま直人を抱き寄せた。
女性の甘い香りが漂った。
「例えあなたがすべてを忘れても、私が、すべてを思い出させてあげる」
「……愛奈」
直人は、自分を抱き寄せる少女の名を呟いた。
そして愛奈は、今の状況に罪悪感を感じると共に、嬉しくもあった。
（ごめんね、ななちゃん、許して。私だって、好きな人ぐらいいるんだよ……とっても優しくて、それでいて想いを伝えることができなかったけど、私が持つ彼への想いは、これからずっと変わらないと思う）
愛奈は、声に出さず言った。それは、想い人の――想い人へのメッセージだった。

その頃、直人と愛奈がいる休憩室。そのドアの反対側。それは通路だ。その通路で、休憩室のドアにもたれかかる少女が1人いた。

前田敦子である。彼女は、親がいなくなって情緒不安定となった直人を支えてきた1人だった。姉がいなくなって、境直人という人物を端から端まで知る人物は敦子を含め3人だけとなった。

他の2人は、同じく幼馴染の優子と、彼が一番大事とする恋人ななである。

敦子はずっと、今までの2人の会話を聞き取っていた。直人が「何も思い出せない」と言った時には、敦子は顔を両手でうずめてその場にしゃがみ込んでいた。

「どうしたの……あっちゃん？」

敦子は顔を上げた。彼女に話しかけたのは、優子だった。

「直人が……」

敦子の口から出たのはその言葉だけだった。

「悪化したんだね」

優子は敦子の前でしゃがみ込んだ。

「大丈夫だよ。きっと良くなるから……」

最後は不安であまり言葉にならなかった。

優子は信じていた。信じたかった。

直人が、たかが病気で死ぬわけがないと。

第五十二話　曇り

ＡＫＢ劇場。チームＡのメンバーは、レッスンを始めるためここに集まっていた。後は、彼らの指導を担当する夏まゆみが来ればいいだけだ。夏まゆみが来ればレッスンは開始される。

だが、彼女たちはステージ上で踊っていた。

自主練習だ。彼女たちは、自分たちでも分かっていたのだ。このままでは駄目だと。

初日の公演は、チームＡが担当する。公演名は『ＰＡＲＴＹが始まるよ』だ。その公演で彼女たちは計１０曲の歌を披露してもらう。披露する相手が喜ぶかどうかはまだ分からない。

いや、喜んでもらわないと駄目だ。

「ねぇ、直人君は？」

自主練習の最中、麻里子は敦子に聞いた。

「誰にも会いたくないんだって」

敦子は答えた。その表情は、明るくはなかった。

姉の顔を思い出せなくなったのが相当のショックだったのだろう。姉が映っているのは、愛奈がとっさに見せた、直人の携帯にある写真だけだった。

あの写真がなければ、直人はもう大切な姉の顔を思い出せる事はなかっただろう。

「どうしたんあだろう？」

「さあ、私にも分かんない」

敦子は言った。

「お、やってる」

劇場に夏まゆみが入ってきた。彼女はメンバーを一瞥するなり、最前列中央の席に座り込んだ。

「今日はたっぷり時間があるから、すべて通してやってみようと思ってるから。ステージへ上がる前から、降りた後まで、すべて通す

よ」
ふと敦子はまゆみの手元にラジカセがあるのが気づいた。天井に視線を移すと、まだスピーカーは設置されていなかった。
「はい。裏から入るところからやるから、みんな裏に回って」
まゆみが指示を出した。メンバーはすぐさまステージ裏へと駆け込んだ。

休憩室。
直人はソファに寝そべっていた。愛奈を部屋から追い出した直人の瞳は、輝きを失っているようだった。直人の瞳を見ると、深海の淵を泳いでいるようだ。
彼は放心状態と言っても過言ではなかった。
恋が実らなかった、なんてものじゃない。一番大切だった人、想い出の中で生きるたった一人の家族が思い出せなくなったのだ。
直人は左手に携帯を握り締めていた。その携帯の画面には、姉ろ直人の一枚の写真が映っている。
これを手放したら、また姉を忘れてしまうんじゃないかと、不安でたまらなかった。
ふいに、ドアが開いて横山由依が入ってきた。ちなみに今日は土曜日だ。
「ごめん。今日は1人でいたいんだ……」
直人の声はかすれていた。由依は心配したようにソファに近づいた。ソファの近くに椅子を置いて座った。
「少しだけでも、話できないですか？」
まだ関東の言葉に慣れていないようで、由依の台詞は少し遅かった。
「ちょっとだけにしてくれよ」
直人は瞼を閉じた。
「お姉さんですか？」

由依は携帯を覗き見ていたようで、気になって尋ねた。
「ああ、そうだ。僕にとって、とても大切な人だよ」
直人は答えた。五ヶ月ほど前のＴＶ番組で、直人は家族が誰もいない事を明かしている。中一の頃に、姉がストーカーに殺されたという事も、インターネットで公表した。
それでも尚、公表していない事はたくさんある。
「悪い夢でも、見たんですか？」
由依が心配した。
「まあ、そんなとこかな」
実際は違う。だけど、記憶障害があることを公害してはいけない。知っているのはメンバー内では敦子と優子だけだ。
「世の中には、色んな人がいるよね？」
「え？」
直人は瞼を開けた。
「乱暴な人、優しい人、格好良い人、可愛い人、美しい人……みんな違うよね。例え、血が繋がっていても、愛する人でも、好きなものが同じでも、他人が自分と違うのは当たり前だ。だから、人は……僕たちは、誰かを愛せる。それが、当たり前なんだ。だったら――」
直人と由依の目が合った。
「人を愛せない僕は、誰なんだろう？」
由依は返す言葉もなかった。
きっと、姉を失ったショックをまた感じているのだろうと、由依はそう思った。そう思う事にした。
「ホンマは、あなたを初めて見た時、どうでもいいやとか思ってた。だけど、あなたと話してて、ほんとははこんなにも優しいって思ったよ」
「ありがとう、嬉しいよ」
直人は、目の前の相手が自分を必要としてくれるのが分かった。自分なんて必要ないのかもしれないと感じていたが、それは間違い

だったようだ。

再びＡＫＢ劇場。みんな、息を切らしていた。まだ通し練習は終わってはいない。今は６曲目を踊っている最中だった。

「まだまだ終わらないぞぉ！」

まゆみが声をかけた。チームＡはたとえ練習であっても全力で踊り続けた。

その場に、今まで休憩室に引きこもっていた直人が現れた。敦子は少し驚く。だけど、喜んでいた。直人は黙ったままゆみと同じ列（しかし少し離れた位置）の席に座り、ダンスをじっと見ていた。一人ずつ、確実に、全員。

「やっぱり、来た」

麻里子は、かすかに微笑んだ。

第五十三話　日曜日

日曜日を過ごす学生は、きっと二つの思いを抱くことだろう。
一つ、それは、今日は授業はない！
もう一つ、明日は授業だ……。
昨日まで、辛いレッスンに耐えてきた少女たち。たまには休暇も必要だと直人は思い、朝一時間だけ練習をさせて後は自由行動にした。
直人はせっかくなので、午前は高校のバスケ部の練習に参加した。バスケ部のメンバーは直人の登場に喜んでくれていた。顧問はしていた練習を中止してすぐさまゲームを開始した。彼も直人が来たのを喜んでいる模様。
「おい！そこはこうやるんだぞ！」
直人はディフェンスを軽々と避けてスリーポイントシュートをうつ。
ボールは綺麗にネットを抜けていった。

直人はゲームを十一時に終えて、渋谷を歩くことにした。
もしかしたらメンバーに遭遇するかもしれない。まあ、1人は寂しいからそちらのほうがいいのだが。
「どこいこっかなぁ」
両耳にイヤホンをつけて直人は渋谷の街を歩いた。
少し歩いて直人は脚をとめた。目の前の洋服店に視線を向ける。
「そういえば、友美と会ったのはここだったな……」
あの時は、荷物持ちをさせられて本当の目的を忘れていた気がした。
この半年間、とても短かったようで、長かった気がする。この半年間で色んなことがあった。４８人の少女の出会いの時期。初めて

歌から離れた時期。そして、境直人が変わった時期。
４８人とも、全く異なった人物だった。当たり前のことだ。
「部屋の模様替えでもしようかな……」
そう思いながら、直人は雑貨店に立ち寄った。
彼の家は、生まれた頃から同じだ。マンションに住み替えようとも思ったが、今住む家には数え切れない思い出がある。なかなか離れることができなかった。
雑貨店に入った直人は、本棚などを見て回った。彼の家にはたくさんの本棚と、スピーカーがある。
直人の家は皆で洋館と呼んでいる。それは屋敷が広いからだ。一戸建ての家に１人暮らしという上京はあまり愉快ではない。直人はそう感じて、家に音楽を流すことで寂しさを消している。
友達に家に泊まってもらうのも、寂しいからなのかもしれない。
「あれ？」
雑貨店を見て回っているうちに、直人は知っている人物に出会った。
「あ、直人？」
宮澤佐江だった。携帯で誰かと会話している。
「あ、ママ。後でかけなおすねぇ」
佐江は母親と電話しているようだった。電話を終えて佐江は直人に向き直った。
「あなたもここに来てたんだね」
「まあね。僕１人暮らしだからさ」
「あぁ、そうだったねぇ」
佐江は相槌を打った。
「せっかくだから、一緒に他の店行く？」
「いいね」
直人は微笑んだ。
「じゃあ、早く行こう」
佐江が雑貨店のドアを指差す。

「じゃあ、行こう。もうちょっとで昼時だ」
直人は佐江の手を握った。そのまま引いて雑貨店を出て行った。
「うわ、強引だねぇ」
「僕はどちらかというと肉食系でね。さあ、行きたいところは山ほどあるよ」
「佐江も山ほどあるかなぁ」
佐江が直人の横の位置までたどり着いた。歩道は人でいっぱいだった。だが、その大半が直人に視線を巡らせていた。
「あの人、格好良いなぁ……」
「あれ、境直人じゃないの？」
「ほんとだぁ。女の子と手繋いでるぅ。いいなぁ」
周りから女性の声がいくつも聴こえてくる。佐江はきっと彼のファンだろうと思った。それは正解だ。彼は優しくてイケメンだと思うし、学校では女子に人気があると敦子から聞いた。それも分かるような気がする。
「色々見て回る前に、お昼にしない？」
「いいね。マクドとか？」
「ファーストフード好きなの？」
ちょっと意外だなぁと、佐江は心の中でそう思った。

第五十四話　日曜日のハンバーグ

「何が食べたい？」
直人が佐江に尋ねた。
「直人は？」
「う～ん、ハンバーグ、かな？」
「おぉ、グッドタイミングだねぇ」
そう言いながら佐江は目の前の店を指差した。その店はハンバーグをメインとするレストランだった。
「じゃあ、あそこにしよっか」
佐江は頷いて、今度は彼女が直人の手を引いた。先程からずっと握ったままだったので、直人は手汗大丈夫かな？などと心配していた。なぜずっと握っているのかは考えていなかった。
「あ、境さん！また来てくれたんですね？嬉しいなぁ！」
「久しぶりだね、恵美ちゃん、元気だった？」
「はい！とっても元気です！」
レストランに入るなり、若い女の子のアルバイト店員が出向いた。その女の子は直人と知り合いのようで、佐江は話に入り込めなかった。
「あ、境さん、彼女さんですか？」
恵美と呼ばれた少女は佐江を一瞥してから直人に尋ねた。
「いいや、違うよ。でも、大切な友人かな」
「そうなんだ……」
恵美はふっと安堵の息を吐いた。
「どうかした？」
それを見て直人が心配した。恵美は首を左右に振って応えた。
「席に案内してくれるかな？」
「あ、そうだった……2名様、ご案内です！」
直人と佐江は窓に近い席に案内された。四人分の席に2人は向か

い合って座った。机に携帯などを置く。
「それ、録音機？ちょっと聞かせてよぉ！」
「駄目だよ」
「じゃあそこに置かないでよぉ」
「仕方ないだろ。ジーンズなんだからポケットにいれてたら座れないだろ」
「どのズボンだって一緒ような気もするけど」
「早く食べたいもの探せよ」
「ああ、話そらしたぁ」
傍から見れば、佐江と直人は恋仲に見えただろう。だけど、実際は親と子のような関係だ。何せ、直人は彼女をアイドルとしてデビューさせなければいけなくて、彼女はアイドルである直人に様々な事を学んでデビューしなければならないのだ。
「はい、お水でぇす」
２人が仲良く喋っているのを邪魔するかのように恵美が水を運んできた。
「僕、チーズハンバーグで」
「あ、じゃあ私はダブルチーズで！」
「かしこまりました」
恵美は２人の注文を聞くなり、厨房の方へ向かった。
「さっきも思ったんだけど、２人って知り合い？」
「まあね。ここに来たことあるのは一回だけなんだけど、恵美ちゃんは……インターネットのあるサイトで知りあってたまたま会ったってわけ。なんていうのかな？掲示板、ていうんだったっけ？みんながインターネット通じて会話する奴」
「まあ、掲示板、かな？私、読むのは得意じゃないからそういうのも良くわかんないや」
「そうなんだ。じゃあ小説も読まないほう？」
「うん、そうだね」
佐江が人差し指を自分の顎にあてた。何かを考えているのだろう。

「ねぇ、メアドってどれくらい持ってる？」
「数えたことないな……８００人くらい？」
「嘘！マジで！凄いなぁ」
「外国にも友達いるからねぇ」
「じゃあ、あの恵美って子のメアドもある？」
「ああ」
「ふーん、ねぇっと履歴見してよ。メールの履歴」
「別に構わないけど、つまんないよ？」
直人は机の上に置いてある携帯を佐江に渡した。
「うわ！女の子ばっか！あれ？あっちゃん、優子、由依ちゃん、麻里子――ｅｔｃ……すごいメール量」
「ｅｔｃは言わなくても良かったんじゃ？」
「それで……」
直人の小さなツッコミは遮られてしまった。
「佐江の予想だけど、あの子絶対あなたに気があるよ？」
「恵美のこと？そんなのありえないだろ」
「直人って、意外に鈍感なんだね」
「鈍感？」
直人は、佐江の言っている鈍感の意味が良く分からなかった。

第五十五話　ファーストキス

「へぇ……そう見える？」
「見える見える。佐江は絶対そう思う」
直人は本当に分からなかったらしく、首を傾げていた。
「そういえば、雑貨店でお母さんと話してたよね」
「うん……実は佐江、人見知りで、店員さんに話しかけることさえ出来ないんだよね」
「あぁ、だからお母さんと」
直人は納得したように相槌を打つ。
羨ましいな……と思った。佐江には仲の良い母親がいるが、自分にはいない。あの交通事故さえなければ、今頃母と仲良く紅茶でも飲んで笑いあっているのだろうか。そんなの、夢でさえ見られない光景だ。交通事故がなければ――いや、自分が生まれてこなければ、あの交通事故だって起きなかったかもしれないじゃないか――――。
「どうしたの、直人？」
「え？」
「泣いてるじゃん？」
そう言いながら佐江が右手を彼の頬に近づけてふき取ろうとした。だが、直人はその手を遮った。
「いや、君の話が可笑し過ぎて、つい」
「えぇ！何それ！ひっどぉい！」
佐江が手を直人から離す。苦し紛れに言ったのだが、どうやら誤魔化せたらしい。
女の子に弱い所は見せたくない。
「あ、そろそろ来たね」
気がつくと、恵美が二つハンバーグを運んできた。直人の前に置かれたのが、チーズハンバーグとう名称のハンバーグ。佐江の前に置かれたのが、それにさらにチーズを加えたダブルチーズハンバー

グ。
「ありがとう」
「ありがとね、恵美ちゃん」
「いやいや、仕事ですから」
恵美はお辞儀をしてから去り際に佐江に話しかけた。
「佐江ちゃん」
「何？」
「彼、恋愛経験豊富だから、キスの経験も多いんですよ？」
「おい――」
直人が何か言おうとする前に、恵美は厨房へ逃げていった。
「へぇ、ファーストキスはいつなの？」
聴かれて直人は少し戸惑ったが、答えることにした。
「小5」
「相手は？」
「彼女」
「え！彼女いたの！今も付き合ってる？」
「ああ」
「うわ！すっごく長い！」
佐江は驚いたような表情をした。
「どんな子なの？」
「…ちょっと待って」
直人は机に置いてあった携帯を開けて佐江に渡した。
「うわ！直人、なんか太陽の匂いがする」
「どんな匂いだよ」
「細かいことは気にしない。するもんはするの。直人全体から」
きっと、携帯を手に取る時に匂ったのだろう、その，太陽の匂い，とやらは。
「へぇ、すっごく可愛いじゃん！」
「だろ、君とは大違いだ」
「もう、さっきから思うんだけど、あなたたまに人からかうよね？」

「からかうのは君だけだよ」
「えぇ！なんでぇ！？」
「さぁ、なんでだろうね」
直人は誤魔化し、携帯を無理やり佐江からとった。
「君とは気が合うかもしれないな」
「会ってみたいなぁ」
「今度デートするときに君も連れていってあげるよ」
「それじゃデートにならないじゃん」
そうだな、と佐江のツッコミに応えながら携帯を閉じる。
「キスは何人とした？」
「3人。そういえば、珍しい時もあったな」
「へぇ、聴かして？」
「いいよ」
ハンバーグを一口サイズに切り取り、口にほうばった後、直人は話し始めた。
「女の子が交通事故に遭いそうになって、助けたんだよ。その時、女の子からお礼にってキスされた。僕も女の子も中三だったな」
「なんか、ドラマみたいな話だね」
佐江はそう感じた。
「あっちゃんと優子は幼馴染なの？」
「うん、そうだよ」
直人は塩をかけたご飯を口に運ぶ。
「あ、辛い」
塩をかけすぎてしまったようだった。
「佐江のはちょっと塩が足りないかな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3985u/

AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

2011年9月27日03時13分発行